注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
銀河英雄伝説外伝ＩＦ　辺塞寧日編　ヤン艦隊日誌

【作者名】
白詰草

【あらすじ】
銀英伝　原作本編１～２巻と外伝２巻のころのヤン艦隊の人々の毎日を描くサイドストーリー集です。いわば、大人たちのイゼルローン日記。要するに地味な話になります。筆者に軍事的知識は皆無ですので、それっぽい台詞は雰囲気で流してください。オリジナルの人物は、サブキャラとしてのみ登場します。この小説は「らいとすたっふ２００４ルール」に基づいて作成されています。
平成２４年１０月３０日より、続編にあたる『銀河英雄伝説　ヤン艦隊日誌追補編　未来へのリンク』の投稿を開始しました。平成２５年１月１９日より、この話の未来編にあたる『銀河英雄伝説　仮定未来クロニクル』の投稿を開始しました
※この小説は、すぴばる小説部、ｐｉｘｉｖにも「銀河英雄伝説外伝ＩＦ　辺塞寧日編」の名称で投稿をしています。

1．珈琲を一杯

「ミルクでなく、砂糖ではなく、ブラックで」

「ワインやウイスキーと同じだ。いい味が出るまで時間がかかる」

被保護者から、分艦隊司令官の言葉を伝えられたイゼルローン要塞の司令官は、ややほろ苦い表情で、脱いだベレーを左手の指先でくるくると回した。近いうちに、艦隊の出動があるのかと問いかけた亜麻色の髪の少年に、そうならないことを祈っていると穏やかに答えを返す。

被保護者に見せたのはそれだけだったが、彼の職場では無論事情が違う。

「まったく、困ったものだ。兵員補充の大半が、新兵と警備隊所属者だとは」

ムライ参謀長の言葉に、パトリチェフ副参謀長も同意した。

「お偉方の考えそうなことですなぁ。自分たちのそばに熟練兵を置いて、

ハイネセンだけ無事に残っても、どうしようもないでしょうに」

「精兵とアルテミスの首飾りに、よほど信をおいているのでしょう」

フィッシャー副司令官が、淡々と応じる。司令官のヤンは、ベレーを脱いでから髪をかき回し、また被り直した。豊かな長めの黒髪が、ベレーの下から思い思いの方向にはみだしている。

ムライは渋い顔をしたが、口に出しては咎めなかった。穏やかな上官のこの癖は、表情を隠すためのものであると察していたからである。

「アルテミスの首飾りか。あんなものは気休めの玩具だがね。どうにでもできるし、どうにもしなくても別に構わない。惑星ハイネセンへの物資輸送網が封鎖されれば、一週間もせずに干上がるしかないからね。まあ、第十艦隊の熟練兵も少ないながら来てくれているんだ。手持ちでなんとかするしかないだろうね」

温和な口調で、司令部一同がぎょっとするような台詞を吐くのが、ヤン・ウェンリーという軍事的天才の計り知れないところだった。彼の奇策の前に、宇宙的な難攻不落の代名詞、虚空(イゼルローン)の女王は陥落した。ヤンが、ハードウェアを過信することはない。それを動かすのは人だからだ。

「やはり一番の問題は、統一行動の不備による火力集中のばらつきでしょうなぁ。司令官の号令以下、複数の艦艇がコンマ二桁以下の秒差で、敵の一隻に主砲を斉射というのは、新兵には困難でしょうよ。しかも、こちらも相手もそれぞれに動いているときていますからな」

山積している問題の核心を、整理して過不足なく表現できるのがパトリチェフの美点だ。

ヤンは小さく頷くと、銀色の頭の持ち主に向き直り、軽く頭を下げた。

「艦隊運用のほうは、フィッシャー提督のおかげでそれでも形になってきたんだが。

本当に感謝するよ。だが、努力には限界がある。
熟練に至るまでの時間が得られればいいが、そうとは限らない。
戦術ソフトウェアを工夫して、艦隊運動の省力化を図るぐらいしか思いつかないな」

「なるほど、陣形のパターン化ですかな。閣下がアスターテでなさったように」

堂々たる体格にふさわしい、朗々としたバリトンで、パトリチェフが間の手を入れる。

「ああ、それも一つの方法だね。
ただ、あの時とは違って、長期戦も視野にいれなくてはならない。
陣形を変更する際の移行形態を含めて行う必要があるだろう。
もう一つには、砲手の負担の軽減になるかな。
グリーンヒル大尉、麾下艦艇の砲撃を、旗艦や分旗艦で任意に集中管理するのは、
技術的には可能だろうか。旗艦周囲の１０隻程度で、ここぞという時でいいんだが」

「閣下、不可能ではありません。ただし、その戦艦が敵艦と交戦している時に、
別の敵艦を強制的に攻撃することにならないよう、調整が必要かと思います」

「結局は、艦隊運用で適正な陣形を保つことに帰結いたしますな」

ムライ参謀長の結びの言葉は、付け入る隙のない正論であった。戦略戦術の勝者は、九割九分が準備をよりよく整えた方だ。それを痛感するヤンではあるが、言葉には嘆息が混じる。

「そういうことになってしまうんだよなぁ。
これば かりは演習で艦隊運動を反復するしかない。
ただ、できるだけ陣形構築の単純化とパターン化を図るようにしよう。
とりあえず叩き台を作るから、皆協力をしてくれ。
フィッシャー提督には特に面倒をお掛けするが、よろしく頼むよ」

「はい、閣下」

初老のフィッシャー少将は、艦隊運用の名人である。アムリッツァの敗戦で、第13艦隊は殿軍（しんがり）を務めた。その中で七割を越える帰還率を誇ったのは、彼がいたからこそだ。

ヤンはそう思い、彼に敬意を払っているが、フィッシャーの意見はいささか異なる。艦隊運用の名手がイコール名指揮官ではない。息子のような年齢の若き黒髪の司令官。その天賦の才には、心から感嘆する。

司令部の最年長者でさえ心酔しているのだから、他の部下たちも推して知るべしである。ヤン艦隊司令部の人間関係は、非常に良好であった。

「それからグリーンヒル大尉、要塞防御部や空戦隊とも連携が必要になる。
今週中に、ブリーフィングの予定を組んでくれ。
戦術コンピュータとオペレーション部門の責任者も参加を」

「はい、閣下。調整をさせていただきます」

『ヤン提督の会議好き』と揶揄（からかい）半分に言われたりもするが、どんな名将も軍勢なくしては戦えない。指揮官の思考を、いかに麾下（きか）艦隊が実

践できるか。手足を動かすのと一緒だ。訓練に次ぐ訓練で、反射行動の域まで叩き込むしかない。

それでも、手足だって頭の考えることを知っていなくては動かしようもない。この場合、頭と手足の所有者は別人で、後者が遥かに多数なのだから。互いにこんがらがって転ぶのがおちだ。転倒の代償は人の命。そう思えば、言葉を尽くし、説明を重ねなくてはならない。自分の事ならば、理解しようとしない相手に理解をしてもらわなくとも構わないのだが。

「さて、３０分休憩後にモデル作成に入ろうか。とりあえずは解散だ」

ヤンの号令で、司令部の面々は一旦散会した。彼は会議をよく行うが、だらだら長々とはやらない。戦略戦術の目的に対して、自身が明確な指針を持っているからだろうか。それを他者に伝え、自分が他者の意見を取り入れる場としているようだ。参謀長のムライは、そう捉えている。

それにしても、人は変わるものだ。休憩のあいだ、パトリチェフ准将とその話になったのだが、彼らが初めて顔を合わせたのは、エコニア捕虜収容所の事件によるものだ。あの時、どうしていいのか分からないといった風情だった黒髪の青年が、今や同盟軍のナンバー3だ。同盟軍史上でも数少ない、二十代の大将である。当時と大して外見が変わっていなくてもだ。

「小官が宙港までヤン少佐を出迎えにいったんですが、会った時はびっくりしましたよ。

まだ大学の2、3年に見えましたからなぁ。なによりもかなり痩せていまして、

倒れやしないかとはらはらしました。立体ＴＶだと、本人の大きさがよく分からんでしょう。

失礼ながら、シトレ退役元帥は比較対象の基準に向いているお人ではありませんし」

当事、エル・ファシルの英雄としてさんざん喧伝されたが、特によく報道されたのが
恩師だったシドニー・シトレ中将と握手をするシーンだった。シトレ中将（現退役元帥）は、二メートルになんとする、黒い肌の偉丈夫である。中肉中背のヤンが、彼の前では子供に見えるほどだ。司令官より遥かに体格で勝るパトリチェフでも、身長では頭半分は低いだろう。

だが、これは自身を相当高い棚に投げ上げた発言だ。彼の身長はヤンよりも頭一つ高く、2倍とまではいかないが、1．8倍くらいの体重差があるのだから。

「たしかに。アムリッツァの後でも大分痩せられて、ようやく少し戻ってきたようだがね。
心労から過食するタイプと、食が細くなるタイプがあるが、ヤン提督は後者のようだ」

「まあ、背負っている責任の重さを考えれば無理のないことですがね。
我々では決して肩代わりができませんからなぁ」

エル・ファシルの脱出行は、惑星警備隊のリンチ司令官が、住民を見捨てて逃亡したのが原因だ。
まだ中尉だった21歳のヤンは、上官から押し付けられた民間人三百万人の避難の準備を進め、逃亡した司令官を囮にして脱出したのである。レーダー透過装置を切り、帝国軍の先入観を利用して、避難船団を流星群に見せかけて。その冷静さと大胆さ、そして辛辣さが名将の萌芽だったのかも知れない。

当事は、軍部の失態を糊塗するための美談、偽りの英雄などとも陰口を叩かれた。しかし、三百万人の民間人が助かったのは紛れもない事実である。それを成し遂げた21歳の中尉の人気は凄いものだった。かのローエングラム候のような、飛び抜けた美青年ではないが、いかにも温和で知的な優しい容貌である。よくよく見れば、そこそこのハンサムでもあったし。

表面上はそんな花形のエリートが、あんな辺境の捕虜収容所にやってきたら、それは誰しも何事かと思うだろう。当時の捕虜収容所の所長もその一人だった。三百万ディナールを越える公費の横領をしていた彼は、後ろ暗さからか過剰な反応をした。捕虜の不満分子に偽りの叛乱を起こさせ、ヤンとパトリチェフを謀殺しようとしたのだ。それぞれを、横領を解明して死した英雄と、その犯人に仕立て上げるために。

だが、捕虜たちのまとめ役の老大佐の機転により、彼らは叛乱の場から逃れて、所長を逆に拘束する。その事件の解明に、惑星エコニアが所属していた管区の参事官として調査に訪れたのがムライ中佐だった。彼は所長の横領の証拠を早々に固めてしまい、エコニアに到着した時には、事件に片は付いていたのだ。

この鮮やかな手腕には、ヤン少佐も賛辞を惜しまなかった。だが、ムライ中佐も密かに驚いていたのである。任地に到着したその晩に、捕虜の叛乱を嗾(けしかけ)けられて殺されかけ、所長も副所長もそろって任を果たせない状態だ。

ナンバー3のヤン参事官がやるしかないと言えばそのとおりだが、現場の保全や負傷者の治療、死亡者の遺体の収容など、一通りのことがきちんと完了していた。最初の一報から、ムライが到着する二日のあいだに。

この頼りなさそうな21歳の少佐には、人をつかう才能があるのかもしれない。実際には部下がやったにしても、仕事を割りふり、きちんと指示を通すというのは難しいものだ。しかも、昨日今日来た余所者として、反発されてもおかしくない状況で。それはパトリチェフ大尉の功績でもあった。彼の陽気で気さくな人柄が、絶妙なクッション役になったのだ。

彼の『複雑な状況を要約して、過不足なく表現する』説明のおかげだったが、それを見抜いたのもヤンである。ほんの一年前は士官学生で、二ヶ月前まで下っ端中尉だった者の眼力ではなかった。

後に聞くところによると、ヤン・ウェンリーはやり手の恒星間交易商人の父を持ち、幼いころからその船に同乗していたのだという。ヤンの父、タイロンは『金育ての名人』と渾名(あだな)され、部下を動かすのはもちろん、商売相手とも良好な関係を築くのが上手だったという。幼いヤン少年は、その父の背から多くを学んでいたに違いない。

あれから八年。29歳のヤン大将は、今も線の細い青年だ。大学生が大学院生に進級したぐらいにしか、歳を重ねたようには見えない。

しかし、人をつかい、人の上に立つ才能は、見事に開花した。たとえば、人材を見抜いて配置すること。そして、信頼に足る部下にはかなりの裁量権を持たせている。苦手な部分を誰かに補ってもらうことを躊躇したり、逆に虚勢を張ったりもしない。だが、一見丸投げに見えても、実は要所をおさえている。物事の根幹を理解している証拠だ。そして、決定責任は自分が負うことを明確にしている。まあ、これは決裁権に複数の関門を設けてあるからだ。組織運営者としてもなかなか巧妙である。有能な怠け者などと俗に言うが、完全にそのタイプであろう。

これらの美点と、あの天才的な用兵手腕があれば、周囲も有給休暇

を完全消化するぐらい大目に見ようという気になる。あまりおおっぴらには言えないが、昼の休憩が少々長いことも。むしろ、彼が勤勉の美徳を発揮しだすと、遠雷が近づいてくるような気さえする。

「そうでもないだろう。貴官の作戦行動の要約書は、非常に簡潔で明快だ。
今後の戦術会議でも、大いに手腕を発揮してもらいたい」

「そうおっしゃっていただけるとありがたいですな。
なにせ小官は、ややこしい事が苦手でしてね。まぁ、大体の人間はそうだと思うのですが。
ただ、自分なりに要約しているだけですので、ヤン提督の意図するところと食い違いがないか、
参謀長にもよく確認をしていただかないと。では、コーヒーの一杯も貰いましょうや」

「そうだな。ところでパトリチェフ少将、貴官は近々出動があると思うかね」

「小官としても、ヤン提督と同じように願いますよ。
ストレスと食欲の話ですが、小官は完全に前者のタイプでしてなぁ。
これ以上になりますと、軍医に教育入院だと脅かされておるんですよ。
薔薇の騎士（ローゼンリッター）の訓練ばりの運動療法が待っているそうです」

パトリチェフは頭を掻いて苦笑した。竦めた肩はがっしりと厚く、そこから伸びた上腕は、黒髪の司令官の腿ほども太さがあった。ムライもそれに不器用な笑みで応じた。

「貴官の健康問題の方が、手に余る件かもしれんな。

とりあえず、コーヒーはブラックにすることから始めてはどうかね？」

2. 解語の花々

「それにしても帝国軍の将官は、ローエングラム候を筆頭に美男子揃いだね」

穏やかな賞賛の声を上げたのは、イゼルローン要塞司令官兼駐留艦隊司令官の
ヤン・ウェンリー大将だった。
帝国からの捕虜交換の申し入れを政府が了承し、式典に向けて帝国側の代表者についての
連絡を受けてのことである。
要塞事務監アレックス・キャゼルヌ少将以下、それに関する手続きに奔走する事務部門を
よそに、最高責任者は暢気なものだった。

捕虜交換式の帝国側代表となったのは、ローエングラム候の腹心、キルヒアイス上級大将。
１９０㎝の長身に、燃えるような赤い髪と深い青の瞳の、なんとも感じのよい好男子だ。
温和で誠実な為人（ひととなり）であろう、というのが顔立ちからも伝わってくる。

「閣下も素敵でいらっしゃいますわ」

黒い髪と黒い目の、軍人というより学者といった風貌のヤンは、軽い笑い声をあげて副官のフレデリカ・グリーンヒルに応じた。

「ありがとう、グリーンヒル大尉。お世辞でも嬉しいね」

「そんな、お世辞では……」

温和な笑みを向けられて、美貌の副官の白い頬が微かに赤らむ。
決裁の済んだ書類を携えて、彼女は退室した。

「閣下も罪なお人ですな」

要塞防御指揮官が、呆れを含んだ声で小さく呟く。

「なにか言ったかい、シェーンコップ准将」

「いえ、何も。確かに閣下は、顔立ち自体は悪くありません。
あの金髪の坊やは無理でしょうが、
赤毛の坊やにはそう見劣りはいたしませんよ。
気迫を今五つばかり増やすようになさればね」

そう上官に告げた彼の方こそ、灰褐色の髪と目に彫りの深い端正な顔立ちの持ち主だった。長身と、同盟最強の白兵戦技の持ち主にふさわしい体格。ワルター・フォン・シェーンコップである。その姓が示すとおり、帝国からの亡命者の孫である。『もしも』があったら、ローエングラム候の麾下（きか）の一員であったかもしれない。

「そんなに慰めてくれなくてもいいさ。私だって毎朝鏡は見ているからね。
それに貴官らのような、正真正銘の美男美女に言われても説得力がないな」

合計４００万人もの双方の捕虜と、彼らを迎えに来る船団と。それを受け入れるイゼルローン要塞の防御指揮官としては、いくらでも用事があるのだった。
ヤンは、部下にもかなりの裁量権を持たせていたが（要は丸投げともいうが）、司令官の判断が必要なものが、後から後から生まれてく

る。そういう事情もあって、司令部にシェーンコップ准将が足繁く出入りしている。

「本当に、美男子揃いですね。
ローエングラム候は別格という感じがするけれど、
ロイエンタール提督も頭一つ抜けている感じがします」

従卒として、ヤンの元に紅茶を運んできたユリアン・ミンツも同意した。
彼もまた、亜麻色の髪に暗褐色の瞳の繊細な美貌の持ち主だった。

ヤンとしては、なんだかなぁ、という思いがする。
相変わらず、素晴らしい芳香の湯気を顎にあてながら、
ローエングラム候と部下について気付いたことを呟く。

「そういえば、二人とも貴族号（フォン）がつくね。貴族出はもう一人いるが」

右目が黒、左目が青の金銀妖瞳（ヘテロクロミア）に、王侯貴族そのままの風格を持つのがロイエンタール大将。冷たいほどに整った、男性的な美貌である。上官とどちらが女性にもてるかと問えば、彼に軍配が上がるだろう。

オーベルシュタイン中将も、冷淡な表情で損をしているが、十分に端正で気品のある顔立ちである。

「権力の使い途は、古来より変わらないようですな」

「人間は進歩のない生き物だからね。
だが、帝国貴族にとっては、古くからの知恵を生かした、
問題回避の手段だったのかもしれないよ」

「提督、どういうことですか？」
被保護者の質問に、彼はベレーを脱いで納まりの悪い髪をかき混ぜた。
「ユリアン、美人はどうして美人なんだと思う？」
「小官には聞いていただけないので？」
「君にはするまでもない質問だからね」
シーツ上でも白兵戦の名手に、さらりとした返答を返す。
「やっぱり、目鼻立ちが整っていることでしょうか」
「うん、そのとおりだよ。目鼻を乗せている骨格から美人は美人なんだ。
俗に皮一枚なんていうが、実際は違うんだからな。持たざるものには切ない話さ」
頭蓋骨ならば、左右の均整と、立体的な造形の調和。
身体の方も長い四肢と、男女の性別に応じた、肩幅や胸囲、胴囲のコントラスト。
その発現を制御するのは遺伝子である。
「まだ遺伝子学が緒（ちょ）についたばかりの西暦２１世紀初頭のことだ。
様々な人種のＤＮＡを調査したところ、容姿に恵まれた人は遺伝子の変異や
欠損が標準より少ないという結果が出たんだ。
あちらには劣悪遺伝子排除法があるだろう。マクシミリアン晴眼帝によって、

一応は有名無実になったがね。古い権門ほど、大きな影響を受けていると思うよ」

「つまり、古式床しい方法での遺伝子の選抜だとおっしゃる？」

片眉を上げた元帝国貴族の端正な顔に、黒髪の司令官は頷いた。

「最初の頃はね。それに有名無実化されても、
出生前診断や遺伝子治療の実施までには至っていないはずだ。
特に貴族にとっては切実な問題だろう」

「なるほど。実に説得力のある話ですな」

「ここまでは生物学的な美貌の話だが、社会学的な面もあるんだ」

ユリアンは首を傾げた。

「美貌の社会学ですか？」

「そうだよ。美貌は富貴によっても造られるし、富貴な人々が美の基準にもなる。
古来からの権力の使途は、密接な関係にあるんだ」

豪奢な食生活による顔の骨格の変化。顎は細くなり、歯並びが整い、鼻筋が通ってくる。
栄養と清潔を保てるからこその、なめらかな肌と豊かで長い髪、炎症のない澄んだ瞳。
明眸皓歯（めいぼうこうし）とは、人類普遍の美の基準だ。
そして栄養状態は、身長にも影響を及ぼす。
地球北半球出身の人種に共通する、白い肌への賞賛も、過酷な労働に従事しなくてよいという富貴の証なのである。

そして、支配階級の容貌が美の基準になっていく。
銀河帝国の門閥貴族たちは、まさにその典型であった。
「その結晶がローエングラム候と姉君なんでしょうか」
「どうだろうね。彼らはもともとは貧乏な帝国騎士（ライスヒリッター）の出のようだが」
「小官もそうですよ」
抜け抜けと言い放つ不遜な色男を、半眼になった漆黒が横目に見やる。
「ああ、はいはい。まあ、それだけ貴族階級が狭いということだろうね。
ユリアン、貴族階級はどの位いるんだったかな」
「はい、ええと、爵位を有する貴族が約五千人強、帝国騎士は……」
「そっちを数えるのは無駄だぞ、坊や。金で買える地位だし、
爵位持ちでも次男三男は帝国騎士になったりするんでな。
小官の本家も男爵家でしたから、血縁を辿り始めたらきりがありませんよ」
「なるほど。
五千人とはいっても、皇帝と婚姻できるような家柄となると両手の指におさまるだろう。
フリードリヒ四世の荒淫というのも、跡継ぎを得るための必死のものだったのかもしれないな」
階級が固定化されると、身分格差のある者との婚姻は難しくなる。

権力と富を独占してきた人間は、新たな競争相手を排除するからだ。
かくて、血脈の糸は、いつしか檻の格子となる。
銀河帝国の帝室では、それが五百年近く続いてきた。
フリードリヒ四世のように、低い身分の女性でも寵姫（ちょうき）として召すようにでもしなければ、新しい血を入れることはできないのかもしれない。遅きに失したようだが。
「生まれた子は一個小隊ほどもいるが、成人できたのは女性二人だけだそうだよ。
皇位を継ぐのは男子、というルドルフの遺訓がいつまで守れるのかな。
いまのところ、ローエングラム候の姉上には子どもがいないそうだから」
ヤンは穏やかな声で続けながら、黒い眼がローエングラム候の輝かしいほどの姿を凝視していた。そして、もう一人。彼の影とも言える男の瞳も。
「提督、どうなさったんですか？」
「ああ、ユリアン、ルドルフの悪法で、本人と子孫が最大の不利益を被るというのが
皮肉だと思ったのさ。同盟では遺伝子診断や治療に制限をしていないけれど、
実は全く別のアプローチをしているんだよ。こいつも古くからの知恵なんだ」
黒髪の司令官の言葉に、白兵戦技の師弟は揃って怪訝な顔をした。

「提督、どういう方法ですか？」

「小官にも教えていただきたいものですね」

「これも貴官には教えるまでもないだろうけれどなぁ」

ヤンは、もう一度髪をかきまわした。

「異人種間の混血だよ。同盟の人間は大体がそうなんだ。
雑種強勢というのは、人間にもあてはまる話だからね」

つまりは、両親の人種の強健な面を兼ね備えるのだ。
混血の人間に、美貌の持ち主が多いのは古来より知られるところだが、実は遺伝子異常も減少する。
人種特有の遺伝的弱点も、相手から受け継ぐ染色体で継ぎ（パッチ）が当てられるためだ。

「その代わり、金髪碧眼の美男美女というのは現れにくくなるな。
肌や髪、眼の色は、濃い色が優性遺伝するからね」

「言われてみますと、帝国では閣下のような漆黒の髪や目というのは珍しいのですよ。
小官の幼いころの記憶ですがね。親戚や近所にはおりませんでした」

「そうなんですか、シェーンコップ准将」

「覚えている限りだがな。俺や坊やのような色が多いんだ。
この金髪の坊やも珍しい部類だがね。
小官が同盟に来た時に、一番驚いたのがいろいろな容貌の人間がいることでしたよ」

「民主主義の国らしくて私は好きだよ。
みんな違ってみんないい、と昔の詩人がいったようにね」

ルドルフは、ゲルマン系の人種のみを珍重し、劣悪遺伝子排除法によって、受けられる医療まで禁忌とした。その報いを、輝ける新たな星が下そうとしているのかもしれない。

そして、いま一人。パウル・フォン・オーベルシュタイン。
彼の眼は生来から欠損し、光コンピューターによる義眼を使用しているという。
同盟であれば、出生前から治療を開始し、己の瞳で世界を見つめていただろうに。
冷厳な人工の視線に秘められた、それは怒り。
それが氷の剣の如く、黄金樹を切り裂くだろうという予感がした。

「たしかに、いずれが菖蒲(あやめ)か杜若(かきつばた)といった風情ですからな」

意味ありげに笑う年長の部下に、年少の上官は頼りない肩を竦めた。

「確かに諺の使い方としては正しいが、そういう文化に染まるのもいかがなものかと思うな」

「提督、立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花、とは違うんですか？」

と、これは被保護者からの質問だ。対照的な師弟に、ヤンは三度髪をかき回した。

「どちらも美女への褒め言葉だが、複数形と単数形の違いだよ。

ユリアン、願わくばおまえはそのまま成長してほしいな。
まあ、顔で戦争をやるわけじゃないのは救いだね。
容貌と才能は必ずしも一致しないということも」

やや強引に話題を変えるヤンに、シェーンコップは言った。

「それは、顔と中身が一致していたら、あの金髪の坊やには勝てないという敗北宣言ですかな？」

意地の悪い部下の揶揄に気を悪くした様子もなく、ヤンは応じた。

「当然だろう。私は勝算のない戦いはしない主義だからね」

「さもなくば、才能と顔が一致するなら閣下はローエングラム候に匹敵する美貌になると？」

「残念ながらそうはならないよ」

首を振った黒髪の青年は、優しいほど静かな笑みを浮かべた。いつもの茫洋とした印象が拭い去られ、意外なほど整った繊細な造作が現れる。

「さぞや醜い、卑しい顔になるのだろうさ。まともな人間なら正視を躊躇うような。
私も、ローエングラム候も両方ともね。そうならずに済むのはありがたいことだ。
私はどうってこともないが、彼までそうなったら宇宙的な損失だろう？」

1. オープンデック

「ポプラン少佐、スパルタニアンの新運用はものになりそうかい」

イゼルローン駐留艦隊、第一空戦隊隊長に問いかけたのは、彼の上官の最高位にあたる

司令官のヤン・ウェンリー大将だった。

少佐であるオリビエ・ポプランにとっては、本来は雲の上の高官である。

しかし、彼の被保護者であるユリアン・ミンツ軍属が、ポプランの空戦技の弟子であるのが

まず一点。

次に、第一空戦隊最大の任務は、ヤン司令官の旗艦『ヒューベリオン』の護衛であることが

もう一点。

そして、スパルタニアンの新運用の考案者兼責任者ということで、ポプランが会話をする機会を得ているのだ。

ヤンは、まだ二十代の大将である。

現在の同盟軍では唯一、というより同盟軍史上でもたぶん最速記録だ。

にもかかわらず、温和で階級に囚われない、もしくは軍律に甘い人柄のせいか、かなり気さくに会話をしてくれる。

「ヤン提督には感謝していますよ。

三機一隊での編隊戦術のために、様々に手配をしていただいて。

ただ、しかしですねぇ……」

明るい褐色の髪を黒髪の上官のようにかき回す。

いつも陽気な伊達男の逡巡に、ヤンは軽く首を傾げた。

「第一空戦隊に、新兵の多くを引き受けてもらったが、やはり訓練が大変だったかな。
今からでも、第二にも引き受けてもらったほうがいいだろうか」
「いや、新兵はいつもこんなもんなんで覚悟してますよ。
それに、新戦法を叩き込むんなら、まだ白紙の状態のほうがいいかと思うんで。
むしろ、俺、いや小官を始めとした教官側が手を焼いているんです」
「撃墜王（エース）の貴官が手を焼き、門外漢の私に相談してくる案件か」
執務机の上に肘をつき、組んだ両手の上に顎を乗せるという行儀の悪い態度だが、
ポプランはその仕草が嫌いではない。
シルクハットの代わりに、黒いベレーを被った魔術師がこの姿勢を取るときは、だいたい何かを思いついているからだ。
「スパルタニアンの操縦は、個人技能がものをいうね。
貴官やコーネフ少佐のようなパイロットには、なかなかなれるものじゃない。
編隊を組むにあたっては、それが泣き所になっているのかな、ひょっとして」
ポプランは両手を上げて、司令官の名推理に降参の意を示した。
「ご明察です、ヤン提督。
小官らの相手は、ワルキューレやミサイルで、基本は一対一です。
戦艦の周辺を飛び回っては敵を叩き落すわけなんで、
自分よりでかいもの以外は敵と割り切ったほうが楽なんですよ。
そこに仲間がくっついてくるようになると、反射的に撃墜しちまい

そうになるんです」

「攻撃ではなく、撃墜なのは貴官がすごいんだろうが、こいつは笑えないね。

シミュレーションの友軍誤射率がはかばかしくない、という理解でいいのかな」

「はい、せっかく予算も通してもらって、シミュレーターまで新規構築していただいたのに。

このままじゃ、キャゼルヌ事務監から雷神の槌（トゥールハンマー）なみのお小言が降ってくるでしょうよ」

部下の言葉に苦笑して、ヤンは黒い髪をかき回した。

「先輩は、締り屋だが吝嗇（けち）ではないからね。そんなことにはならないさ。

遺族年金の受給者を増やすことになるほうが、ずっと怒りを買うことになるよ」

相変わらず優しい口調で、さらりと毒舌を吐くお人だ。ポプランは軽く肩を竦めた。

漆黒の眼が、明るい緑の眼を上目遣いに凝視する。それを見て、彼は埒（らち）もないことを考えた。この人は母親似なのかもしれないなと。軍人らしくない優しい目元は睫毛が長い。

「ところで、あのシミュレーターは貴官らが中心になって考案したんだったね。

ここはその道の名手の知恵を借りたらどうだろう」

「へ、その道の名手っておっしゃいますと」

本気で首をひねるポプランに、ヤンは穏やかに笑いかけた。
「フィッシャー少将だよ。艦艇とスパルタニアンでは随分大きさは違うが、
友軍機に対して適正なフォーメーションを維持する、という基本は共通するとは思わないか。
ひょっとしたら、いい知恵を貸してくれるかもしれないよ。
貴官らとは交流が少ない人だから、私から頼んでおこう。
予算が無駄になるのも勿体ない。なんとかできるならそれに越したことはないだろう」
思いがけない人の名が出たが、ポプランは膝を打つ思いだった。
「そうですね、ヤン提督。ありがとうございます」
表情に生気を戻したポプランとは裏腹に、ベレーを脱いだヤンは溜息をついた。
「まあ、やれるだけのことはやらないと。もしも駄目だったら、私と貴官は連帯責任だからね。
一緒にキャゼルヌ事務監のお小言を食らうのさ。せいぜい足掻こうじゃないか、お互いに」
要塞の最高責任者でキャゼルヌの後輩である、ヤンに向けられる舌鋒はさぞや鋭い物になるだろう。ポプランは大きく肩を竦めた。
「は、誠心誠意、取り組ませていただきますよ」
「よろしく頼むよ。なによりも、まだ若い兵士が一人でも多く生還できるのなら、
それに勝るものはないからね。フィッシャー少将の予定と調整が

必要だから、
貴官の都合のよい日時を、グリーンヒル大尉に連絡しておくように」
そう続けると、また髪をかき混ぜてベレーを被りなおす。
ポプランは、退出しかけてふと気付いたことをヤンに告げた。
「こんなに早く、助言をいただけるんならもっと早くに相談させてもらったのに。
ひょっとして、この問題点をお分かりになっていたんですか？　お人の悪い」
撃墜王の言葉に、ヤンは苦笑を浮かべた。
元々、若く見える人ではあったが、この時の彼は学生のように見えた。
まるで定期考査の結果に一喜一憂するような顔に。
「私は学生時代に、スパルタニアンの操縦演習がそりゃあ苦手でね。
いつも、落第ぎりぎりのひどい点数だったんだ」
「ああ、ユリアンからも聞かせてもらいましたよ。
アッテンボロー提督もたしかそんなことを言っていましたがね」
ヤンの学生時代の成績の極端な偏りぶりは、周知の事実であった。
怒りもせずに、黒い髪が頷きを返す。
「私は元劣等生として思っただけだ。
あんなに目まぐるしい操作を要求されてる時に、
編隊を維持しろとと言われてもできないとね。
君がさっき言った問題は、熟練者（ベテラン）の火線上に新兵（ルーキー）が飛び込んでくる、

というのが真なのだろう？」

再びの名推理に、全面降伏するポプランだった。

「仰せのとおりですよ。

だが、俺たちの指導力が不足しているのも間違いないことですから」

その悔しげな語調に、ヤンは冷静に告げる。

「それは仕方がないことだ。

経験のないことに取り組むのは誰しも難しい。

例え、君のような天賦（てんぷ）の才があってもね。

全てを一人で担えるような人間なんて、滅多にいないのだから。

貴官はまず、問題点を整理して考えなくてはならないよ」

それはポプランの知る、ユリアンにやや過保護な師父の顔ではなかった。

エル・ファシルの、アスターテの、イゼルローンの英雄。同盟軍史上最高の智将。

その精髄の一端に初めて触れたのである。

「まず、スパルタニアンというハードウェア。これは変更や向上は見込めない。

少なくとも直ちにはね」

「ええ、そうです」

「次に、搭乗員の新兵。こちらは向上が見込める。無論、訓練次第だが」

「はい、そうなんですが……」

「この訓練と戦闘の方法がソフトウェア。この改善に着手しているのが現状だね。
現在、A案からB案への移行計画中と。ここまでの流れは合っているかい？」

「全く異議はありません、ハイ」

門外漢と自称していたのに、切れの良い分析なのだから溜息が出てきそうだ。
しかも、非常に分かりやすい。亜麻色の髪の少年が、傾倒するはずである。

「さて、このB案は、こちらの3機編隊で敵1機を迎撃する。
これは戦術的には非常に正しい。だが、正しいのは3機対1機の構図だよ。
スパルタニアンの編隊フォーメーションB案、それ自体ではない」

まるで数学者が、不変の定理を述べるように淡々とした声音だった。
ポプランは、目を瞠って自分とあまり歳の変わらぬ大将を凝視した。

「B案に手を入れて、B＋程度の改善でものになるかもしれない。
現案を破棄してC案に行ったり、場合によってはZ案ほどにかけ離れた正解が
あるかもしれない。まずは考えて、実現可能な最善案を構築するんだ。
確たるプランがないのに、努力をしたって意味はない。
ゆで卵をいくら温めたって、ひよこは孵(かえ)らないだろう」

温和でものぐさで、昼寝の好きな善良な青年。
ユリアン・ミンツが口にするのは、ヤン・ウェンリーという人間の一面でしかない。
彼の中には、確かに宇宙屈指の名将がいるのだ。
彼の機略は魔法の水晶を所持しているかのようにさえ見える。
しかし、考案して孵ることのなかった幾つもの卵を、ダストシュートに捨ててきたのだろう。
きっと、ドーソン大将が真っ赤になって報告書に書き立てるほどの量を。

「ひょっとして、ヤン提督がよく言う、努力しても無理なものは無理って、
そういうことだったんですか」

「これはその半分だ。もう半分はないものねだりの負け惜しみだよ。
私が努力したところで、君のような撃墜王には決してなれない」

そう告げた声は、もういつもの穏やかな調子に戻っていた。

「そいつは小官にしても全く同様なんですがねぇ」

「でも、君が私になる必要も、メリットも全くないじゃないか。
色男で、格好いいエースパイロットなんだから。
そんなにもてるのに勿体ないだろう」

小さく笑う司令官に、心からの敬礼を送ってポプランは執務室を退出した。
その後、グリーンヒル大尉に自分の予定を連絡し、彼女の予定を聞いてみたりもしたが、

すげなく断られてしまったのは余談である。
金褐色の髪とヘイゼルの瞳の麗人が、心を寄せる先はあまりにも明白なので、
これは礼儀なんだからと自分を慰めるポプランだった。

2. シャッフル

グリーンヒル大尉は、てきぱきと自分の役割を果たした。
ポプランとフィッシャー少将の会合予定を組むと、戦術コンピュータルームの一角と
有能な若手の技術士官を確保してくれたのである。

ポプランが提出しておいたスパルタニアンの編成案は、
予めその二者に渡されて検討するようにと、ヤンからの指示も出されていた。

まず、コンピュータのモニター上にポプラン案が再生される。
フィッシャー少将は頷きながらそれを見詰め、最初に口にしたのは賞賛だった。

「ポプラン少佐、これは貴官が考えたと聞いているが、大したものだよ。
個人技によるところの多いスパルタニアンの運用発想として、優れたものだ」

初老を迎えた銀の髪と口ひげのフィッシャーは、さして口数の多い人ではない。
ユリアンがこっそりと、地味が服を着て物陰にいるようなと思ったような男性だ。
やかまし屋のムライともまた一線を画すタイプである。

だが、『魔術師』が己が右腕として、全幅の信頼と賞賛を贈る人物だった。

「問題があるのは、スパルタニアンの機動性の高さだと私は思う。

一般の戦艦と違って、非常に複雑な編隊運動を要求される。
このモデルの機動の参考にしているのは、貴官自身なのではないかね。
それでもかなり、低い運動量には押さえてあるが」
たちまちにして炙(あぶ)り出される問題点の数々。
先日、黒髪の司令官から受けた指摘とも共通点が多い。
黒髪と銀髪と、正副司令官の意思疎通が、いかに円滑なのかという証であった。
「ええ、小官やコードウェル大尉の飛行ログを修正して作成してあります」
ポプランの答えに、フィッシャーは頷いて続けた。
「艦隊の運用は、基本動作が一通りできるレベルの者を基準にしなくてはならない。
そして、もう一つには、新兵3機なのがよくない」
「二対一でも駄目なら三対一と思いまして、
ヤン提督には戦術的には非常に正しいと評価をもらったんですが」
「ああ、それには同意するが、最初は引率役が必要だ。
ダレル少佐、モデル案1の表示を頼む」
フィッシャーは同席した技術士官に頷いた。
ディスプレイ上の3機編隊に、1機が加えられて隊形が変化する。
三角形から三角錐へと。引率機を頂点に、3機が三角形の底面を形作るようになった。
「これは一案だが、引率機の撃ち漏らしを後続機が援護する。

引率機とユニット機は、極力三角錐を維持するように飛行するんだ。
利点はもう一つある。この隊形ならば、互いの射線は原則として交錯しない。
誤射も軽減すると思うのだがね」

要するに、まっすぐ飛んでまっすぐ撃つようにしろと言うことだった。
スパルタニアンは、円や球形を描くように飛べと教えられるので、大きな発想の転換である。

「確かにそれなら簡単ですが、ワルキューレに対抗するには機動性に不安があります」

「だから引率機は熟練者を当てるようにする。
その後続の3機の動きを牽引するように、プログラムを組めばどうかと考えたんだが。
技術的には不可能ではないと、彼からもお墨付きは貰っている」

ダレルと呼ばれた少佐が軽く一礼する。フィッシャーは続けた。

「それに、これからは艦艇の一部として、連携を考えようと思っている。
スパルタニアンには飛びやすく、ワルキューレにとって飛びにくくなるような
艦隊の配置などもね。今、考案されつつあると思う。ヤン司令官はそういう方だ」

これはユリアン・ミンツが自分の弟子になったせいなのかと、ポプランは思った。
その思考がフィッシャーにも透けて見えたのだろうか。

「ポプラン少佐、スパルタニアンは、最も小さく防御も一番弱い。
その小さな艦が、旗艦以下の主要艦の護衛の切り札なのだ。
スパルタニアンを守る配置とは、司令官を守る配置なのだ。
誤解してはならないが、これはヤン司令官の家族や我が身可愛さではない。
あの方は、死んではならない存在なのだよ。
同盟軍は、アムリッツァの大敗で失ってはならない人材を失ってしまった。
艦隊指揮官の適性を持つのは、端的に言うと軍人１５０万人に１人なのだ」

物静かな声が淡々と語るのは、恐るべき内容だった。

「いま残っている艦隊司令官は、ヤン提督の他は、ビュコック提督とパエッタ提督、
ルグランジュ提督しかいない。貴官には分かるだろう」

ポプランは答えを返すことはできなかった。

ビュコックの爺さまは、歴戦の宿将で宇宙艦隊司令長官だ。
ゆえに、彼が前線に出て来る時は同盟存亡の危機である。

パエッタ中将は、アスターテの会戦でヤン准将の進言を容れず、
金髪の坊やに撃破されかけて重傷を負い、現在も療養中だ。
それを引き継いで、冷静に潰走を防いだのが我らが司令官である。
才幹の差はいわぬが情けというものだ。

第１１艦隊のルグランジュ提督は健在だが、
それは帝国領進攻作戦に参加をしなかったからだ。
あの地獄を潜りぬけてきたヤンや、アッテンボローとは経験に大き

な差がある。

「今後、スパルタニアンは切り札の武器ではなくなる。
艦隊中枢の護衛、盾だよ。そう発想を切り替えてもらいたい」

「フィッシャー少将、待って下さいよ。第二空戦隊はどうするんですか」

「あちらは熟練兵を集中配置しただろう。運用は現状を維持する。
彼らは、第一の外側の盾になる。コーネフ少佐らも了解済みだ」

どうして、などという愚問をぶつける人間であれば、ここまで生き延びることも、
撃墜王（エース）となることもなかっただろう。
従来の戦法から、ある意味で自由な新兵を多く配属されたのもこの戦術構想のためだ。

そして、全体の生還率を考えるなら、ほとんど唯一の方程式だった。
ヤンが戦死したら、終わるのはヤン艦隊だけではない。同盟軍の、いや同盟の終焉も近いだろう。
だが、心の中に疑問は残る。どうして、なぜ、俺がと。

「ヤン提督はおっしゃっていた。コーネフ少佐は冷静で守勢に強い。
腕に自負をもつ熟練者をまとめるには、誰とでもフラットに対応できる方がいい。
そして、貴官には年少者に慕われ、導く才能があると。
ミンツ軍属が、すぐに心を開く相手は珍しいんだとね。
なによりも、場を盛り上げる力が貴重なのだそうだ」

「は？」

「貴官のことを激賞していたよ。スパルタニアンの運用に、
戦術的な発想を持ち込んだ初めてのパイロットだと。
ローエングラム候の麾下(きか)には、ワルキューレのパイロット出身の提督もいる。
貴官がそうなってくれれば、楽ができるんだが、とね」

思いもかけない言葉だった。雲の上にいる同盟軍史上最高の智将が、
一介のパイロット――同盟きっての撃墜王といっても少佐にすぎない――を
そこまで評価してくれるとは。

「お世辞にしても嬉しいもんですね」

「決してお世辞ではないと思うがね。貴官の発想は素晴らしい。
完成を見れば、軍事の教科書に載るような戦法になるだろう。
さあ、もうすこし見直してみよう」

もう一度頷いたダレル少佐が、更なる修正を加えたモデル案を表示した。
双方の言い分を踏まえ、ポプラン案よりも動線が整理、洗練されてきている。
フィッシャー案よりは機動性が増していた。
ここに、旗艦周辺の艦艇と第二空戦隊を加え、帝国のワルキューレやミサイルも表示する。
すると、かなり光明が見えるものになってきているではないか。

「おおっ、これならいけるかもしれません。
フィッシャー少将、ありがとうございます」

「ここからが大変だぞ、ポプラン少佐。

艦隊運動は、いかに指示や動作を単純化できるかに尽きるんだ。
直進と指示する角度の上下左右の動きができればよし、というぐらいまでに」

『敗残兵と新兵の寄せ集め』を、瞬く間に精強の集まりへと変えてきた、
魔術師の右腕の言葉は、静かな中にも説得力があった。

「ああ、そいつは確かに大変かも知れませんね。
スパルタニアンは、複雑な機動ができるほど名パイロットですから。
やっぱり、新兵より俺たちの意識の改革が問題だな、こりゃあ」

ぼやく若き撃墜王に、父親ほどの年齢の提督は冗談混じりにやり返した。

「それこそ、まだ若いもんが何を言う、といってやるところだね。
だからこそ、スパルタニアンの集団運用に手を着けた者がいないのだろう。
新機軸というのは、先人が思いつかなかったか、
思いついてあえてやらなかったことのどちらかだよ。
残念ながら、大抵は後者だ。頑張りたまえ」

「いや、それ全然救いになってませんよ」

「だが、前者だっているだろう。我々の司令官がね。
ヤン提督は、貴官に何か言わなかったかね」

「まずは、考えに考えて、実現可能な最善案を見つけろとおっしゃいましたよ。
現案の改善か、また別の案か、とてもかけ離れた正解があるかもし

れないと。
ああ、ゆで卵を温めても、ひよこは孵(かえ)らないって」
亜麻色の髪の少年の優しい師父ではなく、希代の名将の怜悧な顔と声で。
「あの方らしいな。やはり本質的には参謀なのだろう。
そうして考えに考えて、将兵の命を一人でも多く守れる途を選んできたのだよ。
この配置に不服はあるだろうが、彼が我々を守るように、我々も彼を守るのだ」
ポプランは頷いた。
「はい、フィッシャー少将。誠心誠意努めます」
「一番最初に、キャゼルヌ事務監の舌鋒からだな」
本当に珍しい副司令官の軽口に、ポプランは明るい褐色の頭を抱え込んだ。
「ああっ、考えないようにしてたのに」
「残念ながら、そちらには手助けはできんが、この件への協力は惜しまないよ。
私で力になれそうなことがあれば、また連絡をしてくれればいい。
戦術プログラミング部も協力をしてくれるそうだ。考えてもみたまえ。
これがものにならず、遺族年金が増額された時のキャゼルヌ事務監を」

降り注ぐ毒舌の矢は、一本一本が雷神の槌（トゥールハンマー）並みの破壊力であろう。
ポプランは姿勢を正して、副司令官に敬礼をした。

「前言を撤回します。死に物狂いで考えます」

「そうだとも。努めるだけでは不足だな」

さらりと言って退席した副司令官の背を、ポプランはまじまじと見詰めた。

「なんてこった。ウチの正副司令官は似た者同士だったのか」

ポプランの構想が、紆余曲折を経て、実を結ぶまでにはもうしばらくの時間が必要であった。

魔術師とダイヤのA

「キャゼルヌ先輩、ひとまずはお疲れ様でした」

捕虜交換式は恙無(つつがな)く終了し、代表のキルヒアイス上級大将を始めとする帝国軍人たちは整然と帰路についた。戻ってきた同盟の帰還兵の方こそ、羽目を外し過ぎる輩もいて、MPだけでは手が足りず、要塞防御部門の薔薇(ローゼンリッター)の騎士連隊が出動する有様である。

イゼルローン要塞司令官のヤン・ウェンリーは、このお客さんたちを、近日中にハイネセンまで連れ帰り、更にあちらでも祝賀行事に出席しなくてはならない。

だが、今回の捕虜交換式の最大の功労者は、要塞事務監アレックス・キャゼルヌ少将であることは、全員一致で異議のないことだった。

司令官のヤンは、この件に関しては単なる署名装置と化していた。ヤンにも言い分はある。苦手な者が死に物狂いでやることも、優れた手腕のある者の方が遥かに素早く正確にうまくできる。下手に自分が手を出すよりも、ずっと。

これにはキャゼルヌも苦い顔をしながら頷いた。

彼の6歳下の後輩の事務能力は決して低くないが、後方参謀畑を歩んできた自分が遥かに勝るのは事実だった。丸投げと言ってしまうと身も蓋も底もないが、無理解なくせに嘴(くちばし)を突っ込んでくる上官よりもよほどましである。

多忙な上にも多忙な日々もようやく一段落し、キャゼルヌ家での慰労会と相成った。

主人には銘酒、夫人には花束、令嬢には菓子を携えて、ヤン家の二人はやってきた。

娘から『おじちゃま』と呼ばれた後輩は、少なからずしょんぼりとして、なにやら抗議の呟きを漏らしたが、キャゼルヌに言わせれば笑止なことである。いい年齢（とし）の高給取り、物好きにも慕ってくれる美人までお膳立てしたのだ。さっさと嫁を貰うなり、婿に行くなりすればいい。

さて、キャゼルヌ夫人心尽くしの夕食は、素晴らしいものであった。ヤンとユリアンは、盛んに賞賛を夫人に捧げながら、旺盛な食欲を発揮した。

食後には客人の土産が供されて、その後に男二人、別室で酒盃を傾ける。

その冒頭、酒盃を掲げた後輩が、ぺこりと頭を下げて労いの言葉を口にした。

「本当にひとまずだな。連中を送り返して、おまえさんが戻ってくるまでが仕事だぞ。

あと2ヶ月近くは、平常には戻らんなぁ」

彼の言葉に、後輩の黒い瞳に微かな翳（かげ）が落ちた。

「このまま平常に戻ってくれればいいんですがね」

「どうした、ヤン。少なくとも、政治業者どものショーは一段落するはずだぞ。

おまえがあっちのショーに出てくればな」

「ああ、そいつはそいつで気が重い話なんですが、この時期に帝国軍が捕虜を返還してくる

ことが気になりましてね。何も、同盟の選挙に配慮してくれたわけではないでしょう」

真に同盟の選挙に配慮するのなら、そもそも二千万人近い有権者を戦死させないだろう。
口にするのも憚(はばか)られることだったが、ヤンの思いは先輩にも伝わったようだ。

「同盟の捕虜を食わすのを止めたわけだな。ついに権力闘争に打って出る気だろう」

輝かしい金髪の若者が脳裏をよぎる。その美貌もさることながら、覇気と闘争心はこの後輩の百倍ぐらいは多いだろう。軍才にはほとんど差異はなかろうが。

「ええ、恐らくは。先輩、留守中はよろしくお願いします。
恐らく、今しばらくは、帝国軍の侵攻はない。
ですから、今のうちに要塞防御指揮官らと、雷神の槌(トゥールハンマー)や各種砲台の掌握、
マニュアルの拡充をお願いしたいんですよ」

「それで、シェーンコップ准将の自薦を断ったわけか」

ヤンがハイネセンに赴くにあたって、護衛役を買って出たのが話題の美丈夫である。
司令官が留守の時に、防御の要まで不在になるなんて駄目に決まっているだろうと、あっさりとヤンに却下され、薔薇の騎士連隊長代理のリンツ中佐が護衛に就くことになった。

「私の護衛に彼を貼り付けるのは、人材の無駄遣いですよ。
そりゃあ、彼なら将官として、式典に参加して護衛ができるという利点はありますが」

「いや、ハイネセンへの往路が一番危ないぞ。

おまえがここを陥れるのに使った策を、あちらがとってきたらどうする。
おまえ一人殺すだけですむ」

これは、ヤン艦隊上層部が全員一致で抱く危惧だった。イゼルローンをその方法で陥落させた、実行部隊の元長が特に危機感を持つのも当然だった。わざわざ成りすますまでもなく、本物の同盟軍人の捕虜がごろごろしているのだから。
この後輩ときたら、射撃は下手だし、白兵戦もどうにか人並み、それも自分と同じぐらいまでの体格の相手に対してである。正直に言うなら、大抵の軍人は彼よりも体格で勝る。

「いえ、ローエングラム候はそんなせせこましい手はとらないでしょう。
私を個人的に恨む人は、そりゃ沢山いるでしょうがね。
殺すまではしないと思いますよ」

「人間、かっとなると何をするか分からんぞ。いいか、そこらをほっつき歩くなよ。
リンツやポプランたちの傍から離れるな」

先輩の言葉に、ヤンは溜息をついて髪をかき混ぜた。

「あのですね、私は五つかそこらの子供じゃありませんよ」

「何を言うか。うちの下の娘のほうが、おまえさんよりずっとしっかりしてるぞ。
起こせばちゃんと起きるし、髪の毛だってそんなにぐちゃぐちゃにはしないからな」

「やれやれ、分かりましたよ。ところで、サックス少将はどういう人で

すか」

帰還兵の輸送責任者で、ヤンも彼と同じ艦に乗ることになる。
キャゼルヌと同じく、後方経験が長いが、同じ少将でも約二十歳の開きがある。
ヤンは別格だが、その先輩の昇進の早さも異数のものだ。
将来の後方本部長と言われるのもむべなるかな。

「無能ではないが、縄張り意識が強いな。というよりもだ、五十代の少将が、一応は二十代の
大将に、反感を抱かずにいられるとでも思うのか。ここを先途(せんど)と地味にいびってくるぞ。
うろちょろできなくて、逆にいいかもしれんがね」

「そんなに心配をしなくても大丈夫ですよ。
私の乗る艦には、帰還兵は同乗はさせないでしょう」

「帰還兵が、おまえの艦の乗組員を唆(そそのか)すことはありえるからな。
準備のほうは……ああ、ユリアンがやったに決まっていたな。なら大丈夫だな」

キャゼルヌのからかい混じりの毒舌に、ヤンは澄まして答えた。

「お蔭様でね。そう言えば、ユリアンが少しばかりお冠でしたよ。
イゼルローンだと、ハイネセンよりも紅茶も2、3割は高いそうです。
この前、酒代が3年前の5倍になっていると言われたんですが、酒だって同じでしょう。
やれやれ、担がれましたね、これは」

「おまえさん、シャルロットと小学校の算数からやり直すか？

それにしたって、3倍以上だろうが」

「いやいや、かなりの部分は先輩への袖の下ですよ」

そう言いながらも、酒盃に琥珀色を注ぎ足す。

後輩の手から酒瓶を取り返して、自分にも注ぎいれてから意地悪く言ってやる。

「にしたって、おまえも半分は呑んでるじゃないか。あんまり呑みすぎるなよ。

寝たきりの上に、アル中青年だなんて、ますます嫁さんがこなくなるぞ」

「相手もいないのに無理言わないでくださいよ。葬式と違って一人ではできないんですからね」

黒い瞳をきょとんとさせて言い返す後輩に、この鈍感がという文句を、酒と一緒に呑み下す。

一見おとなしいが、妙に頑固なところがある奴なので、焚(た)き付けすぎるのもよくない。

案外に取り扱い注意人物なのだ、ヤン・ウェンリーという男は。

「ふん、イゼルローンの物価ね。そういえば、オルタンスも言ってはいたな」

家計は妻に任せきりな夫に向かって、ヤンは呆れ顔になった。

「補給と兵站の達人、キャゼルヌ少将のお言葉とは思えませんね」

「軍用食やらミサイルやらと一緒にするな。士官食堂に今日みたいなメニューが出せるか」

暗に夫人の手料理を惚気(のろけ)る先輩に、ヤンはごちそうさまでしたとつぶやく。二重の意味で。

「いやぁ、いつかは出して欲しいものですがね。確かに給料に遠隔地手当もありますが、
一般兵士や下士官の給与でやっていけるでしょうかね」

「とんとん、というところだな。軍人の住居費は無償にできたおかげでな。
かといって、品物の代金を負けろとは言えないぞ」

キャゼルヌの言葉に、ヤンは苦笑した。

「そんなナンセンスなことは言いませんよ。私も交易商人の子でしたからね。
輸送費を価格に反映できないとなったら、取引をやめるか首を括(くく)るしかなくなります」

「ハイネセンへの輸送費も安くはないが、あっちは購買人口がこちらの二百倍だからな。
負担者の分母が違うわけだから仕方がないさ。正直、軍需物資の方も馬鹿にならんぞ。
民需品は、企業努力に頼るしかないわけだ。……惜しい話だよな」

瞳と同色のグラスを見詰めるキャゼルヌに、ヤンは首を傾げた。

「おまえさんがきっと嫌がる『もしも』の話さ。
帝国と講和が出来ていたら、イゼルローン回廊も通商の道になっていただろう。
そうなればエル・ファシルは第二のフェザーンだな。

あそこはフェザーンよりも、ずっと住環境がいい。もっと強靭な経済圏になったな。
おい、どうしたヤン！」

黒髪の後輩は、見た目の線の細さにそぐわず、実は結構な酒豪である。酔い潰れて吐いたり、人格が一変したり、大声を出して騒ぐことはない。微かに頬が赤らむぐらいで、淡々と酒盃を重ねるタイプだった。

この日もそんな様子でいたのだが、何気ないキャゼルヌの言葉に、顔色が白さを取り戻す。漆黒の眼が大きく見開かれ、キャゼルヌの顔を通り越して、何かを見ていた。あるいは、どこかを。
ただならぬ様子に思わず名を呼ばわると、はっと頭が揺れて、キャゼルヌの顔に目の焦点が合わされた。

「え、ああ、何でもありませんよ」

とても司令官の自己申告を信じることはできなかったが、安易に内心を吐露する相手ではない。それは長い付き合いでよく知っている。精々、明るい口調で茶化してやるぐらいしかなかった。

「おいおい、酔っ払ったのか。今日はここらで止めておけよ。
いくらおまえさんが貧弱でも、まだユリアンが負ぶって帰るのは無理だからな」

「ひどいなぁ。仰せのとおり、そろそろお開きにしましょうか。
それと、要塞防御の演習、よろしくお願いしますね。
私が艦隊司令官として出撃したら、先輩は司令官代理で、シェーンコップ准将が防御指揮
を執ることになります。道中、リンツ大佐とは話をするつもりですが、先輩の方も彼らと

交流を図って欲しいんですよ」

「奴さん、なぁ。俺はジンクスがどうの、なんてことは信じないが、なかなか癖の強そうな男じゃないか」

真面目な顔をして、シェーンコップ准将の人物評を述べる先輩に、後輩は思わず呟いた。

「人間って、他人のことはよく分かるんですよね……」

「何が言いたい」

薄茶色の目をじろりと向けられて、ヤンは頭をかいて誤魔化した。

「いや何でも。でも、彼と先輩は結構似たもの同士だと思いますけどね」

「おいおい、よき家庭人の非力な事務屋に何を言うか。俺とは正反対だろうが」

それ以外の部分はそっくりだ。特に上官に対する遠慮のない毒舌だとか。

ヤンは勝てない戦いはしない主義だ。キャゼルヌとの舌戦はその最たるものだったから、口にしたのは別のことである。

「まあ、そういうことにしておきましょう。

彼は、私と先輩のちょうど中間の年齢なんです。

士官学校に通っていたら、さぞや目立つ候補生だったでしょうね。

まあ、後輩がもう一人増えたと思ってやってみたらどうでしょうか」

「後輩ねぇ……」
胡乱(うろん)な目になってしまうキャゼルヌだった。あの不敵で不遜な男に『キャゼルヌ先輩』と呼ばれたら？　思わず眉間を揉みはじめるキャゼルヌに、ヤンは首を傾げた。
「先輩こそ、一足早い二日酔いですか」
「……誰のせいだと思ってる。ま、今日はここまでにしようや。気をつけて行ってこいよ」
「はい、そうしますよ」
素直に頷いた後輩は、妻に何度も礼を言って、被保護者と一緒に帰っていった。
一家揃って見送ってから、居間へ戻りかけたときにオルタンスがぽつりと口にした。
「ユリアンくんも大分背が伸びてきたわね。
そのせいかしら、ヤンさんが随分痩せたような気がするのよ」
「あれでも戻ってきてるんだがな。
まあ、ハイネセンへの往復で、食っちゃ寝すればましになるだろうさ」
「そうなったくれたら安心なんですけどね」
「おいおい、予言はやめてくれよ。あいつの無事もだが、こちらの留守番の無事も祈ってくれ」

それが、キャゼルヌの目下最大の懸念であった。

ジョーカー相手にハイ&ロー

その翌朝。最初に組まれたのが留守番部隊のミーティングである。司令官のヤン以下、司令部と要塞防御部門、駐留艦隊、各種オペレーション部門の幹部が一同に会する大掛かりなものだった。事務監のキャゼルヌは司令官代理として出席する。

ヤンの短い挨拶の後、各部門の責任者が進捗状況などを報告していく。

イゼルローン要塞はヤンの攻略時に中枢部分は掌握したが、末端までそれが及んでいるかと問うならば、現状では否である。帝国領進攻作戦中から継続して手は入れているが、フロアの数が数だ。主要部分以外について、不要のものは停止か閉鎖をし、不急のものは優先度をつけて同盟のシステムに移行している。ようやく第二フェーズが終了、第三フェーズが開始といったところだ。それも、先日の捕虜交換式の前、帝国軍の捕虜からの協力あってのことである。

帝国進攻の前、人的資源委員長のホアン・ルイが主張したのは、民間の技術者の枯渇である。それを吸い上げている同盟軍のマンパワーの不足も、深刻なものであった。

熟練兵だけではない。艦艇や兵器や施設の整備人員。医療従事者。軍需物資の補給、輸送にも様々なノウハウが必要なのである。

こうした中で、飛び抜けた進捗状況を報告したのが要塞防御部門だった。

薔薇の騎士連隊（ローゼンリッター）の勇名と悪名は共に広く知られるところであるが、その練度もまた宇宙最強の白兵戦部隊というにふさわしい。

帝国からの亡命者の子弟という構成員が、周囲から白眼視を受けるなかで団結していったせいもあろう。そして、その有能と団結力ゆえに更なる危惧を買うという、やるせない状況にあるのかもしれなかっ

た。

彼らの元連隊長であり、昇進によって要塞防御指揮官となったのが、ワルター・フォン・シェーンコップ准将である。歴代最強の白兵戦の名手としても、同盟軍屈指の色事師としても名高い美丈夫であった。

あいつと似てると後輩は言ったが、キャゼルヌとしては到底頷けない。鍛え抜かれた長身といい、帝国貴族らしい彫りの深い端正な顔といい、男性としての一つの理想形と言えよう。

なにより、彼が自分を先輩と呼ぶとは思えないし、後輩と考えるのは無理というのものだ。ヤンやアッテンボローは、学生時代の可愛げのある頃を知っているから違和感がないだけである。

深く響きのよい声で、報告を続ける要塞防御指揮官を見ていると、ふと灰褐色と眼が合った。一瞬浮かんだ複雑な色合いは、相手もヤンから同様のことを言われ、同様のことを考えたとみえる。

そうだよなぁ、とキャゼルヌは胸中で呟いた。そりゃ、無理ってもんさ、後輩よ。

奴さんはいい男であり、悪いやつではないだろう。だが、わるい男ではある。

キャゼルヌ家の晩餐（ばんさん）に招こうと思うかと自問するなら、頭を振るのは横方向にだ。

妻はもちろん、娘二人だってあんまり近付けたくはない。

親馬鹿の過保護と笑わば笑え。

世の中、１４歳の初恋を貫徹しようとする女性だっているのである。

何かあってからでは遅いじゃないか。

だが、シェーンコップの有能さはキャゼルヌとしても認めざるを得なかった。単に白兵戦の勇者というだけではなく、指揮官や組織管理者としても非凡な手腕である。後輩の上官の言うように、士官学校に進学していたら、提督となっていたかもしれない。そうだったら、こんな矛盾した人事配置で、留守番の部隊が分厚いマニュアルに首を捻ることもなかったろうに。

そのミーティングは定例報告会のようなものであって、留守を守る幹部会議は時間を変えて別室で行われた。留守をする司令官は、今頃前倒しで上がってきた決裁書類へのサインで大わらわである。

集まった将官たちの顔つきもまた、曇りがちであった。

パトリチェフ准将は民主主義の建前を奉じて、ハイネセンのお偉方への批判を自身の基準の小声で漏らした。堂々とした豊かな体格にふさわしく、会議室に朗々と響いたが、規律の人ムライ参謀長も咎めようとはしなかった。むしろ、頷いているほどだ。キャゼルヌも思わずぼやいてしまう。

「確かに同格の大将を、要塞司令官と駐留艦隊司令官に配置していた帝国軍も愚策だが、

両方を一人に兼任させるというのも、同じぐらい馬鹿げたことだと貴官らは思わんか」

キャゼルヌの言葉に、シェーンコップも頷いた。

「同感ですな、キャゼルヌ少将。ヤン司令官は一人しかいらっしゃらない。

艦隊か要塞か、どちらかが留守になってしまう。

で、あの方以上の艦隊戦の指揮官はいないのですから、

必然的に要塞司令官が代理になるわけです。

かと言って艦隊がなければ、雷神の槌（トゥールハンマー）の射程外を通過されてしまうだけですからな」

「申し訳ないことです、キャゼルヌ事務監。

小官としても、ヤン提督にはこちらに残っていただきたいのですが、

小官がヤン提督の代理を務めるのは、無理というものです」

副司令官のフィッシャー少将が、銀色の頭を軽く下げた。艦隊運用の名人として、司令官から全幅の信頼を寄せられているが、艦隊指揮官としての才能はだいたい水準といったところだろう。

「こちらこそ申し訳ない。フィッシャー提督、貴官を責めているのではありません。

ハイネセンのお偉方への愚痴にすぎませんから、お気になさらず。

小官にしたところで、後方経験しかないのです。

艦隊の動きに呼応して、雷神の槌を撃てと言われても無理ですよ。

要するにだ、万が一、敵が来襲したら小官は事務におけるヤン司令官と同じ存在になるわけだ。

シェーンコップ准将の判断に、頷くことしかできんだろう」

溜息をつく要塞最高実力者に、シェーンコップも首を振った。

「いえ、陸戦でしたら砲台の運用も経験はありますが、あまりにスケールが違いすぎます。

乗っ取ったばかりの雷神の槌の2射で、敵艦隊を潰走させるような人を基準にしてはいけません」

第七次イゼルローン攻略戦の立役者の言葉には、このうえない説得力があった。

「あれには小官は度肝を抜かれましたよ。掌握したばかりの兵器をあっさりと運用してしまう。
砲撃をしたのは砲手ですが、狙点やタイミングの指示は閣下によるものです。
見えているものが、小官らとは違う。天才とはこういうものかとね。
宇宙要塞などという代物の運用ノウハウは、我々が作っていかなければなりません。
費消するエネルギーを考えればうんざりする話ですが、艦隊の演習と同時にです」

「その時、アッテンボロー提督に全体の指揮を執っていただいてはどうでしょうか」

副司令官からの突然の指名に、分艦隊司令官は青灰色の目を大きく見開き、自身を指さした。

「俺、いや、小官がですか？　いやいや、フィッシャー提督、無理ですよ。
小官は敗走に強いなどという過分な評価をいただいていますが、要は少数艦隊の指揮経験しかないということです。
フィッシャー提督の方が絶対に適任です。
小官には大軍を動かした経験がありませんから」

その経験皆無なヤン准将が、戦術コンピュータに入力しておいた陣形案が、アスターテで第二艦隊を全面潰走から救ったのだ。後輩としては尊敬も感心もするが、同様の能力を期待されると激しく困る。

「天才とは模倣（もほう）してはならない、ということでしょう。
我々ができる堅実な運用を考え、演習を重ねるということに尽きますな」

参謀長が謹直（きんちょく）な表情と言葉で締めくくる。一同の深刻な様子に、副参謀長はぽかんとした。パトリチェフは、ヤンのように大胆かつ繊細だったり、ムライのように定石を抑えた緊密な思考というのは得意ではない。むしろ、楽天的な一般人に近いと思ってる。だからこそ、普通に考えるわけだ。

「なるほど、参謀長のおっしゃるとおりです。
堅実な艦隊運用とそれに呼応する要塞の援護ですな。
でも、そんなに深刻にならんでもよろしいでしょう。
要は、帝国軍が六回もやっていたことですよ。記録だって残っておりますから、
そいつを雛型（ひながた）にすれば当面はいいのではないでしょうかね」

深刻な顔の一同も、ぽかんとした。
大きすぎて、盲点になっていた活字を指摘されたように。

「あちらさんのやっていた方法でも、六回分ぐらいの来襲は持ちこたえられますよ。
ヤン提督のような方法は、二度は使えんでしょう。
もっと凄い作戦をとってこられたら、どのみち我々の手には負えません。
そうなれば時間稼ぎをする、という方針でいいのではないでしょうかね」

この楽天的な、だが常識の芯が骨太にとおった意見に、要塞防御指揮官の肩から力が抜けた。とがりぎみの顎をさすりながら、同僚にしみじみと感謝の意を告げる。

「いや、パトリチェフ准将、感謝をいたしますよ。正に賢者の言です。
なまじ、ヤン司令官を基準にしてしまうから、力みすぎてしまうの

かも知れません」

キャゼルヌは思わず片眉を上げた。

「意外だな。貴官はもっと自信家だと思っていたが」

「事と次第によりますな。

戦斧（トマホーク）の振り回し合いを競え、と言う内容でしたら、

一個中隊ぐらい相手にしてもよろしい。

ですが、要塞主砲の攻撃指示など、小官の経験を超えていますよ。

地上では、せいぜい数キロ範囲ですからな」

そうシェーンコップが答えた時だった。

司令官の来訪が告げられ、黒髪黒目の話題の青年が副官と一緒に入室してきた。

Open Trick

「遅くなってすまないね。もうそろそろ終わりごろかと思ったんだが」

「ほう。最高責任者の二ヶ月の不在を前に、そんなに簡単に会議が終了するとおっしゃいますか、

ヤン司令官」

薄茶色の眼に険を含んで、辛味の効いた問いかけをする先輩に、ヤンは肩を竦めた。それまでの話し合いの経緯を、ムライ参謀長が簡潔に説明する。黒髪の司令官は大きく頷くと、まずは副参謀長を労った。

「パトリチェフ准将がいい提案をしてくれたようだ。

それに今しばらくは、帝国軍の襲来はないだろうから安心して欲しい」

「それはどうしてなのか、お尋ねしてもよろしいですかな」

シェーンコップも、口調は慇懃だが態度の方は不遜であった。

歴戦の勇者の鋭い眼光も、黒髪の司令官は一見悠然と受け流した。

「ローエングラム候は、同盟の捕虜と引き替えに、帝国軍人を返してもらったばかりだ。

今またイゼルローンを攻略すれば、新たに無駄飯食らいを抱えるだけだ。

あちらだって、焦土作戦やアムリッツァからの回復時間は必要だよ。

彼は戦略の天才だから、下手な策(て)は打たない」

そう。ヤンは胸中で呟く。打つならもっと上々の策だ。だからこそ、それを杞憂で終わらせるべく、この時期でもハイネセンに赴かなければならないのだ。部下たちの心配も、不安も痛いほどわかるが、超光速通信（FTL）ではできないことなのだ。

「私が留守中のことだが、それでも駐留艦隊と要塞防御の演習を進めて欲しい。
詳細は戦術コンピュータに入力してもらってあるが、
グリーンヒル大尉、レジュメを配ってくれ」

「はい」

さきほどまでの分厚いマニュアルと違って、わずかに数ページ。
第一次から第六次までの同盟軍の進攻ルートと撃破された状況が、帝国領からの侵攻だった場合に置き換えられて図示されていた。

「これは、さきほどパトリチェフ准将がおっしゃった内容ですな」

「そのとおりだよ、フィッシャー提督。
イゼルローン回廊の特性上、三個艦隊程度を展開できる宙点やルートはほぼ決まっている。
これは帝国領方向から見てもそう変わりはない。
一方、雷神の槌（トゥールハンマー）を始めとする要塞の兵器は、射程距離や範囲、可動角度が一定なんだ。
要は、このポイントにいかに相手を誘い込むか、それが駐留艦隊の役割に尽きる。
これは同盟軍の実例を、帝国領からの侵攻ルートにあてはめてみたものなんだ」

「ヤン司令官、たったのこれだけですか？」

そばかすの後輩の言葉に、ヤンは頷いた。

「そうだ。これでバリエーションはほぼ全部だよ。
ルートはそんなにないし、雷神の槌を避けるならおのずと位置取りも決まってくる。
それに、要塞の防衛戦はもとから防御側が有利だ。
こちらは食糧生産工場も完備しているからね。味とメニューを考慮に入れなければだが。
要塞主砲の攻撃範囲を盾にして粘れば、相手は食えなくなって撤退するしかない。
帝国側の補給基地はイゼルローンに頼っていた分、同盟よりもお粗末だし、
アムリッツァの前にそこから物資を引き上げている。
その後に戻したとしても、二個艦隊相当の帰還兵団に先に補給をしなくてはならない」

この指摘に、補給と兵站の達人は速やかに算盤（そろばん）を弾いた。

「なるほど。その通過後新たに2個から3個艦隊への補給を可能にするには、二ヶ月では不足だな。
そして補給基地から、イゼルローンまでの航行時間を計算すれば、司令官の不在中
の来襲は、可能性は低いとみていい」

「それに、イゼルローンからの距離は、帝国首都（オーディン）の方が同盟首都（ハイネセン）より倍近く遠い。
キルヒアイス上級大将はローエングラム候の股肱（ここう）の臣だというから、
彼の身を危うくするようなことは望まない。友情もそうだが、人材としてもね」

「閣下、これでどうにか小官は安心ができそうですよ。
軍事基地の防衛の経験はありますが、地上と宇宙では違いすぎるのですからな」

要塞防御指揮官の言葉に、ヤンは苦笑いした。この兼任人事は、極論から極論に走った代物だが、ヤンの上位に立てる者も、ヤンの下位につける者も、どちらもいないのだ。二十代の大将と持て囃されたところで、なんのことはない。人材が払底しているのだ。アムリッツァで戦死した、ウランフ提督やボロディン提督が健在であったなら。

「そうでもない。基本は射程に入ったら撃つ。シンプルだろう、シェーンコップ准将。
追い込み役の方が大変なんだ。よろしく頼むよ、フィッシャー提督、アッテンボロー提督。
私からももう一度言うが、帝国がやってきたことさ。貴官たちになら問題なくできるよ」

「なるほど、このレジュメで見ますと、案外に単純に思えますなあ」

副参謀長の朗らかな声に、一同に何となく安心感が生まれる。

「それにしても、いつの間に作成をなさっていたんです」

ここ数日、いつもの給料泥棒ぶりを返上しての精勤である。これだけ整理された資料を作成する余裕はなさそうに見える。感心しかけたムライに、ヤンは軽く手を振った。

「過去の遺物の再利用だよ、参謀長。私は第六次攻略戦に参謀として参加していたからね。
その時にはお蔵入りしたが、それを引っ張り出して、手直ししただ

けさ」

ヤンの返答に一同は納得した。この分析があったからこそ、第七次攻略戦は成功を見たのだ。

そして、第六次が不首尾に終わったのは、これが日の目をみなかったのも一因だろう。

「簡潔な指示をいただいて感謝します。これに従って演習を実施します。

で、こちらのマニュアルは、読まないといけませんかね、ヤン司令官」

会議用机のそれぞれの席の前に置かれた、１０センチ近い厚さのファイルを、そばかすの青年がうんざりした様子で持ち上げた。それに頷く若干名。活字が好きそうではない面々だ。

「ああ、それか。結構面白いよ。

流石に参謀部の労作だけあって、章ごとの内容は簡略化されているしね。

まあ、その章が３５ばかりあるけれど。寝酒代わりにちょうどいいというか」

「お読みになったんですか」

灰褐色の眼が、別次元の生物を見るような表情を浮かべた。

黒い頭がこくりと頷き、こともなげに返答する。

「そうしないと決裁して、配布できないからね」

「活字中毒者にはご褒美だからな。まあ、要塞事務監として言うが、読んでおくように。

これはあくまで入門編であって、内容の拡充は各部門が当たるんだからな」

と言うからには、こちらも読んでいるということだ。司令官よりも隅々まで。

援護を貰えなかった両者の後輩は、鉄灰色の髪をかき回した。

「了解しました。読んでおきます」

「当然だろう。そのために配布したんだ。紙やインクも無料(ただ)じゃないんだ、勿体ない。

こんなもの、同盟軍の予算要求書と予算書決算書に比べれば、絵本並みの量だ。

全部読んでから寝るんだな」

つついた藪(やぶ)から大蛇を出した、若き提督にそこはかとない非難の視線が集中する。

要塞の影の実力者からのお達しだ。今後、このマニュアルを踏まえた内容でないかぎり、経費の要求は罷(まか)りならんという宣言でもあった。

「まあ、そんなに面倒がらずに読んでおいて損はないよ。とりあえず、私はこれで失礼するが」

ヤンは立ちあがると、ベレーを脱いで髪をかき回した。うんざりとした様子である。

「執務室で、書類が私を待っている。これも給料を貰うためさ。

数字の羅列に比べれば、文があるだけマニュアルの方が面白いよ。ではね」

恐らく、部下たちを安心させるために中座してきたのだろう。決してサボりではない。多分。

「それも給料のうちですよ、ヤン司令官」

先輩の揶揄(やゆ)に、恨みがましい黒い視線が向けられたが、言い返す時間も惜しいのだろう。

肩越しに小さく手を上げて、猫背ぎみの背が去っていく。

最強最大最悪の敵

見送ったキャゼルヌは憤然と言い放った。

「全く、この時期に部署の最高決裁権者を動かすというのは、その一点をとっても阿呆の所業だ。

予算の内容を、他部署の回線に送れるものか。お陰でこちらも大迷惑だ」

本来なら、あと半月先の仕事を司令官にまで上げなければならないからだ。

ようやく捕虜交換が終了したのに、事務部年間最大の山場、次年度予算要求書の作成である。

後方本部で、同盟軍全体の積算と査定をしていた頃より量は減ったものの、この要塞には前年度実績というものがない。要するに一からの作成だ。事務部の連中は青息吐息である。

ヤンは、給料を支払ったり、物資の補充をしてくれる部門を粗略には扱わない。グリーンヒル大尉に任せているらしいが、残業続きの事務部にかなりの頻度で差し入れが届く。キャゼルヌとしては、ドーナツやクッキーを運んで来てくれる秋色の髪と瞳の美人との、結婚資金にでも取っておけ、と言ってやりたい。

しかし、部下は司令官の心遣いに大喜びだし、女性士官が多い部署だ。男ばかりの司令部に配属されたグリーンヒル大尉も、友人ができて心なしか肩の力が抜けたようだ。

管理職として、けっこう心配りのできる後輩なのである。

ミジンコほどでも感受性があれば、副官嬢の好意に気付かぬはずもない。

やはり親友だったラップ大佐の死、アムリッツァの大敗が影響していると見える。

「えーと、キャゼルヌ先輩じゃなかった事務監、お怒りの内容は、ひょっとしてそれも？」

「当たり前だ。こっちは本業でてんてこまいなのに、このうえ雷神の槌（トゥールハンマー）まで撃ってられるか」

キャゼルヌの鋭い舌鋒に、シェーンコップは呟いた。

「いや、十分に口からは撃っていらっしゃるように思えますがね」

「何か言ったかな、シェーンコップ准将」

歴戦の勇者も怯む鋭い一瞥である。シェーンコップは内心で両手を上げた。

「いえ、何も」

「戦争は経済だと言うが、経済こそが戦争だぞ。帝国よりも貧乏が敵だ。

金銭（かね）がなきゃ、食えんし兵器もないし、戦艦だって動かせんよ。

そのためには、司令官の意見書とサインが欲しいわけだ。

ちょうどいい、各部門の責任者に伝達する。予算要求書の提出は、明日午前9時までだ。

一秒でも遅れたら、来年度はひもじい思いを覚悟してもらうぞ。

司令部以外は未提出だから早急に提出を。きちんと決裁を済ませてからな。

事務部からは以上だ」

藪から出てきたのは、火を吹くドラゴンだった。肩を竦めるアッテンボローである。
それでも恐る恐る挙手をして、質問ができるのは後輩の強みであろう。
「キャゼルヌ事務監。分艦隊の予算もですか？」
「そちらは司令部の予算要求に組み込んであるが」
返答はムライ参謀長からであった。
思わず胸をなで下したアッテンボローは、はっとしてムライに礼を言った。
「ヤン司令官からの指示だ。小官の部下とグリーンヒル大尉のお手柄だがね。
では、司令部の方はあれでよろしいかな、キャゼルヌ事務監」
「ええ、結構です。どのみち、要求が丸呑みされるなんてことは有り得ませんからな。
小官も切っていた側ですから。切らせておいて、必要額を確保するのが腕ですがね」
なんとなく、これを合図に散会と相成った。来るかわからぬ帝国の来襲よりも、明日午前9時以降に確実に襲ってくる事務監の舌鋒のほうが遥かに恐ろしい。
白兵戦の勇者にとっては、こちらの方も今までとまったく規模が違っていた。薔薇の騎士連隊（ローゼンリッター）は約二千人。イゼルローンの要塞防御部門の人数は、それどころではない。人件費は人事管理部が計算してくれる。せめてもの救いである。だが、彼らが必要とする装備品、兵器、エネルギー費。想像の彼方の金額だ。全く、雷神の槌で悩んでい

る場合ではなかった。

要塞防御部にも事務担当者はいるので、彼らに指示をして計算をさせるわけだが、算出根拠から手探りである。これも帝国軍の資料が発見されたため、帝国マルクをディナールに換算し、若干の予備費を盛り込ませるのが精一杯である。一点、シェーンコップの発案事業も計上したが、それの積算が一番楽だというのは、なんとも皮肉であった。

幹部会議の午後。ようやく決裁の終わった予算要求書を携えて、要塞事務監の執務室を来訪する。事務部の女性士官の熱い視線に、彼なりの礼儀で応えてから入室する。机上に書類を積み上げて、数字と格闘する事務の達人の姿があった。

「おや、貴官が直々に持ってきてくれるとは思わなかったが」

実に鋭いお人だ、とシェーンコップは胸中で司令官に語りかけた。閣下、この切れすぎるほど鋭い、数字と事務と毒舌の達人と、自分のどこが似ていると？

無論、ヤンが聞いたら本当に他人のことはよく分かるんだよね、と返したであろう。

「いえ、こちらが予算計上した事業に、きっと事務監からご質問があろうかと思いましてね。

どうせでしたら、一緒にご説明にあがった次第ですよ」

「ほう、見せてもらえるかね」

「どうぞ、お手柔らかに……」

薄茶色の眼が紙面を見詰めながら、右手の人差し指が小刻みにデスクの表面を叩く。

数頁が繰られ、右手の動きがふと止まる。

「これか」

「ええ」

キャゼルヌが指摘し、シェーンコップが同意したのは、軍人と軍属の健康診断に、より精密な薬物中毒の項目を盛り込む事業案だった。兵士、下士官、尉官以上と階段式に計算され、全額が無理なら出来る範囲で施行を、という強い要望がうかがえる。

「『シェーンコップの日』の件だな」

「あれにはぞっとしましたよ。閣下ご自身は言うに及ばず、あの坊やを人質に取って、

ヤン・ウェンリー出てこい、という輩が出ないとも限りませんからな。

要塞防御といっても、守るべきは場所ではなく人です。

ヤン・ウェンリーなくしては、ここは鉄屑に成り下がる。

閣下は護衛をお嫌いになるし、かといってご本人は戦闘員として三流以下ですし、

装甲服を２４時間着せるわけにもいかないでしょう」

「そうさなぁ。あれの稼働限界は2時間だったか、あいつじゃその半分も保たんな」

白兵戦で使用する装甲服には、小型銃火器や一般の刃物は通用しない。その半面、気密性が極めて高く、内蔵のエアコンでは体温より数度しか温度を下げられない。鍛え抜かれた陸戦部隊員でも長時間は着用できず、あの文弱な後輩には到底無理だ。

「そちらは冗談ですが、要塞という閉鎖空間で、麻薬の蔓延(まんえん)はなにより恐ろしい。
正直、兵士の健診の間隔では、薬物中毒を防ぐことはできないでしょう。
ですが、一定の抑止力は望める。下士官、尉官以上の間隔でしたら、実効性があります。
すくなくとも、チームリーダーが錯乱し、下っ端には手の打ちようがない、という状態は
防ぐことができる」

シェーンコップの説明に、キャゼルヌは頷いた。先日のミーティングでも思ったが、決して腕っ節だけの男ではない。ヤンに対する配慮も、役職を超えた細やかなものだ。

「それに、尉官以下は幹部との接触も少ない、ということもあるからな。
貴官の言い分には筋が通っている。よくできた事業案だ。だが、これは不要だったな」

あっさりと却下されて、シェーンコップの形のよい眉が鋭角的なラインを描いた。

「理由を説明していただきましょうか」

視線を鋭くする美丈夫に向けて、キャゼルヌは人の悪い笑いを浮かべた。

「次年度とは言わず、来月から実施するようにしたからさ。
健診の項目を増やすだけだから、検査金額を叩いた。今年度予算の誤差の範囲さね。
で、来年度はそれを継続する。前例ってのは強いからな」

薄茶色の瞳に浮かぶのは、策略家の笑みだった。

スペードのK、ダイヤのA

シェーンコップは肩を竦めて両手を挙げた。
映画俳優のような美男だけに、嫌味なほどに決まっている。

「いやはや、さすが将来の後方本部長との噂も高い方だけのことはありますな。
貴官のようなお人と、ヤン司令官やアッテンボロー提督が、先輩後輩関係になるというのが、
正直信じられませんがね」

「なんだ、貴官もヤンに言われたのか」

「ということは、事務監もですか」

異なる褐色の視線が交錯し、すぐに離れた。なんとも微妙な表情で。

「大変失礼ながら、それは無理です」

「奇遇だな、シェーンコップ准将。俺もだ」

「お三方の年齢的に、学校の先輩後輩ではないのでしょう」

シェーンコップの指摘に、キャゼルヌは頷いた。

「そうだ。俺が事務局次官として士官学校に赴任した時、
ヤンが3年でアッテンボローが1年だった。
まあ、俺自身4年前までは在学していたし、職員の顔ぶれもそう変わっていなかったから、

それでだろう。ヤンはよく鍵を借りに来るんで、自然と口をきくようになった。
アッテンボローは、ヤンに門限破りを見逃してもらって、懐いたんだそうだ。
あっちは、口八丁手八丁な姉貴が3人もいて、ああいう大人しくて聞き上手な兄貴が欲しかった
というところだな」

「それにしても、わずか２４歳で士官学校の事務局次官とは、俊英でいらっしゃる」

生徒は約二万人、教職員も二千人近い。それ自体一つの街なのだ。学生寮の衣食住、学校の物品や軍事教材のその他諸々、１個師団を抱えるに等しい。弱冠２４歳でその事務方のナンバー2に抜擢されたのだから、能力の高さは言うまでもない。千ページを超えるマニュアルを、絵本と言い切るだけのことはある。

「でもないさ。女性事務員に一からしごかれた。凄いもんだぞ、現場の知恵は。
紙やトイレットペーパーは、天気も考えて納入予定を組めときた」

「ははぁ、確かに。濡れると困るうえ、待ったが効かないですからな」

「まあ、そいつはどうだっていいが、あいつは戦史研究科廃止の反対運動の罰則中だったんだ。
シトレ校長も、本の虫に随分と粋な罰を与えたのさ。戦史研究科の資料庫の目録作りというな。
終業と同時に飛び込んできて、下校時刻ぎりぎりに鍵を返却に来る。
嬉しそうににこにこしながらだ。
随分変わった奴だと思ったもんだ。あの頃は、あいつにもまだ可愛

げがあったんでな」

「なるほど、謎が解けました。
ご本人が曰く、成績は中ぐらいで、目立つ存在じゃないとおっしゃっていたのでね」

シェーンコップは顎をさすった。
この男は口も人も悪いが、ヤン・ウェンリーにとってはよき先輩なのだろう。
畏敬すべき事務と策略の達人も、司令官が出会った頃にはもう少し歯の立つ甘さがあったのか。
現在では、煮ても焼いても食えそうにないが。

「目立たないが、教職員の気にかかる存在ではあったな。
ああいうタイプは、諸々の暴力のはけ口になりやすい。
今でも童顔だが、当時は体格も小さい方だったから余計にな。
戦史研究科から戦略研究科に転科になったのも、
十年に一度の秀才を戦術シミュレーションで破ったからだ。
そっちの成績は、元から戦略科だった連中よりもよかったんだよな」

「ほう。栴檀(せんだん)は双葉より芳し、といったところですかな」

「さあな。成績の偏りが極端なんだ。
体格も災いして格闘、戦闘系の実技はさっぱりで、工学系もぎりぎりの低空飛行。
なのに、くそ難しい戦史や戦術系教科はトップクラス。
当時、戦史には名物教師がいてな。偏屈な爺さまだった。
俺も学生の頃に習ったが、定期考査に殺意を覚えるようなくそ難しい問題を出すんだよ。
８０点以上とれる奴はほとんどいなかった。そいつで９８点をと

るんだぞ。
ああ、こりゃ手を抜いてる、と教師は思うよな」
この切れ者が、二回も繰り返す難易度というならば相当なものだろう。
教師の予想に対しては頷かざるを得ない。

「本物の劣等生は、努力しても及第点を取れませんからな」
「ああ、落第者も毎年2、3パーセントは出る。だが、あいつは志望理由が志望理由だ。
ガリガリ勉強する気にもなれなかったんだろう。
で、お望みどおりの閑職に配属されたんだが、
1年後の異動でエル・ファシルの英雄になっちまってな。
それからは出世に継ぐ出世、ついに六歳下の後輩が、俺より二階級も上ときた。
たったの1年で三階級も昇進されてみろ。軍の人事管理部も大変なもんだ」
シェーンコップは、腕を組み、右手で尖り気味の顎をさすりながら慨嘆(がいたん)した。
「こうして改めて聞きますと、異常ですな」
キャゼルヌの反論は明晰であった。
「簡単さ。ヤンの上位になるべき人間がいなくなったんだよ。
本当なら、要塞司令官に大将何某(なにがし)、その駐留艦隊司令官にヤン中将とすべきだし、
軍本部だってできるものならそうしたかった。

だが、現在の宇宙艦隊司令部は、ビュコックの爺さんしか大将がいない。
クブルスリー大将は統合本部長だし、グリーンヒル大将はアムリッツァの禊が済んでいない。
となると、あとはあのドーソン大将だ。
貴官、ジャガイモの廃棄率に目くじらを立てる人間を、司令官と仰いで戦えるか？」

シェーンコップは無言で頭を振った。キャゼルヌのもう一人の後輩、アッテンボローが蛇蝎のごとく嫌っている相手でもある。同様の若手士官は何万人かいるだろう。

「悪いが俺にも無理だね。経費の削減自体は悪いことじゃないが、要するに前線に出してはいけないお人なのさ。士気に関わる」

「そこまでおっしゃいますか。随分と辛辣だ」

「俺も彼の部下だったことがあるからな。
誰かの下で、細かい仕事をするにはいいが、トップには向かない。
とかく瑣末なことにこだわりすぎる。うちの司令官とは逆にな。
それに比べりゃ、ヤンはましな部類だよ。
物資の調達には、金も時間もかかるってことを知ってる。
で、食い物がなく、給料をきちんと払えない軍隊は崩壊するということもな。
優等生とは言えんが、及第点はやれる事務能力もある」

シェーンコップはもう一度頭を振った。

「キャゼルヌ事務監の及第点ですか。
さっきおっしゃった戦史の名物教師のような基準でしょうに」

「その爺さん、真面目にやれば６５点はとれるような配点にしてあったんだよ。
抜きん出るには、猛烈な歴史好きでないと無理だったがな。
それに比べれば俺なんて優しいもんだ。辞書の持込を許可してるんだからな」

同盟憲章を全文記憶しているという噂の、美しき副官のことか。
シェーンコップは片頬に笑みを浮かべた。

「これはまた、麗しい辞書もあったものだ。小官にも配備していただきたいですよ」

女性なら賞賛しただろう美丈夫のニヒルな表情も、キャゼルヌには何の有難味もない。

「貴官なら、自力でよりどりみどりだろうが。
さて、貴官のほうも、ヤン司令官に随分入れ込んでいるようじゃないか。
どうしてなのか聞かせては貰えんか？」

「事務監には、イゼルローン攻略の際、
閣下の御指名をお膳立てしていただいた恩がありますからな。
こんな場所でなく、一杯飲みながらお話いたしましょう。
小官が付いておりますから、どんな店でも心配はありません。いかがですか」

シェーンコップの言葉に、キャゼルヌはうず高く積み上げられた書類に目をやった。

「よし、そういうことにしようか。とりあえず、これをやっつけてからになるが。

ヤン司令官が出立した後になるが、いいかね」
「結構ですな。では、他の予算案もよろしくお願いしますよ」
「善処しよう」
シェーンコップは、しれっと答える三歳上の上官を、なんともいえない目で見詰めた。
「政治家の最高評議会答弁並みに誠意のあるお答えですが、大丈夫なんでしょうな？」
「安心しろ。あの場では脅かしてやったが、世間には補正予算というものがあってな。
足りなきゃ後からぶんどればいいのさ。俺が女性事務員に教えてもらった奥の手だ。
時に不便や恐怖を味あわせて、人と金と物の大切さを調教しろというのはな」
「誰に対してなのか、お伺いしてよろしいかな」
薄茶色の眼に浮かんだ怜悧な光は、絶対に敵に回してはいけない種類のものだった。
「貴官らには、書類は期日までに所定の手続きをして提出せよということだ」
「我々だけにではないでしょう」
「貴官は察しがいいな。
ハイネセンのお偉方には、イゼルローン要塞という前例のない部署

に、
新兵中心の兵員補充をしたからには、相応の演習費を覚悟しろということだよ。
前例のないことに手を付けると、必ず見込み違いが出てくるからな。帝国領進攻のように」

ローエングラム候のとった帝国の焦土作戦で、とにもかくにも物資を工面し、帝国の民間人に大きな被害を出さずにすんだのは、キャゼルヌの手腕によるものであった。だが、同盟軍の将兵の疲弊までは防ぐことができず、結果としてアムリッツァの大敗を招く。いち早くその危険を見切ったから、ヤン率いる第１３艦隊は七割を超える帰還率を誇った。

だが、それでもなお未帰還者は３０万人超。それが全体の約７０分の１に過ぎないという状況を、政府の首脳部は真に理解しているのか。

「あの時に失った人命のつけを、前線ばかりに押し付けることは許されない。
血を流さないのなら、血税で報いてもらう。それが俺の役目だ。
貴官らが戦斧を振るうのとは違うが、これだって戦いだ」

シェーンコップは、今度こそ実際に頭上に両手を上げた。

「全面降伏いたしますよ。その戦いに小官の出る幕などありません」

スペードのKと魔術師

シェーンコップは事務監執務室を辞去した。精神的に這々の体で。ついでに司令官の執務室にも足を伸ばしたのは、半ばは礼儀であったが、残りの半分は本人にも判然としない。留守部隊の実質的な指揮官として安堵が欲しいのか、後輩から見た『先輩』の情報が欲しいのか。

挨拶をして入室すると、グリーンヒル大尉が張り詰めた表情で、端末機器を操作していた。一流のピアニストもかくや、といった素晴らしいタイピング速度である。

キャゼルヌのところから、順次予算案が送られてきているのだろう。最終的に形を整えたものはこれから準備するので、司令官は意見書とサインだけでも先に寄越せというわけだ。

その前に、グリーンヒル大尉が予算の概要を作成しているのだろう。どこぞの首席と違って、こちらの次席は本物の優等生であった。立ち上がって敬礼しようとするのを、身振りで制止する。彼女もヤンの随員なので、一分一秒でも惜しいはずだった。

靡(なび)かぬ相手と分かっちゃいても、これだけの美人だ。本来なら世間話のひとつもしたいところだったが、励ましの挨拶に留める。

さて、その奥には疲れた表情のヤンがぽつりぽつりと端末を叩いていた。亜麻色の髪の弟子が言うには、彼は文章は手で書く主義のようだが、書式が定まっているので仕方がない。手元のメモ書きを文章にしながら入力しているのだろう。

普段は頭に乗っているベレーが机上の端に追いやられ、その下のおさまりの悪い黒髪は、暴風の中で長距離走をしてきたような有様だっ

た。

「閣下、お疲れのご様子ですな」

敬礼しながら声を掛けると、黒い瞳がちらりとこちらを向いた。

「ああ、本当にね。

できるものなら、こちらの代理も貴官にお願いしたいところだが、こいつも給料のうちだから仕方がない。もう予算要求書は提出してきたかな」

「なんとかでっち上げましたよ。勝手が分からぬことばかりでしたがね」

「そこはキャゼルヌ事務監がうまくやってくれるから大丈夫さ。

おや、貴官には珍しく、顔つきが冴えないね」

さっきまで対面していた相手の名を出されて、眉宇（びう）を曇らせた年長の部下に、得心したような表情が向けられた。

「おやおや、事務監に気に入られたと見えるね。やっぱり貴官と似たもの同士、気が合うのかな」

シェーンコップは愕然とした表情で、年少の上官を凝視した。彼としたことが咄嗟に返答ができず、天使が室内を一周するほどの間を置いてから口を開く。

「閣下、お聞かせ願えませんか。

キャゼルヌ少将と小官のどの辺が似ているとおっしゃるんです」

「髪や目の色もそうだけれど、二人とも私に対する発言に遠慮がない

よ。
もうちょっと、優しくしてくれてもいいと思うんだがね」
「聞き捨てなりませんな。小官の言葉など可愛いものです。
キャゼルヌ事務監のは、毒舌などというものではないでしょう。
もっと別の何かですよ」
この反論に、黒い目が細められた。
「ぶつけられる方からしたら、石もアイスピックもどっちも痛いのにかわりはないんだ。
私は貴官ら二人分を受けて立つ身なんだからね。
……そんなに傷付いた顔をしないでくれ。まるで私がいじめたみたいじゃないか」
「もう一つお聞かせください。小官が彼に気に入られたというのは……」
勇者に不似合いな口調に、黒い眉が上がった。ヤンの表情筋に高等技術はないので、素直に両方が。
「あれは先輩なりの親愛の情だよ」
「そんなに痛い愛は結構です」
シェーンコップの返答に、黒髪の魔術師はすげない口調で反論した。
「いや、貴官は愛情でちょっとは痛い目を見たほうがいいと思う」
この上官こそ、あの事務監と似た者同士ではなかろうか。茫洋とし

た印象の、おとなしい顔を再び凝視する。承服しがたい様子の美丈夫に、ヤンはふっと微笑んだ。

「キャゼルヌ先輩は、誰彼構わず毒舌をふるうわけじゃないんだよ。気に入らない相手には、逆に敬語のお手本みたいな言葉で接するんだ。

そのほうがおっかないのさ」

「そうですか」

あくまで疑わしげな部下に、ヤンは頷いた。

「『半年間の猛吹雪（ハーフイヤー・ブリザード）』と言えば、事務方で知らない人間はいないと思うよ。

キャゼルヌ事務監は、半年で少将を異動させた大佐なんだ。

まあ、周りが耐えられなくなって、後任の上官より先任者が残されたんだがね。

私もそうならないように、精々課題を片付けてから出掛けないといけないのさ」

雑談の終わりを告げられたわけだが、シェーンコップは一つ質問を返した。

「想像はつきますが、その上官は誰なのでしょうかね」

黒髪の『後輩』は、穏やかに言った。

「私の口からは言えないな。アッテンボロー少将に聞いてみたらどうだろう？」

ああ、知っていたとも。同盟軍の上層部も、政治屋連中も頭がどうにかしていることぐらいは。だが、これは極め付けだろう。何を考えていやがる。

薔薇の騎士連隊（ローゼンリッター）隊長代理のカスパー・リンツ中佐は内心で毒づいた。彼は、帝国軍との捕虜交換により帰還した兵士二百万人と共に、イゼルローン要塞司令官のヤン・ウェンリー大将と、同盟首都を目指して出発するところだった。

リンツの任務は、ヤン司令官の護衛である。宇宙最強の白兵戦部隊と名高い薔薇の騎士、その連隊長代理は鍛え抜かれた長身に、色褪せた麦藁色の髪とブルーグリーンの目をした、なかなかハンサムな青年だ。

彼が警護すべき大将ヤン・ウェンリーはまだ２０代。それもあと一月半で終わりを告げるが、同盟軍史上最年少の大将である。外見は実年齢より三歳前後は若く見える。黒髪黒目、中背で肉付きはやや薄い。穏やかで知的な表情と全体的に線が細いせいか、軍服を着てさえ若手の学者に見える。あるいは大学院生に。要するに、到底戦闘員向きではない。

ヤンは、自分が搭乗する艦艇には帰還兵を乗せないだろうと考えていた。船団の指揮官のサックス少将を始め、イゼルローンまで足を伸ばした政治家連中も同乗するからだ。それなりに武装を積んだ、巡洋艦か軽巡艦あたりを充てるだろうと。リスク管理上、それが常識というものである。リンツも全く同意見だった。

ところがどっこい、ヤンらが乗る艦艇は武器がビーム砲しかない輸

送船。おまけに、帰還兵三百人余りを同乗させるという。旅程は片道三から四週間。輸送船団の責任者のサックス少将からの、大将と言えども職分を侵すことなかれという嫌み半分の訓戒を大人しく聞いていたのも、あまりの状況に呆然としていたからだ。

極端に美化するならば、ヤンは深謀遠慮の人であり、臨機応変の人ではない。苦情を述べたてて、イゼルローン駐留艦隊の巡洋艦を出させることは不可能ではないが、それは日程を延ばすことができるならばである。だが、とてもそんな余裕はなさそうだった。

この輸送作戦は、そういったリスクに思いが至らないのか、思い至ってもその為のパワーソースを割くことができないのか。どちらがより深刻であろうか。

唖然として黙り込んでいる黒髪の司令官と、その真意にまでは思い至らない亜麻色の髪の少年の背後、若き大尉と少佐達と中佐は視線を交え、無言のうちに連携した。絶対にヤン・ウェンリーを一人にするな。ユリアン・ミンツもなるべく一人にするな、と。

そう考えれば、サックス少将の縄張り主義も、政治家に纏(まと)わりつかれている状況も、ヤンにとっては鬱陶しいことでも、警護の面ではマイナスにならない。

ユリアンについては、空戦の師であるオリビエ・ポプラン少佐と、その親友のイワン・コーネフ少佐がなにくれとなく構ってやっている。意外な人選ではあったが、どちらかと言うと被保護者に配慮したのか。もっとも、この二人の撃墜王(エース)は地上にあっても俊敏で、白兵戦も射撃もかなり腕が立つ。

ヤンの副官、フレデリカ・グリーンヒル大尉は、女性の身で次席卒業を果たした優等生だ。士官学校の授業科目には、白兵戦と射撃も含

まれるので、こちらも相当に優秀だろう。

まだ１４歳のユリアン少年でさえ、薔薇の騎士連隊の訓練の手ほどきを受け、素質を現し始めている。射撃はヤンよりも上手いに違いない。

リンツは絵を描くのが趣味だ。そして白兵戦の教練では、敵の身長体重を目視から推測することを叩き込まれる。自分より体格の勝る相手とは、一対一の交戦をなるべく避けるべきだからだ。

この二つの素養から推測するに、ヤン司令官の身長は１７５、６センチ、体重は６３キロ前後。身長がさほど変わらぬ二人の撃墜王よりも、一割弱は痩せているにちがいない。この御仁に、白兵戦の名手たることを望むのは無理だろう。骨格自体が細身にできているのだから。中肉に見えるのは、顔の小ささに誤魔化されているだけだ。

リンツはヤンの警護に注意を傾けた。サックス少将の白眼視のせいで、輸送船の一角に止めおかれ、必然的にだいたい全員が揃っている。ときにポプランが女性と仲良くしたり、帰還兵の乱闘騒ぎに首を突っ込んだりしているが、このお調子者の嗅覚は馬鹿にならない。どこからともなく噂を聞きつけてくるのだが、案外役に立つのである。

一方コーネフは、静かにクロスワードを解いていることが多い。本の虫であるヤンも、傍らで読書に勤しんでいるので、これはこれで悪くない。時にキーワードに詰まると雑学に強いヤンに、教えを請うていたりもするので、警護しているように見えないという利点がある。

そうとは知らないユリアンが、帰還兵と会話をしているのを見かけたので、何食わぬ顔で声を掛け、トレーニングルームに向かう。

薔薇の騎士連隊の勇名と悪名は、同盟軍にも遍（あまね）く知られるところで

あり、リンツが鍛え抜かれた肉体と身体能力を披露するのは、これもまた抑止の一環である。結局は軍隊、筋肉主義（マッチョイズム）なのだから。

それでも、移動にかかる時間の無為さよ。グリーンヒル大尉のように、事務仕事に勤しむような勤勉さは、黒髪の寝たきり司令官にはない。これはリンツも同様だが。

「やはり、イゼルローンから巡洋艦を出して貰えばよかったかなぁ」

「どうしてですか、ヤン提督」

「ああ、あれなら戦術コンピュータに戦史ライブラリが入っているからね。

持ってきた本を全部読んでしまったんだよ。私には、貴官のような特技がないからね」

その持ってきた本は、かなり厚い歴史書が十冊はあったはずだ。これが活字中毒者というやつか。

「ユリアンから聞いたよ。絵を描くのが趣味で特技だとね。

私はあんまり能のない人間で、趣味は読書と昼寝だし、

そういう特技のある人を無条件で凄いと思うよ」

「しかし、閣下は同盟軍史上最高の智将でいらっしゃると、小官は思っております」

麦藁色の髪の青年の言葉に、黒い瞳が優しい笑みを見せた。優しすぎて悲しげにみえるほどの。

「ああ、ありがとう。しかしね、戦争の才能なんて何も生み出さない。

まあ、軍人の私が言うのも今更だけれどね。

絵を描いたり、楽器を演奏したり、料理を作ったり。
スポーツでもいいんだが、そういう才能は羨ましいものだよ」

「閣下も歴史がお好きだと伺いましたが」

リンツの言葉に、ヤンは軽く右手を振って苦笑した。

「私はそっちの才能はあんまりないよ。
歴史の流れを広く知りたいと思うと、水深は浅くなる。
多分、せいぜい二流の研究者で終わっただろうね。
一つの時代、一人の人物、その研究に半生を費やしても足りないことが多いんだ。
西暦時代から現代までとなると、寿命が何千年もないと無理だろうな。
だが、もし数千年の寿命があっても、その研究中に新たな歴史が生まれるんだ。
結局は無理ってことさ」

「そういうもんですか」

「西暦時代の資料は、１３日間戦争で相当数が消失してしまったんだ。
その時点で西暦２０３６年だった。今から約１６００年前のことだ」

「気が遠くなりそうですな」

ヤンは頷いた。

「熱核戦争は地球の北半球中心を焦土に変えた。
その時に、人類の遺産とされたものの多くは灰になってしまった。
地球統一政府の成立以後に、残った資料や映像から復元されたのが

一番古いものだ。
教科書に『復元』と書かれたものがそれにあたる。
無論、南半球にあって難を逃れた物もあったがね。
これらは、銀河連邦も人類の遺産として大事にしたんだが、
ルドルフの弾圧で焼かれてしまった物がある。
長征一万光年には、そもそも持ち出せない物が多かった。
同盟成立後、改めて復元を図ったんだ。これが『新復元』さ。
せいぜい二百年しか歴史がないし、ものによっては『復元』と『新復元』両方がある」

この言葉は、リンツにとって目から鱗のものだった。

「そうだったんですか。いや、長年の謎だったんです。
美術の画集にもそれが載っているんです。一体何のことだろうと思っておりました」

「ああ、絵画もそうだね。
ただね、同盟に伝わっているのは元々歯抜けの資料ばかりさ。
帝国で入手できる資料には、ルドルフのバイアスのかかった物が多いだろう。
絵画もそうなんだ。ルドルフは、ゲルマン系の古典作品以外を弾圧した。
ただ、あんまり詳しくはなかったんだろう。
隣国の画家の作品でも、有名な物は生き延びたんだよ。
モナ・リザや真珠の耳飾りの少女、聖母子といったあたりだね。
みんなドイツ人画家の作品ではないのだがね」

ヤンが並べた古典作品は、有名なものばかりだった。だが、もう一つ共通点がある。

「美人ばかりですな。お目こぼしされたんでしょうかね」

明らかに先代連隊長の影響がうかがえる。ヤンは苦笑した。

「いや、そればっかりじゃないがね。レンブラントやファン・ダイクの作品も残った。

帝国貴族に需要があったからさ。肖像画のお手本として」

「は、肖像画ですか」

「貴官も描いているみたいだけどね。

今言った二人の画家は、西暦１６、７世紀のオランダの名肖像画家なんだ。

その頃のオランダはとても豊かで、金持ちは結婚式なんかの際に、プロカメラマンを頼むような感覚で、肖像画を描いてもらったんだ。

一張羅を身につけてね。画家は顧客の顔はもとより、身に付けた衣装も美しく描写したのさ。

女性のドレスのレースや刺繍、アクセサリーまで。ま、予算によって画家の格は違うんだが。

帝国の上流貴族は今も描いてもらっているんじゃないかな」

歴史学者になれなかった名将の言葉に、画家になりたかった白兵戦の雄は感心しきりだった。

「ああ、そうだったんですか。お詳しいですね、閣下」

「ほんの一通りだけれどね。歴史を知るうえで、当時の文化は不可分のものなんだよ。

文化が歴史から影響を受ける、あるいはその逆も多いからね。

この肖像画家たちは、写真の発明と共に激減してしまうんだ。

西暦１９世紀から２０世紀のことだ。職業画家自体もそうだよ。

写真の方が正確で、技術もいらない。少なくとも、絵を描くほどにはね。
それでも、絵画はなくならなかった。今も貴官や沢山の人が描いているだろう」

リンツは頷いた。

「カメラの普及の後は、写真にできないような表現で描く画家も出てきた。
ピカソは、人間や風景を構成する形を図形として再展開し、
形に内包されるものを表現しようとした。
また、ダリは自分の想像の中のありえぬ幻想を形にした。
面白いのはこの二人、それこそ写真のような絵を描ける天才だったんだよ。
ピカソなんて、12歳の頃には画家の父よりも絵が上手で、父が絶望してしまったほどさ」

「はあ、あの訳わからん絵にはそういうエピソードがあったんですな。
子どもの悪戯(いたずら)描きみたいなのもありましたよ、そういえば」

「うん、正直私もあれは訳が分からない。何を考えていたんだろうとは思うけどね。
でも、『ゲルニカ』からは戦争への怒りが伝わってこないか。天才の力かな、やはり」

「しかし、どちらが好きかと聞かれましたら、閣下が最初におっしゃった美女の方ですな」

ヤンは黒髪をかき回しながら微笑んだ。

「そりゃそうだ。だからね、ピカソも最初のうちは散々に酷評された

よ。
それに、人間綺麗なものが好きだろう。これは不変だと思うよ。
自分の手で描きたいという欲求は、変わらないんじゃないのかな。
写真が生まれ、立体写真まで発達しても、地球を離れて星の海を渡るようになっても。
まあ、イゼルローンの連中をスケッチするのはいいが、本人に許可を貰うように。
貴官が将来個展を開くにあたって、揉めるのは困るだろう？」

「やれやれ、お見通しでしたか。
改めてお伺いしますが、閣下を描かせていただいてもよろしいでしょうか」

リンツの問いかけに、黒髪の魔術師は澄まして答えた。

「ちょっとはハンサムに描いてくれるんならね。
さっき言った名肖像画家達は、本人に似せながら美化が上手だったから売れっ子だったんだよ。
貴官もお手本にするといい」

麦藁色の髪の素人画家は、思わず半眼になってしまう。

「ですからね、閣下。そういう歴史的な大家を基準になさるのはよくないと思いますよ」

「そうかなぁ」

「そうですよ」

分厚いマニュアルを大きな手でめくりながら、逞しい肩がどことなく落ち込んでいる先代連隊長の姿が脳裏をよぎる。戦闘のない夜は、

独り寝をしないような色事師に、一体何があったのか。

ヤンが出発する前の幹部会議とその後の出来事が、シェーンコップに与えた影響をリンツは知らない。

画帖の美女と野獣ども

「とは言ったもののなぁ」

あの後、ヤンに随行している面々にも許可を貰ってスケッチをさせて貰った。ユリアン、グリーンヒル大尉、ポプラン、コーネフの両少佐。正直、この連中はかなり似顔絵を描きやすい部類だ。美男美女というのは、顔の部品と配置が整っている。

困ったのは、最も階級が高い相手の顔である。ハンサムに描いてくれ、といった若き大将は、画家の眼からすると充分に美男の部類だ。部品も配置もかなり整っているし、骨格も均整が取れている。それを描写すると、途端に別人に見えるのはどうしてなのだろう。これ誰なんだ、と描いた本人が自問してしまう。本来の造作から、何かが一枚か二枚ベールを掛けている、そんな容貌なのだ。

「やっぱり、眼だな」

何枚か描いてはみたが、どうにも似ていない。肖像の一枚の目元を黒く塗りつぶし、サングラスを掛けさせる。おや不思議、なかなか似ているではないか。各種メディアが大きく載せる写真そのものだ。リンツは唸った。

それを聞きつけたグリーンヒル大尉が、怪訝な顔で近付いてくる。スケッチした中で、最も描きやすかった美女だ。顔のパーツが、ほぼ黄金律に近い配置をしている。こんな武骨な軍服ではなく、それこそ絹のドレスでモデルになって欲しい。彼の前任者なら、ドレスを着させるなんて勿体ないと言ったであろうが。

「どうかなさいましたか、リンツ中佐」

「いや、失礼。ちょっとね」

「あら、閣下の絵ですね。お上手だわ」

ヘイゼルの瞳が紙面の想い人を認めて、輝きを増す。眩しくも美しい、恋する者特有の煌(きら)めきだ。男と生まれた者なら、絶対に気がつく。己に脈などないことも。ユリアンも気付いているだろうが、ままならないのが初恋だ。

「いやいや、ヤン提督はなかなか難しい題材でね。
上手く描けないから、苦手な部分を隠したんだ。
完成はしたが、失敗作の部類だね」

「よく似ていらっしゃると思いますけれど……。リンツ中佐が苦手、というと閣下の眼ですか」

「ああ、眼を描くとこういう感じになるんだよ」

前のページを開く。文字どおりの柳眉が寄せられた。

「別人ですわね……。いえ、確かに閣下の顔ではありますが」

首を傾げる金褐色と、首を振る麦藁色と。

「そうなんだよ。流行の顔ではないが、なかなか美男子なんだ。
でも、これは美化のしすぎと笑われるぜ。あのちょっとぼんやりした眼が表現できなくてな。
俺の才能なんて大したもんじゃないが、こりゃあ個展を開いても出展できないよな」

「お、何やってるんだ」

気安く声を掛けてきたお調子者の名を、挙げる必要があるだろうか。緑の瞳に、好奇心を浮かべて二人の手元を覗き込む。

「なあ、これ誰だ。こんな奴いたっけか」

明るい褐色が頭を捻る。それを後ろから覗き込んだ淡い色の髪の主も、物静かに考え込んだ。

「ほら、やっぱり失敗だろう。本人と分からないんじゃ肖像画にならない」

リンツがお手上げのゼスチャーをした時だった。二人の少佐が異口同音に正解を口にした。

ヤン提督、と。素人画家の方が逆に驚いた。

「描いた本人がいうのもなんだが、よく分かったなぁ」

「おいおい、もっと似せろよな。でも、確かにこういう目なんだよ。普段の顔だと分からんが、じっと見詰められるとさ、あ、結構ハンサムじゃん、て」

やっぱり分かる者には分かるのか。嬉しさ半分、焦りも半分なのはフレデリカの内心である。

事務部門の友人も、そんなことを言っていた。写真撮影が趣味の女性だ。

あと半歩押し出しが足りない、もったいないと。

「コーネフ少佐はどうしてお分かりになりましたの」

フレデリカの質問に、冷静な方の少佐は、スケッチブックの一点を示した。

「階級章」

分かったのはそれでか。リンツは逆に消沈した。

「後は髪型だな」

ポプランは、親友をしみじみ眺めた。

「おまえって、そういう奴だよな。

あ、待てよ。リンツ中佐。貴官、おれもモデルにしたよな。

ちょっと見せてくれ。これじゃ、おれの美貌がきちんと描けているか疑わしい」

「ポプランの顔云々はどうでもいいが、確かに他の作品を見せて欲しいな」

撃墜王（エース）ふたりにじり寄られ、リンツはしぶしぶスケッチブックを差し出した。

「分かったよ。だが、司令部のお歴々はヤン提督以外無許可だからな。

黙っててくれよ。その、グリーンヒル大尉もよろしくお願いする」

「ええリンツ中佐、了解しましたわ。小官にも見せていただけますか？」

麗しい笑みを浮かべた美女に返す言葉は諾のみだ。だが。

「ああ、どうぞ。だがお手柔らかに頼む。貴官らもな」

ヤンとユリアンが、何回目かの政治家からの呼び出しにげんなりしている頃、若手士官たちは、絵画鑑賞会を開き始めたのだった。

「あ、あれ……思ったより上手いな」

「リンツ中佐、こいつが失礼なことを言って申し訳ない。だが、思った以上に上手だな。みんなよく似ている」

揃って結構失礼な発言をする、空戦隊隊長二人。その理由は司令官の絵のせいだろう。似顔絵を描くコツは、特徴をデフォルメすることなのだが、かの青年提督の容貌には尖った部分もへこんだ部分もないのだ。彩色という最終手段をとるにも黒髪黒目。このスケッチと変わらない。なかなか素人画家泣かせの素材だ。

いま少し年配であったら、皺などの特徴が出てくるのだろうが、二十代半ばにしか見えない若々しい皮膚には、まだその兆しはない。

「ヤン提督以外はな。あれはちょっと美化しすぎじゃないか」

そんな論評をしながら、頁をめくっていたポプランの手が止まり、なんとも奇妙な音が口から飛び出した。同じ絵を見たフレデリカは、艶やかな唇を上品に手で押さえ、視線を逸らせて肩を震わせる。冷静なのはコーネフ一人だった。

「リンツ中佐、大したものだな。顔が描いていなくても一目で誰か分かる。

風刺画家にでもなればよかったのに」

「そりゃ嬉しい評価だな。金銭(かね)があったらそうしていたんだが」

「いずこも同じだな。それにつけても金の欲しさよ、か」

目鼻のかわりに『規律』と描きこまれた肖像である。だが、顔の輪郭や謹直に伸びた首や背筋、きっちりとした角度の敬礼の手から、誰を描いたものか一目瞭然であった。その後に、司令部の他の面々が続き、最初の方のページは薔薇の騎士（ローゼンリッター）連隊のメンバーで埋められている。

「確かに似てるよ。だけどむっさいなぁ。
筋肉ばっかりで、潤いってものがちょっとしかないじゃないか。
もっと頑張って美人モデルを探してくれよ」

この絵に対する女尊男卑主義者の言い分に、リンツは反論した。

「無理を言うな。
俺たち薔薇の騎士を、こんなに信任して内勤にさせてくれた上官なんて、ヤン提督が最初だぞ。
前線基地に花もなにもあるものか」

極一部に例外はいるが。それをすかさず指摘する、その道のライバル。

「でも、あのおっさん、よろしく」

ポプランの口から再び奇妙な音が飛び出す。妙齢の女性に不適切な言葉を継ぐ前に、コーネフが脇腹を小突いたからだ。実にさりげなく。咳き込む親友（？）を放っておいて、コーネフは目を瞠っている明るい髪の男女と会話を続けた。

「いや失敬、リンツ中佐、グリーンヒル大尉。
だが、この輸送船団には結構女性兵がいるのも確かだ。誰かに頼ん

でみたらどうかな。
グリーンヒル大尉の同室の女性は、なかなか美人だと思うんだが」
「おお、褐色の美女のドールトン嬢、いいね。
もうちょっと唇が薄けりゃ完璧なんだが、あれはあれで色っぽい」
この提案に、リンツは首を振る。
「折角だが、それは案外難しいんだ。
かなり気心知れた相手でないと、女性はＯＫしてくれない。
その点でも、グリーンヒル大尉には感謝するよ」
「グリーンヒル大尉に仲介してもらうのは？」
顔を顰め、脇腹をさすりながら食い下がる緑の瞳の色男。ここまで来るといっそ天晴れだが、同僚のヘイゼルの瞳には何ともいえない色があった。どう見てもマイナス方向にひかれている。残りの男二人は呆れた。
まあ、分からなくはない。脈のない相手に拘泥しないからこその色事師である。勢い込む外野を白っぽい目つきで見た画家は、きっぱりと言った。
「グリーンヒル大尉に、そんな迷惑はかけられないな。
相手だって断るにも気が重いだろうし、
ＯＫしてもらっても無理強いしたように思えるじゃないか。
モデル料も出せないし」
「そこで食事でもって、持っていくんだよ。なんのための趣味なんだ」
「阿呆か。そういう目的の趣味じゃない。食事ったって輸送船の士官

食堂だ。
雰囲気もなにもないだろう」
「そっちこそあほだろ。なんで輸送中にお礼をするんだよ。
ハイネセンに到着してからでいいじゃないか。その後にだな……」
今度はハートの撃墜王の口は、奇妙な音を発することはなかった。クラブの撃墜王が食らわせた、正確無比な肘打ちのせいで声もなく悶絶したからだ。スケッチブックを囲んだ椅子の上で、座り心地が悪そうな紅一点への配慮のようだったが、あまり効果的とも思えなかった。
「あの、それは無理だと思いますわ。私は……」
苦笑を浮かべたフレデリカが、同室になった褐色の肌の美女について言及しようとした時だった。ユリアンの入室の挨拶が掛けられ、亜麻色の髪の少年と、その保護者がイゼルローン組のエリアに戻ってきた。
「やれやれ、行ってきたよ。おや、みんなお揃いだね。ところで、ポプラン少佐はどうしたんだ」
「持病の癪(しゃく)です」
平然と回答する加害者に、黒髪の司令官は首を傾げた。
「そうか。なかなか古風な持病だね……まあ、お大事に。
盛り上がっているところに済まないが、良くないニュースだ。
ハイネセン到着がすこし遅れるらしいよ。政治家の皆さんには、そういう説明のようだ」

溜息を吐きながら、ベレーを脱いで髪を掻き回す。かなり精神的に疲れているようだ。保護者の様子に、ユリアンは給湯室の方へ歩き出した。ブランデー入り紅茶か、あるいはその逆が必要と判断したのだろう。その背が消えるのを待って、ヤンは口を開いた。

「これっぽっちの情報を手に入れるのに、こんなに時間も気もつかうんじゃ、

私には情報参謀の素質はなさそうだ。サックス少将には避けられていてね。

議員達と会談中です、と言われてまで横槍を入れるのもなんだから」

リンツはうんざりした。あんなに大見得を切り、ヤンの性格をいいことに邪険な扱いをしておいて、いざ不都合になると避けて回っているのか。随分と肝の小さい男だ。

帰還兵二百万人と、同盟軍屈指の名将を輸送する、その重要性をやはり上層部は理解していないようだ。この頼りない若手士官のような黒髪の提督は、帝国に対する最後の砦にも等しいのだが。

「仕方がないんでユリアンにも足労を願ったんだ。

議員の中に、トラバース法成立に尽力したのを売りにしている人がいてね。

私にしたら、同盟憲章違反すれすれのあれをどうして誇れるのかと思うがね。

ユリアンを出汁にしたのは悪かったが、あの子の顔を見たあちらさんが教えてくれてね。

まったく、さっぱり、はかばかしい答えではないが、我々にはどうしようもない」

ヤンはベレーを握りしめたまま、困ったを連呼しながら私室に入ってしまった。

「かなり来ているな、ヤン提督は」

コーネフがぽつりと呟き、フレデリカの美しい眉が、気遣わしげに寄せられる。旗艦（ヒューベリオン）の艦橋では、どんな戦況にあっても冷静さを失わないヤンのこの態度。呑気なぼやきのようにも聞こえるが、その実かなり深刻だ。

それを理解しているのは、恐らく自分だけだ。ここにいる男性士官は、皆とても頼りになる。しかし、彼らには違う戦場がある。艦隊を指揮する名将としてのヤン・ウェンリーを知らない。あの灼熱と光芒の錯綜するアムリッツァで、戦闘そのものには一言の弱音も吐かずに退却戦を成し遂げた彼を。

役に立ってしまったシロン葉のティーバッグに、嬉しくなるどころか気が重い。

気が重いと言えばもう一つ。ポプラン少佐が評する褐色の美女、同室者のドールトン大尉だ。親しくはしてくれる。だが、言葉の端々から微かな冷気を感じる。

女性士官がヤンの事を聞きたがるのはよくあることなので、普段はあまり気にならない。黒髪の青年提督は、俗っぽいメディアで『同盟軍一結婚したい男』の座を長らく独占しているのだ。ファン一号として、フレデリカも随分その手の報道をチェックしていたので、そう悪しざまにも言えないが。副官としては、相手の様子を見ながら、よもやま話と守秘義務をミックスしてやり過ごす。

普通はこれで納得してくれるものだ。お互い仕事をしていれば、その線引きは理解ができるから。だが、ドールトン大尉はどこか違う。一度会話を終わらせても、次の雑談で手を変え品を変え、何度も聞い

てくる。なのに、好意や恋情からというには、その表情や口調は温かさに欠ける。

彼女はどこか不自然だ。自分やヤンに怒りを感じているのではないか。個人的には全く身に覚えがない。ヤンもそうだろう。だが、ヤンの元に届いた投書のように、アスターテやアムリッツァの会戦の犠牲者の遺族ということは考えられる。その程度の身辺調査は、本来この任務に就く前に実施すべきことなのだ。同盟軍上層部に、その認識が欠けているのではないか。

キャゼルヌが更迭されずに後方主任参謀の座に健在なら、水も漏らさぬ計画が立てられ、時々刻々と予定どおりに進行しただろう。かわりにイゼルローンが混乱の坩堝になっただろうが。

フレデリカとしては、非日常より日常を愛する。キャゼルヌがいない輸送団より、彼のいるイゼルローンを選ぶ。しかし、現状は不明、説明は不十分、同室者は不穏と不の三重奏だ。

一介の大尉にはどうしようもないが、そろそろ上官と父、二人の虎の威を借りることを検討すべきか。ここの際、雌狐と言われても仕方がないだろう。確かにそういう髪と目の色なのだし。

きっとヤンは嫌がるだろうが、明日の状況いかんによっては札を切るべきかもしれない。彼女は密やかに決意した。彼の代わりに泥を被るのも副官の役目だ。

君に注ぐ一杯の酒

その晩の夕食の際にも、到着の遅れは話題にのぼった。コーネフ少佐が、航法士官の仕事ぶりに疑義をさしはさんだのである。イゼルローンからハイネセンまでの距離は約三千光年。かかる日数は三週間から四週間だ。ワープの際に脱落艦が出ないように、また円滑に補給が受けられるようにしなくてはならないため、大船団ほど時間がかかるのは仕方がない。

今回の輸送人員は2個艦隊に匹敵し、必要な物資は膨大な量になる。要所で補給を受けながら、ハイネセンを目指しているわけだ。通常の艦艇と異なり、兵員輸送船は快足とはいかない。

しかし、通常の艦隊出動ではない。補給物資は、食料と生活雑貨、航行用のエネルギーでよい。だから補給の時間は、むしろ短縮されている。この予定は、今までに行ったイゼルローン攻略の往復路の航行時間から、長めに算定されていた。よほどのことがない限り、明日には到着するはずなのだ。

宇宙乱流が起きたわけでもなく、補給が滞って推進機関のエネルギーが不足しているのでもない。となると、正しい道を歩んでいるのかと、星図と羅針盤の担い手に疑いの眼差しが向けられる。

あまりに航路を逸脱していたら、どこかの航路管制センターから警告が入るのでは、とユリアンがなかなか優秀な指摘をする。しかし、これには抜け道があることを、コーネフは逆に指摘した。予め、航路管制センターに航路変更の連絡をしておけば、わざわざ警告もしないだろうと。

帝国のスパイが潜り込んで、偽りの航路データと進路報告で、船団

をあらぬ方へ誘導できるかも知れない。もちろん、長期間は無理だが、一週間から十日くらいなら。荒唐無稽なB級映画のような話だが、これには歴史的な実例がある。帝国の猛将を封じるために、統合作戦本部の情報参謀が彼の旗艦の航法士官を買収し、同盟の勢力宙域まで迷い込ませて拿捕(だほ)したのだ。七十年前の出来事である。

「話としては面白いが、事実だったらちょっとたまらんなあ」

リンツは逞しい腕を組んで嘆息した。当時はイゼルローン要塞はなかった。そこを後にしてきたのだから、よもやそんなことはないと思いたい。だが、帝国にとってヤン・ウェンリーにはそうする価値があるのだ。

またまた政治家たちとの会食に招かれ、見当もつかない料理を並べられたヤンは、大して手もつけずに逃げ帰ってきたようだ。紅茶のティーバッグの方が貴重品となったため、被保護者に釘を刺されながら、生(き)のブランデーをちびりちびりと啜(すす)っている。かなり豪華なつまみは、士官食堂のコックの心尽くしである。

例の政治家連中はコックに過大な要求を突き付けるため、彼らも大いに鼻白んでいた。レシピを知っていても、数百人分の食事を作る傍ら、アスピックゼリーやらサーモンクネルなんぞ悠長に作っていられるか、というのが正直な思いである。製作者の誠意を欠いたメニューは、要求者よりも同盟軍屈指の智将を悩ませていた。要はその埋め合わせである。

ユリアンとグリーンヒル大尉は睡眠のために自室に戻り、ポプランは夕食の際に女性と同席していた。リンツへの説教の内容を早々に反故にしたようだ。コーネフも自室。寝ているかクロスワードパズルを解いているか、まあどちらかだろう。

夕食の時の話題をヤンに伝えたところ、この名将は次のような回答をくれた。

「ははぁ、バルドゥング提督の拉致だね。だからね、彼はそういう手段をとらないよ。

リンツ中佐、ローエングラム候の天才性とは、正統的な正攻法を実施できる手腕にあるのさ。

古来より、軍事行動の三原則というものがあってね。天の理、地の利、人の和だ。

その全てを欠いた同盟軍を焦土作戦で疲弊させ、分散したところを狙う。

そして、多数の艦艇と精強な兵を揃え、有能な提督に指揮させる。

これ以上ない正解だ。戦う前に勝負をつけるのが戦略なんだ。

ユリアンにも言ったことだが、戦略は正しいから勝つ。彼は極めて論理的なんだよ。

旗艦一隻ならまだしも、二個艦隊分のおまけがくっついている状態で手出しはしない。

無駄飯食いが割り増しになるだろう」

ここまではいい。作戦参謀畑の出身者らしい、簡潔で明快な分析である。

いっそ、最高評議会でぶちまけていただきたいものだ。政治家も国民も目を覚ますだろう。

だが、その後の台詞はいただけない。

「第一、私だけをどうこうするなら、捕虜交換の際にキルヒアイス提督に似せた暗殺者でも

送りこんだ方が効率的だ。人的被害は遥かに少ない」

「閣下！」

淡々と述べる穏やかな上官に、リンツは気色ばみかけた。歴戦の薔薇の騎士（ローゼンリッター）、その連隊一番の歌い手の声は、腹に響く迫力がある。それを、銃や戦斧に縁がなさそうな手が制した。

「歴史にもしもはないんだから、いいじゃないか。ローエングラム候はそういう方法を
取る人物ではないよ。彼の野心と構想は、雄大で緻密なものだろう。
そして、性格的にそんな謀略、いやせこいことを考えられないと思うよ」

「どうしてそのようにお考えになるのか、理由を小官にお聞かせ下さい」

ヤンはブランデーのグラスを卓上に置いた。行儀悪く組んだ立て膝に左肘をついて、その手で顎を支える。

「簡単だよ。
私が逆のことをするかもしれないと考えるなら、己が半身同然の人物を使節にしないからだ。
キルヒアイス提督は親友であると同時に、
ローエングラム候の構想を理解している軍事的才能の持ち主だよ。
二重に貴重な人材を、私の許に送りこんだのは、彼にとっては最大限の誠意であるのかな」

「はあ、そうですか」

「無論、私もそんなことはやらない。
キルヒアイス提督の暗殺は、百害あって一利なしだからね。
並べ立てたらキリがないが、主な理由は三つかな。
まずね、戦場以外でそんなことをしたら法的にアウトだ。

そして、道義的にも同盟は帝国より悪虐の国家ということになる。
第三に意味がない。
ローエングラム候本人ならともかく、無二の親友で片腕であっても、
能力的な損失は数で対応できる。
あちらの将帥は、綺羅（きら）、星のごとき質量を誇るからね」
「数で補いなどつくのですか」
「能力的なものならばね」
承服しがたい様子のリンツに、ヤンは言葉を続けた。
「人間の個人差は大きいが、集団に均（なら）すと彼我（ひが）の差は縮小するものだろう。
ローエングラム候は一万人に匹敵するような天才だが、逆を言うなら凡人二万人ならば
彼を凌駕できるんだ。唯一の目的に意志を統一できるのならば。
だが、二人いれば対立が起き、三人寄れば派閥ができるのが人間というものだ。
だからこそ、一人が一万人の力を持つ天才は冠絶した存在なんだよ」
「そうおっしゃるからには、補えないものがあるということですか」
リンツのブルーグリーンの目を黒い目が見詰めた。
「本当は問わなくてもわかるだろう。感情的な損失だよ。
絶対に埋めることなどできず、激烈な憎しみを齎すだろう。
我々を滅ぼしつくしても、治まらないかもしれないね。私がそう読むだろうと思っての人選さ。

私や同盟上層部の判断力をそれなりに評価してくれたとみるべきかな」

穏やかで、若手の学者の講義のような言葉だった。分かりやすく整理された中に、巧みに警告が織り交ぜられて、情理双方の説得力があった。

リンツは逆に想像してしまう。この上官こそが、同盟上層部をそのように説き伏せたのではないか。問い詰めたところで、ヤンは答えないだろうが。敬愛する前連隊長が言うように、この黒髪の魔術師は大人しい顔をした曲者だ。

「閣下がそうおっしゃるなら、帝国の謀略ではないのでしょう。しかし、根本的な解決になっておりませんが」

リンツの指摘に、ヤンは黒い髪を乱雑にかき乱した。

「そうなんだよ。明日の到着予定というのは、最大上限の見積りなんだ。

補給等のロードマップから算出すると、昨日の夜か今日午前中には着いていたんだが。

明日にはサックス少将から事情説明があるだろう。我々にはどうしようもないんだ」

肩を竦めたヤンは、新たなグラスを取りあげ、リンツの前に置く。薔薇の騎士連隊長代理が制止する暇もなく、深い琥珀の色が注ぎ込まれた。

「ところで貴官、酒は平気かい？」

「は、平気ですが……」

年長の上官という二重の上位者に酒を注いでもらって、リンツは恐縮するしかない。ヤンは手酌で、自分のグラスにもちゃっかりと酒を補充する。普段の動作に似合わぬ大した俊敏さであった。

「ではいただきます」

「航海の無事を祈って、乾杯」

グラスを持ち上げて、目でリンツを促す。二つの酒杯がふれあい、涼やかな音を立てた。リンツはブランデーを口に含む。魔術師が手ずから注いだのは芳醇な美酒だった。

「たとえどんなに天才でも、人間は人間さ。
喜怒哀楽に支配され、生病老死から逃れることはできない。
彼の才能は恐るべきものだが、人格まで闇雲に恐れる必要はないと思う」

思えばこの黒髪の提督は、不敵で不遜で不逞な先代連隊長を『作戦のために信用するしかないから信用する』の言葉で陥落せしめた人だった。ただそれだけ、だがそれだけの言葉を、薔薇の騎士連隊に与えた上官はこれまで存在しなかった。誰一人として。

そして、このイゼルローン要塞の防御部門に、シェーンコップ准将ともども彼らを起用した。表向きは、要塞陥落の立役者だから弱点の防御にも長けているという説明だ。だが、潜在的裏切り者と囁かれる薔薇の騎士連隊が、獅子身中の虫になるのではないかと、口うるさい向きからの牽制もあったと聞く。

「あの金髪美形の人格ですか……」

リンツは眉を顰めた。たしかに美形だが、あんまり性格が良さそうには見えない。鋭気と烈気に満ちたと言えば褒め言葉だが、裏を返せば険しく鋭い顔で威圧感があると表現できる。彼を描写するのは自分の技量では無理だろう。多分性格が悪そうなマネキン顔にしかならない。

「そうだよ。愛する人と結ばれれば、喜び笑い感謝をし、失えば悲しみ怒り嘆く。

人間、美しく健康で裕福に生まれたいし、いつまでも若くいたい。

病気になるのは嫌だし、死ぬのは誰だって怖い。あの世があるならいい所にいきたい。

時も場所も越えた不変の事実という奴さ。人間の本質は国の違いで変わったりしないよ。

同盟にも悪人はいるし、帝国にもいい人はいる。

私は帝国の捕虜を煽動した上官に殺されかけたことがあるんだが、助けてくれたのは帝国の捕虜だった。４３年も収容所暮らしをしていた老大佐だった」

「初耳ですよ！　いつですか」

白兵戦の猛者も仰天する新事実である。その一方で得心した。ヤンの偏見のなさの一端に。その大佐を過去形で語り、黒い瞳には静かな追悼の念が宿っていた。故人に違いない。

「ああ、エル・ファシルの２ヶ月後くらいだね。貴官はまだ軍専科学生じゃないのかな。

エコニア収容所長、横領と背任により逮捕、起訴とだけしか報道されていないよ。

その時、大変お世話になったのが正副参謀長の二人だが、それはおいおい話そうか。

主犯はその所長、煽動されたのは若い捕虜、助けてくれたのが老いた捕虜。
普通ね、最初と最後の配役は逆だろう？　立体（ソリヴィジョン）ＴＶドラマなら」
「確かにそうです。しかし、なぜそんなことを……」
「いろいろあったのさ。一番はマスコミ避けだね。
だが、私が行ったりしたものだから、所長が疑心暗鬼に囚われたのだろう。
小なりとはいえ捕虜の叛乱がおき、可哀想に死者も出た。
そんな中で、着任したその日に会ったばかりの青二才の味方をしてくれる人がいたんだ。
パトリチェフ大尉ともう一人、７２歳の老男爵だよ。本国にいたならばね。
国なんて大した問題じゃないんだと思ったんだよ」
おいおい、いろいろ聞き捨てならないことを、さらりと告げてはいないか、この大将閣下は。リンツの頬が乾いた笑いで引き攣った。着任した日のうちに、捕虜の叛乱に巻き込まれているということではないか。
しかも収容所長の自作自他演のマッチポンプ劇に。その時からあの副参謀長のおっさんは、ヤンのクッション役だったのか。
「国が大した問題ではないとおっしゃるのですか」
「ああ。銀河連邦成立以前、複数の国家が平和に共存していた時代もあったんだ。
何度もね。国家が複数あることと、平和であることは何ら矛盾しないんだ。
そうなればいいと思うよ。そうしたら、彼の許に親族が訪れる日が

来るかもしれないな」

いつの間にか、ヤンのグラスが空になっている。注ごうかどうか迷って、被保護者の釘を思い出した。リンツ側のテーブルの端、ヤンの手の届かぬ位置へ移動させる。恨めし気な黒い視線はこの際無視して。

「では、その日まで閣下には健康でいていただかないと困りますな。明日、予定どおりに到着するかもしれません。そろそろお寝みください」

「や、リンツ中佐、健康に留意しても人間の死亡率は百パーセントなんだよ。

一杯ぐらいで変わるもんじゃないよ」

「とにかく、これはお預かりしますからな」

そう言ってリンツは酒瓶をテーブルから取り上げる。ヤンは溜息をついて、椅子に凭(もた)れかかった。

「着服をしないでくれよ。あとね、明日には着かない。絶対に」

黒髪の智将の言葉に、リンツは目を瞠った。

「肉視窓から見える星座が違う。ハイネセンから一日程度の距離位置のものではない。

私の父は交易商人だった。私もさまざまな星からハイネセンへ何度も飛んだよ。

首都に戻る頃には読む本がなくなっていて、星ばかり見ていた。そのどことも違う。

貴官には一応教えておくよ。思いすごしならいいんだがね」

髪をかき回しながら、グラスを差し出す。それはもう、ありふれた穏和な青年の顔だった。さっき注いでもらった以上、こちらも注ぎ返さないわけにはいかない。リンツはしぶしぶ、かなり控えめな量にとどめた。それでも嬉しげにヤンは目を細めた。

「同じ駄目なら酒飲んで寝よか、だよ」

舞台裏のメルクマール

分艦隊旗艦トリグラフの艦橋で、若々しい声の指示がとぶ。

「左翼、０．００２光秒分俯角１５度で7時方向に後退せよ。
右翼、０．００５光秒で仰角１５度の１時方向へ前進！
進行方向に対する角度を正確に保て」

戦術コンピュータのモニター上で、整然と光点が動き、斜形陣を形成する。

「各艦、左９０度に旋回。宙点Ｆのデコイを砲撃。
各ブロック、左から集中して狙え。撃て！」

中性子ビームの光の剣が、一斉に振るわれる。平行にではなく、的に対して数本が集中して。後にヤン艦隊のお家芸となる、火力集中である。

「アッテンボロー提督、命中率７４パーセント、着弾収束時間の誤差は０．０５秒です」

オペレーターの報告に、アッテンボローは頷いた。

「ま、ホワイトウィスキーと呼べるぐらいにはなってきたな。
だが、実際の戦闘ではこの5割も出来ればいいところだ。よって、続けるぞ」

ヤン司令官の後輩と聞くが、ちょっと毛色の違う人だというのが、主任参謀ラオの第一印象だった。外観は共に若々しく、なかなかのハンサムというのも一致している。だが、物静かな学者を思わせる先輩

に対して、後輩は悪童のような悪戯っ気がある。頬に散ったそばかすのせいばかりではないだろう。

だが、伊達に27歳当時のヤンを凌ぐ昇進速度なわけではない。彼には大尉が6時間などという昇進記録はないのだから。味方を鼓舞する雰囲気作りがうまい。演習が続いても、モチベーションを維持させ続けている。反骨的な言動に、参謀長は眉間に皺を寄せたりもするが、下士官や一般兵からの人気は高い。手腕の方も、今すぐ艦隊司令官が務まりそうだ。指揮する艦隊がないのは悔やまれてならないが。

アッテンボローは、分艦隊全体に放送を入れる。

「本日の目標は命中率八割以上。宙点Ａへ移動。
左翼はそのままイゼルローンを時計回りに周回して合流せよ。
右翼は逆方向からだ。当艦は左翼につく。
各艦に3点伝達だ。
雷神の槌（トゥールハンマー）と要塞砲の攻撃範囲に留意。航法、策敵のオペレーター、針路保持に協力しろ。
攻撃開始は２０分後、１５時だ。
本日は雷神の槌の発射演習も行う。移動開始！」

その命令を受けて、左翼、右翼の先頭集団が整然と動き出す。中央のトリグラフは左翼最後尾となるため、アッテンボローは指揮席にいったん腰を下ろした。

「いや、時間ってのはありがたいもんだな。どうにか格好がつくようになってきた。
正副の司令官と参謀長には、足を向けて寝られんよ。あと、事務監殿にも」

しみじみと呟く同盟軍最年少の提督に、ラオも深々と頷き、同意し

た。

「全くですよ。複雑な艦隊運動を分解して、単純な動作の積み上げに変えるとは、
本当によく考えていただいたものです。旗艦からのコントロールも強化されましたし」

「ああ、メイド　イン　イゼルローンの通信衛星のお陰でな。
通信衛星の設置を蹴られたから、兵器廠の改善要請を通して、
自前工場で作っちまうんだもんな。しかも安くさ。
たしかに、戦艦の各種センサーとイゼルローンの装甲作成ラインがあって、
そいつで作っちまえば司令官権限で通せるなんて、普通は考え付かないぜ。
ほんとに事務屋ってのは凄いよなぁ」

「キャゼルヌ事務監を基準になさったら大間違いですよ、閣下」

この鉄灰色の髪と青灰色の瞳の青年は、ご本人も充分以上に凄い。が、基準にする先輩二人が色々と凄すぎるので、基準がどこかずれている。ムライ参謀長がおっしゃったそうだが、天才は模倣してはならないというのには、満腔の思いを込めて同意する。

「そりゃ分かってるよ。あんなに怖い学校事務のお兄さんが二人といて堪るか。
事務のおばさんはもっとおっかなかったが」

「……同感です」

彼ら二人はほぼ同年代だが、その時にはベテランの女性事務員が君臨していた。教材を壊すと、般若のような顔で叱られ、始末書を書か

されたものだ。だが、教員や学生に怪我はないか、教室に大きな破損はないかをすぐに確認し、翌日には修理が済んでいる。かの『先輩』は、あのおばさんに相当に仕込まれたのだ。

「さてさて、その通信衛星と同盟、帝国の記録のお陰で、
雷神の槌の範囲が正確になったのは大きいな。
経験から、D線を見極めちゃいたが、結構誤差があった。
雷神の槌のせいで、そこまで肉薄もできなかったが、要塞砲台も馬鹿にできん。
前者をブラフに、後者をぶちかます戦術は使えるな。乱戦のふりして引き摺りこむ」

「はあ、逃げるふり前提ですか。それは帝国軍は承知しているでしょう」

アッテンボローは、敗走艦隊の再編成に長けた、変わり者の指揮官だ。大軍をきちんと維持しつつ、粘り強い防衛戦を行うヤンだが、守れるというのは敵の戦術が分かるということだ。先制、あるいは同時攻撃も高水準でこなすに違いない。まだ、そこまでには至っていないと本人は思っている。だが、それだけではここまで昇進などできない。

「三十六計逃げるに如かずだぞ。ほんとに逃げられればそいつが一番いい。
こっちの被害が少なくて済む。ところで、要塞砲台の数値化した資料は建設時のものだった。
その後にブラッシュアップしているかどうかだな。
少なくとも、うちの要塞防御部門ほどじゃない。
なんやかんや言っても、攻略戦の頻度は約5年に一回だそ。将兵の異動期間を考えてみろよ」

「きちんとデータが蓄積されているか、引き継ぎがなされているかですな。
で、イゼルローンの資料はこちらが押さえてしまっています」
「探せば出てはくるだろ。オーディーンのどこに埋まっているかは知らんがね。
こいつはな、今後こっちにも出て来る課題だぞ。ずっとヤン司令官が駐留するかどうかだよ」
アッテンボローは、声を潜めてラオに囁いた。
「別の大将、中将閣下が来るかもしれん。
どうするよ、ドーソン、パエッタコンビが来たりしたら。
三十六計、というわけにはいかんのだぜ。味方なんだから」
ラオの目鼻の小さい顔が、渋い表情を浮かべた。
「閣下、さすがに言いすぎですよ。
あのお二人にそんな重責を担わせるなんて、いくら軍の上層部でも考え付かないはずですよ」
真面目に言い切った主任参謀の顔を、アッテンボローはまじまじと凝視した。
「いや、貴官こそ結構言うなぁ……」
「小官はアスターテで、ヤン准将の魔術の立会人になりましたからね。
ヤン准将の元上官のことも存じております。で、大将閣下のジャガイモ騒ぎは、
小官のいた部署で起こったことです。小官がまだ大尉の頃でしたがね」

世の中、巡り合わせの悪い人間もいるものだ。

「その、何と言ったらいいか。悪かったよ。……大変だったな」

「本当にそのとおりです。閣下が昇進をなさるのを期待します」

「ま、努力しよう。だが、取りあえずは演習だな」

苦々しい表情で頭を振るラオと、遠い目をして肩を竦めるアッテンボロー。昇進には大規模な戦闘の勝利ありきだが、同盟軍にその余力はない。最前線のイゼルローン要塞を維持して、さて何年稼げるものか。

だが、それには演習、演習また演習。新兵による兵員補充は、約１０万人。残りは敗残兵と警備隊からの異動者だ。そうなると、選択による集中というものが必要だ。熟練兵は、ヤン司令官率いる艦隊本体へ。大規模な演習を行うには限りがあるのだ。基本行動が身についている兵員ならば、シミュレーターによる仮想訓練でも一定の教育効果がある。

新兵にこそ、現場で実機による演習をさせねばならない。これも一種のＯＪＴと呼べるだろう。彼らを中心に引き受けたのは、フィッシャーとアッテンボローだった。フィッシャーは、艦隊運用の名人だ。まず、彼の下で艦隊運動のイロハから叩きこまれる。

ものになってきたら、アッテンボローが攻撃行動を担当する。アッテンボローはヤンとの付き合いが長く、ヤンの戦術思想を肌で理解している将官だ。

複数艦の主砲を一点に斉射するというのは、それほど容易いもので

はない。主砲は中性子ビーム線である。すなわち、光とほぼ同速。０．１秒で３万キロ分の誤差が生じるということだ。敵軍との彼我（ひが）の距離によっては、着弾時間の誤差で中和磁場を貫通できないこともありうる。だから、命中率は当然ながら、着弾時間も揃えねばならない。こちらの目標は０．０２秒。これには慣れというものが必要だ。だから、短期的には命中率を上げ、長期的には時間を揃える。

あともう二、三歩、と言えるだろう。昨年の１２月にアッテンボローが報告した時は、新兵と敗残兵の烏合の衆だった。あれから四分の一年を経て、精兵の集まりに変容しようとしていた。彼の報告を元に作成された、ヤン艦隊司令部謹製、戦闘フォーメーションのプログラムである。

ヤン司令官が一人しかいないように、フィッシャー副司令官も一人しかいない。では、独立行動中心の分艦隊の艦隊運用をどうするか、という回答の一つである。複雑な艦隊運動を、単純化した一動作に分解し、時系列によって順次実施する。１、２、３といった具合にだ。簡単な動作を機械的にしていくうちに、半月陣で右翼と左翼のシフト攻撃を行っているという按配である。

名人が熟練の技でやっていることを、理詰めに分解して再構築する。理論と緻密の人、ムライ参謀長にしかできない事だ。この枝葉を更にカットし、積み木のように平準化するのはパトリチェフ副参謀長。ここでもう一回、ヤン、フィッシャーの正副司令官のチェックが入って、グリーンヒル大尉によるプログラムモデルの作成。

モデルから戦術オペレーション部門が、更に細分化したものを作成、何度もシミュレーションを重ね、艦隊による演習に投入されたのが、一月半ば。新年パーティーの準備の最中も、ヤン以下の司令部は動いていたのだ。目には見えがたいし、見えてもいけない。魔術のタネは、魔術師と舞台スタッフだけが全容を知っている。これが機密と

いうものだ。

その演習中に、帝国からの捕虜交換の申し入れがあって、思わぬ中断が起こってしまった。さらには、帰還兵輸送に司令官が同行することになり、予算要求事務の前倒しで、要塞事務監のキャゼルヌはそれにかかりきりだった。

先日、次年度予算要求書が完成し、超光速通信でハイネセンに送付された。事務監としての仕事が一段落したので、ようやく要塞司令官代理のキャゼルヌ少将として、雷神の槌使用の立会が可能になったのだ。

実際に稼働するのは、要塞防御指揮官シェーンコップ准将以下、砲手とオペレーター。不測の事態に備え、要塞整備の技術士官らも第一級配備に就く。演習と実際の戦闘に、大差はない。そしてあってもいけない。そうでなくては軍隊の練度を向上させることはできない。

「よし、合流地点までの時間を計測。各艦に連絡せよ。
右翼、宙点Aに到達したら、フォーメーションBの右翼陣に変形。
左翼は、同Bの左翼陣だ。各艦、戦術コンピュータ、回路はB―1を開け」

そして、キャゼルヌ事務監の搦め手で強化された通信衛星網。設置要望が再三にわたって却下されて、肩を落とした黒髪の後輩に向かって、この敏腕軍官僚は、鼻を鳴らして言ったものだ。

「ふん、手元の資源を生かさないから却下されるのは当然だ。
ここには他に何がある。雷神の槌より貴重なものがあるだろうが」

イゼルローンには、ほぼ無補給で食糧自給が成り立つ生産プラントがある。

そして材料を必要とするが、ミサイル等を生産する兵器廠。艦艇を修理するドック。

「まさか、先輩……」

「買ってくれないなら作ってしまえ。まあ、チープな分、数をばらまきゃいいさ。

民間から動員された技術士官の中に、通信機器企業出身者がいる。なかなかできる奴だそうだ。彼をチームリーダーにしろ。

幸い、イゼルローンの外壁装甲の生産ラインもある。

艦艇用の策敵センサーと通信波の受信発信増幅器の類は、腐るほど予備がある。

要塞付帯施設修繕とでも名目を付ければ、ハイネセンの連中には分かりゃしない。

すでに数限りなく実施しているし、予算執行監査委員は、技術屋じゃないからな」

「お見それいたしました、キャゼルヌ先輩。組織を知っていてこその名案です」

「もっと誉め讃えていいんだぞ、後輩よ。袖の下も絶賛受付中さ」

酒席での一幕である。共犯者の笑みを浮かべ合った、要塞のツートップ。もしリンツ中佐が絵にしたら、題名は『悪代官と楊屋（やなぎ）』になるだろう。ヤンが、翌日こっそりと高い酒を贈ったのは、ユリアンにも内緒だ。

こちらの手配は順調に進み、プロジェクトリーダーの技術士官は発奮した。好きで就いた仕事を兵役で中断されていたところに、同盟軍の英雄からの御指名だ。目の前に、リボンをかけた人参をぶら下げられたも同然だった。チームの他の面々も同様である。翌日には企画

書と仕様書が提出され、すぐに関門を通るやいなや、もの凄いペースで通信衛星の作成に取りかかった。

帝国の帰還兵が出立すると、すぐに衛星が設置された。その間、わずか一月足らず。技術屋の情熱に、ヤンも脱帽したほどだ。通信だったが、チームを労い、感謝の言葉をかけてから出立した。彼らがさらに感激したのは言うまでもないだろう。

そのおかげで、格段に通信状況が向上した。戦術コンピュータによる艦隊運動などの制御が一段進んだのだった。事前に複数のフォーメーションを構築し、入力しておくのは大変な苦労だが、その分戦場での負担を減らせる。この演習のように。

戦術コンピュータの指示に従って、宙点Ａに集合した艦隊が、整然と凹陣形に並ぶ。アッテンボローの指示に従い、まずは艦隊でデコイの前衛部を斉射。次に、後退しながら中央から二分して、雷神の槌の射程を脱出、雷神の槌の発射というシナリオである。半歩間違えば、死につながる。この行動自体は、これまでにも反復練習してきた。雷神の槌単独の発射演習も、すでに何度も実施している。双方を同時に実施するのが初めてだ。モニターを見、指示を行うアッテンボローのこめかみに汗がにじむ。

星天の霹靂

そして、イゼルローン要塞の主管制室の二人もまた。

事務監のキャゼルヌは、これまで戦場に赴いたことはない。戦闘の為の補給と兵站も、半ばは数字と書類で占められる。分艦隊五百隻なりといえど、そこには６万人が搭乗している。艦隊とは人の集団なのだ。

白兵戦の雄、シェーンコップは、第七次攻略の際に雷神の槌（トゥールハンマー）の威力を目の当たりにした。その暴虐的な力を熟知するが故に、艦隊との合同演習には背中に緊張の汗が滲む。どちらか、もしくは双方のタイミングがずれたら。この五百隻の艦艇と６万の人命は、一撃で消し飛ぶ。

無論、この場には副司令官、正副参謀長も同席しているが、直接の運用責任者はこの二人である。責任も緊張も度合が違う。

要塞と旗艦、双方の回線が開き、通信を開始する。

「こちら、要塞防御指揮官、フォン・シェーンコップ。分艦隊、通信状況を報告せよ」

「こちら、分艦隊司令官、アッテンボロー。受信良好。送信は良好か？」

「分艦隊へ、送信の良好を確認する。雷神の槌発射までの手順を通知する。

仰角俯角０度、中央正面にてカウント開始の６００秒後に発射。

５４０秒までは、各分三十秒単位での通知とする。

通信オペレーター、時計を銀河標準時に合わせろ。十秒でだ。
――それではカウントを開始する。スタート！」

アラームが鳴り響き、一気に管制室に緊張が走り抜けた。モニターのアッテンボロー分艦隊を凝視する者。雷神の槌のエネルギーチェック、角度の最終確認に追われる者。オペレーターのカウントの声が、静まり返った管制室に響く。

「7分経過」

旗艦の艦橋で、アッテンボローは指示を出した。

「よし、後退を開始する。右翼は8時方向、左翼は4時方向だ。
要塞砲台の射程距離外に停泊せよ。当艦は右翼に参入する。
移動開始、ただし砲撃は続行だ。誤射に気をつけろよ！」

イゼルローンも、という言外の声に、シェーンコップは片眉を上げた。双方向通信の場での発言だ。先輩の薫陶（くんとう）なのか本人の資質か定かではないが、こちらもいい性格をしているではないか。あえて返答はしない。雷神の槌を撃つというのは、数万人を一瞬で屠るということだ。頼まれたって、誤射なんぞしない。そっちこそきっちりと動くがいい。

砲撃オペレーターから、砲撃準備の完了が告げられる。
刻々と減っていくカウント。
策敵オペレーターが、艦艇全てが射程外に逃れたことを確認。

「発射準備」

「カウント10、9、8、7」

シェーンコップは右手を上げた。

「……3、2、1、0」

「撃て(ファイア)！」

号令と同時に右手を振りおろす。

刹那。入光調整をしてあるにも関わらず、スクリーンが漂白された。永遠の夜を貫いて奔(はし)る、造られた人工の雷神の鉄槌。美しくも壮絶な、破壊の光だった。何度見ても、慣れることはないだろう。キャゼルヌは薄茶色の眼を眇(すが)めた。

「目標宙点のデコイ、すべての喪失を確認」

「モニター上、分艦隊の被害はゼロです」

すかさず策敵オペレーターの報告が読み上げられる。灰褐色の髪と目の美丈夫は一つ頷くと、アッテンボローに通信を入れる。

「こちらイゼルローン、フォン・シェーンコップ。分艦隊旗艦応答せよ。目標と貴艦隊の被害状況の報告を求む」

管制室が更に静まる一瞬。張りのある若々しい声が返ってきた。張り詰めていた事務監の肩の線が緩む。

「分艦隊司令官アッテンボローより回答、報告する。目標はすべて消滅、当艦隊の被害はゼロ。的確な攻撃を感謝する」

「了解した。そちらの正確な艦隊運動の賜物だ。無事を心から祝福しよう」

「小官からもだ。二人とも、大役御苦労だった」

ここで声を発したのは、司令官代理である。本人が自称する非力な事務屋には、かなり衝撃的な場面であろうが、それを微塵も現していない。大したものである。

「ありがとうございます、キャゼルヌ司令官代理。

雷神の槌の連続発射の演習を続行しますか」

そう言う鉄灰色の髪の後輩に、ムライ参謀長が回答した。

「いや、今日はここまでにすべきです。貴分艦隊は新兵が多くの割合を占める。

一度に過大なストレスを与えてはいけない。当初案のとおり、帰投した方がいい」

これに賛同したのは副参謀長だ。

「アッテンボロー提督、正直いいまして、こちらの神経も保たんのですよ。

事故を起こさないよう、余力のあるうちにお開きにいたしましょう。

新兵のメンタルケアの時間も、必要となるでしょうからなあ。

シェーンコップ准将はいかがです」

「そうですな……」

シェーンコップは、尖り気味の顎をさすった。ヤンの方針で、訓練は一つのフェーズを反復し、習得するまで次に進めない。最初は甘いのかと思ったがそうではない。人間、同時にそんなに色々詰め込める

ものじゃない、という判断によるものだった。ヤン艦隊の前身、第１３艦隊結成時の教訓であろう。

そして、最前線の閉鎖空間という状況。ストレスから麻薬に手を出す者、周囲へ暴力を振るう者、これらを速やかに摘まみ出してしまう。これもまた、軍隊の統一性を保つためだ。無論、民間人や部下という、圧倒的多数の弱者を守ることでもある。

どうしてどうして、甘く優しいばかりの人物ではないのだ。人間の限界を冷静に見切っている。その辺が面白いし、どこまでやれるかお手並み拝見という気にもなるのだが。

「たしかにその方がよいでしょう。攻略戦の資料によれば、連射自体が少数例です。

砲撃単独の演習で、もっとデータを蓄積しないと危険でしょうな」

「俺も貴官らに賛成だ。アッテンボロー少将、聞いてのとおりだ。当初の予定どおり帰投せよ。明日の午後にこの結果のブリーフィングを行う。

関係部署はまとめておくように。ただし簡潔にだぞ。司令官代理からは以上だ」

「了解しました。アッテンボロー分艦隊、帰還します」

モニターの中で、光点が宙港入り口に移動していく。きちんと要塞砲台の射程外を通過して。

「若いとは呑みこみが早いものですな。もうイゼルローンの宙域に馴染んでいる。

小官よりも、副司令官に向いていると思うのですが」

フィッシャーの先日の留守番幹部会の発言は、相当に本気だったらしい。キャゼルヌは、軽く眉間を揉んだ。

「艦隊指揮官としての才能は、彼の方がずっと上ですからな。艦隊運用と、攻撃のセンスは違うのです。日毎に良くなっていく」

「そうでなければこちらも困りますよ。まったく、何世帯分のエネルギーかと考えるとね。

あとどれほど演習は必要でしょうか、フィッシャー提督」

キャゼルヌの問いに、フィッシャーは左手を顎に当てて考え込んだ。右手で、手元の戦術コンピュータのログを確認しながら。

「演習は永続的に必要なのですが、本日の演習成果は上々です。ブリーフィングで、最終フェーズへの移行を検討してはいかがかと。

最終フェーズが終了すれば、もう少し回数を落とせると思いますが、

そろそろ艦隊本隊の実働演習にも着手したいものですね」

「やれやれ、こんな代理は正直荷が重いですよ。早く、司令官に戻ってきてほしいものだ。

今日がハイネセンへの到着予定日ですから、まだ当分は先でしょうがね」

キャゼルヌの意見には、シェーンコップも同感である。やはり、こんな攻撃は性に合わない。

同じ軍人でも、対人の戦闘をする者と、対艦隊の戦闘をする者は、持つスケールの目盛りが違う。

一対一で相手を斬り伏せるのと、主砲の一射で数百人を殺すのと。

ましてや雷神の槌は、一撃で数百の艦艇と数万の人命を、宇宙の藻

屑にできるのだ。

「ああ、今日でしたか」

「正直、もう少し早く着くと思っていたんだが。人間、予定より早い方が嬉しいだろう。

後方担当はそれも計算して、旅程は上積みしておくんだ。

受け入れ宿舎も、同様に準備をするもんだがね。そうだ、定時連絡ではなんと言っていた」

キャゼルヌの問いに、通信オペレーターは答えた。

「本日はまだです」

「まだって、もう１６時だぞ。あれは毎日正午に行っているはずだろう」

「バーラト星系の通信途絶域に入られたのでしょうかな」

パトリチェフが、鷹揚に疑問を投げかけた。フィッシャーが首を振る。

ムライの眉間に一瞬皺が寄ったが、堅苦しい参謀長を注視するオペレーターはいない。

それをいいことに、彼は小声で囁いた。

「場所を変えたほうがよさそうですな。アッテンボロー提督には？」

更に小声でキャゼルヌは応じた。

「加えた方がいいだろう。彼の父親はジャーナリストだ。

到着の報道が入らなければ、遅かれ早かれ騒ぎ出す。

すまんが、司令部会議室に移動してくれ。貴官らも頼む」

パトリチェフとシェーンコップは顔を見合わせた。巨漢のパトリチェフとほぼ水平に目が会うのは、将官ではシェーンコップだけだが、互いの顔を見つめあうなど、双方初めての経験である。何かが起こっている。それは予感だった。

司令部会議室に、将官一同が移動した。アッテンボローには帰還次第、こちらにくるように伝言してある。一同が着席し、珍しくフィッシャーが口火を切った。

「バーラト星系に通信途絶域はありません。あそこの通信網整備は銀河一でしょう。

こんな時間にまでワープをしているというなら、なおのこと連絡すべきなのです。

定時まで待つのではなく、ワープインの際に」

「そうなんですか、フィッシャー提督?」

「そうです、副参謀長。今日到着予定ならば、正午には通常航行していないとおかしい。

ハイネセンへの降下中であるなら、やはりその前に連絡をする。

こんな基本ルールを、航法士官が知らないはずはない。

輸送船団の主任航法士官を誰かご存知でしょうか」

フィッシャーは、艦隊運用の名手である。それは艦隊運動だけに留まらない。どんな遠征でも、船団を過たず目的地へと導く。一隻の脱落もなく、通常よりも短い期間で。航法のことは熟知している。ヤン曰く、『生きている航路図』なのだ。

「この名簿によりますと、ドールトン大尉とありますな」

ムライの返答に、フィッシャーとキャゼルヌは顔を見合わせた。

「参謀長、大佐の間違いではないでしょうか」

「いや、大尉です。残念ながら」

士官学校出だとすると、大尉は二十代半ばから後半で通過する。そして艦隊の航法などという特殊なものは、士官学校でしか教育されることはない。

キャゼルヌが一際苦い顔になった。普段は歯切れの良い声が、地の底から響くような低音で絞り出される。

「……この輸送計画の後方本部責任者は誰だ。

そこまでアムリッツァで人材が払底したわけではないだろう。

いくらなんでも、この規模の輸送の主任にするには若すぎる。

ほかにチェックする者はいないのか」

「もっと若手が乗っているんでしょうな、恐らく」

シェーンコップの予想は、ムライの証言で裏付けられた。副主任はなんと中尉。薄茶色の目が、ハイネセンの計画担当者まで突き刺さりそうな光を浮かべた。

「まったく、だから自前の艦を出すべきだと進言したんだ。

挙句に帰還兵まで乗せるなんぞ、開いた口が塞がらんよ」

「小官も閣下に、女性が初デートで相手の車に乗るぐらい無謀なことですよと

申し上げたのですがね」

不謹慎な喩えに、ムライは咳ばらいをし、二女の父はさっきを凌ぐ視線の槍を突き刺した。
合流してきたそばかすの提督も、白眼視を隠そうともしない。
とりなせるのは、やはり副参謀長しかいなかった。

「なるほど、なかなか的を射た表現になりかけておるのでしょうかね？
願わくば、的外れであって欲しいものですなぁ。
ヤン司令官にとっては、この遠征の足にするより、
演習への参加をお望みになったわけですから」

「超光速通信による立ち会いじゃ駄目だったんですか。
ヤン司令官は、ああいう虚飾に満ちた式典なんて、大嫌いだったでしょうが」

ストレートすぎるアッテンボローにも、参謀長の警告の咳ばらいがとぶ。一瞬肩を竦めたものの、リベラル系硬派論客の息子は食い下がった。

「いっそ、旗艦（ヒューベリオン）で航行すればよかったんですよ。
ヤン司令官不在では、十全に動かせない艦なんですから」

「小官も同意いたしますね。
その中に、薔薇の騎士連隊の精鋭の一個中隊も同乗させるべきでした。
ご自分の価値を軽視するのも、大概になさっていただきたいものだ。
そして、軍上層部も閣下の寛容をいいことに冷遇が過ぎます。
あんな扱いに甘んじる必要などないはずだ」

思わぬ援護射撃は、却下された護衛志望者からのものだった。

「もっと、リンツ中佐から閣下に強く進言させるべきでした。小官も忸怩(じくじ)たる思いですよ。

一日遅れで出発しても、今日には到着していたでしょう」

と、これはフィッシャーに対する問いかけだ。フィッシャーの銀の頭が頷く。普段物静かな初老の提督は、キャゼルヌに訴えかけた。

「騒ぎすぎなのかもしれませんが、どうも気になるのです。

急ごしらえの粗雑な計画というのはあるにしろ、補給物資の関係もありますし、

予定が延長するような航行はしないものです。

巨大な宇宙乱流や、流星群の発生のニュースもありません。

キャゼルヌ司令官代理に、ハイネセンに問い合わせていただいた方がよいと思うのです」

キャゼルヌは頷いた。将来の後方本部長と言われ、敏腕で同僚や部下の信望篤かった彼は、同盟軍中枢に伝手も目も耳も持っていた。

「ああ、そうするとしよう。案外、晩のニュースで流れるかもしれんがね」

「そうだとよいのですが」

ムライがぽつりと言った。

「キャゼルヌ事務監が、後方主任でしたらこんな事にはなりません。

軍全体の能力が低下していることは否めない。

その中で、派閥に属さぬヤン司令官を冷遇するかのような有様です。

小官には、軍だけでなく同盟全体が茹で蛙になりつつあるように思えてなりません」

蛙の入っている水を火にかけると、徐々に温度が上がっているのに気付かぬうちに、茹であがって死に至る。

「参謀長、そう悲観をなさることはありませんよ。

ヤン司令官は当然ながら、統合作戦本部長も、宇宙艦隊司令長官も、査閲本部長もみな識見の高い方ばかりです。大丈夫ですとも」

もう一人大将はいるのだが、『長』ではないためスマートに無視されていた。パトリチェフの『過不足なく表現する能力』で省略されたのだろう。人の良いだけの大らかなおっさんじゃないな、とアッテンボローは彼を見直した。

「じゃあ、小官もニュースに留意をしておきましょう」

「他言は無用だぞ。ここにいる者も全員だ。よろしく頼む」

「了解しました」

惚れ惚れするほど完璧な敬礼をするシェーンコップ。ほかの将官たちも本人なりの敬礼で応え、その日は散会となった。

心の迷路、星の航路

その翌日、3月8日午後のブリーフィング時。未だ定時連絡も到達報告もない。ハイネセンに問い合わせたキャゼルヌにも、はっきりとした回答がなかった。演習成果を司令部とシェーンコップ、アッテンボローが協議し、最終フェーズの訓練内容に進むことを決定した。

だが、やはり皆の気がそぞろになるのは仕方がない。最終フェーズの打ち合わせというのは、喜ばしいはずなのだが、雰囲気は湿りがちである。まずはシミュレーターで新陣形の構築を学ばせ、艦艇にメンテナンスを行うことにした。艦艇による演習はその後になる。準備期間は一週間。アッテンボローも多少の骨休め期間になるだろう。その時はそう思われた。

さらに翌9日。船団とハイネセンからの連絡、報道ともになし。二日間の遅延というのは珍しいとまでは言えないが、報告がないことなどありえない。何かが起こっていると、幹部らが確信するには充分だった。

ハイネセンに連絡をしようとしたキャゼルヌに、首を振って音声だけにするように進言する要塞防御指揮官と、それに同意するもう一人の後輩。ふたりは胸中で呟く。正直に言って、その目で後方主任が再起不能になりそうだと。

フィッシャーは、イゼルローンからハイネセン間の管制センターに問い合わせをすべきか検討し始めた。

『生きている航路図』の彼は、管制センターとの関わりが深い。元々航法畑の出身なのだ。航行のみならず、艦隊運用の巧みさはヤン・ウェンリーの保証書付きだが、攻撃そのものは指揮官畑のアッテンボローには及ばない。逆もまたしかりだが。とにかく、そちらの方には顔が

利くし、伝手もある。

ただし、管制センターにも守秘義務というものがある。これをクリアするため、イゼルローン駐留艦隊副司令官の職名で調査依頼文の準備を始めるフィッシャーだった。最終リミットを１０日正午の定時連絡の有無によることにする。この作文が無駄になることと、いやな予感が外れることを祈りながら。

１０日。前日と状況は変わらず。正午を待って、フィッシャーが立ち上がる。キャゼルヌの許可を取って、各地管制センターに通信を入れ始めた。イゼルローンの民間人の避難輸送を想定して、避難航路を制定したいという理由で。相手にとって、非常に信憑性が高い質問だ。実際に必要なことでもあるし、輸送人員の規模も同程度。参考に到達日時を教えていただきたいと、辞を低くして請われれば、快く引き受けてくれるものだ。一石で二鳥を落とすフィッシャーであった。

ただし、不審に思われないように、回答期間にはある程度の時間を設けなくてはならない。超光速通信（FTL）でちょっと教えてくれというのは無理だ。

それに、アッテンボロー分艦隊の新陣形のチェックという通常業務も存在する。こちらの方も手は抜けない。正副参謀長とアッテンボローを交え、ブリーフィングを進めるが、どうも普段のように順調に進行しない。皆の気がかりもそうだが、黒髪の司会者兼助言者の不在は大きい。明晰な方針を持ち、様々な意見を集約し、短時間で結論を出す。これは難しいことだ。

それらの合間に、続々と回答が届いてくる。これが、１０日から１１日にかけての状況だった。１１日の午後に入って、すべての調査結果が集まり、フィッシャーは航路図との突き合わせを開始した。

だが、その結果は途中から奇妙にねじ曲がったものとなった。二個艦隊に相当する人員の船団である。事前に航行計画が各管制センターに送られ、管制員は、その計画とセンサーに捉えられた識別パターンなどから航行の無事を確認する。同時に、次に通過する予定の管制センターにも引き継いでいく。

宇宙は無限の広さを誇るが、人間の手の届く範囲はほんの一部分。その中で航路となっているのは一筋の道に過ぎない。ワープイン、アウトは大質量下ではできないし、野放図にうろついたりすると、事故があっても助けが来ない。特に、軍隊の大船団こそが計画を守らなくてはならない。民間船にまで支障を来す。

途中までの記録は、可もなく不可もなく順調に進んでいる。大尉といっても有能な人物のようだ。しかし、2月下旬から、進路変更の連絡が始まる。予定とは別経路を通ったり、異なる地点の管制センターに連絡が届き、そこの管制も通過を確認している。だが、この時点でハイネセンへの最短距離ではなくなっていた。

さらにカレンダーがめくられるにつれ、管制への連絡と確認を欠きがちになっていく。最後の連絡は3月6日。到着予定の前日だ。この後にワープしているならば、容疑の範囲は直径１５０光年になる。さらにワープを重ねたらどうなることやら。

この分析が終わったのは、１２日のことである。未だに船団からも首都からも連絡はなく、いつも朗らかなパトリチェフも元気がない。ムライのみが平常運転に見えるが、通信に耳をそばだてている。こんな正副参謀長に、分析結果を話すのは気が重いが、本丸を攻める前に同調者を増やしておきたい。フィッシャーも、この程度の戦術は思いつくのである。彼の報告を聞いた二人に、緊張が走る。

「これは、遅延やミスではないということか、フィッシャー少将」

「はい。連絡が途絶する十日前から、針路が曲がり始めている。
ハイネセンを目指すならこんな航路はとりません。たとえ少尉でもです」

「では、事故か犯罪かということになってしまいますよ。
他者からの指摘が入らんもんですかなあ」

「どうも、この船団のメンバー構成がよくないのです。
主任の女性大尉に対して、副主任の男性中尉が間違いを指摘できるでしょうか。
航法士官はもう一人いますが、そちらは女性中尉です」

「キャゼルヌ事務監の言葉を、小官もお借りするところだな。
しかし、なんとか連絡をつけられぬものだろうか」

ムライの提案に、パトリチェフは太い上腕をさすった。

「超光速通信で、同盟領全体に告げて回ることになってしまいますよ。
ウチの司令官を御存じありませんか、と。行き先が分からないのですからな。
まさか、逆バルドゥング提督事件ではないでしょうがね」

つまり、出来るわけがない。同盟全土が大騒ぎになってしまう。同盟軍の智将も重要だが、帰還兵２００万人、輸送部隊の兵員の家族が黙ってはいない。

「いや、司令官のお言葉からするとそれはないだろう。
ローエングラム候は無駄なことはしないそうだからな。
しかし、司令官代理と要塞防御指揮官にどう伝えたものか」

特に前者に。ムライの声なき声に、二人の同僚も浮かない顔になっ

た。実際に、彼らに向かって毒舌が叩きつけられるわけではないのだが、後方本部への抗議文の内容を想像するだけで胃の具合が怪しくなってくる。

「お伝えするしかないでしょうなぁ。
歯医者や税金と一緒で、嫌だからと遅らせるほど悪くなるばかりですから。
しかも、決して好転はしませんし。
フィッシャー提督の調査結果から、なにかがおかしい、
原因は不明、対処法は相手の連絡を待つのみと。
まあ、こんな報告をしたくはありませんがね」

確かに、パトリチェフが端的にまとめた内容以外に、伝えるべきものもないのだった。

「では、キャゼルヌ事務監には小官が一報をいたします」

「ならば小官はシェーンコップ准将に連絡を取る。
アッテンボロー少将への伝達は、キャゼルヌ事務監の指示を仰ごう」

味方は団結すべし、難敵は分断すべし。これも戦術である。使うべき場面がどう考えても違うが。

13日。昨日の一報を、キャゼルヌとシェーンコップが受け取ったのが、その朝であった。キャゼルヌは昨日の午後、久々に半休をとって娘の授業参観に出席していたし、シェーンコップはイゼルローンの要塞砲台の視察に赴いていたからだった。

要塞の直径60キロということは、円周はその3．14倍。宇宙ならわずかの間に到達するが、地上だとそうもいかない。一度シャトル

に搭乗して、近い宙港を目指すようにしているが、面倒と言えば面倒だ。今回は、管制室と反対面の視察だったので、行き来に時間を取られて結局直帰したのだった。

異なる褐色の髪と目の男二人は、それぞれの席で昨日の伝言に低声(こごえ)で毒づいた。今できるのは、関係者に問い合わせをすることと、部下に動揺を気付かれないことだけだ。

「予算ヒアリングの根回しにかこつけて、油を絞ってやるとするか……」

事務監の呟きを、事務部の士官たちは聞かなかったことにした。キャゼルヌにとっては古巣であり、裏の裏から攻め所、抜け穴に落とし所を知っている。これほどの強敵はいない。相手が、ヤン司令官並みの防御戦の名手でようやく五分といったところだ。ちなみに、現在の後方主任参謀はキャゼルヌより年長だが、彼が更迭されるまでその座にいなかった。そういえば、自ずと戦果の予想はつく。

だが、古巣を同じくする部下も、全く同情などしない。捕虜交換式から司令官の長期出張という、ありえない激務の苦労を忘れはしない。前の所属なんぞ知ったことではない、あの連中から絞れるだけ絞ってくださいと。

シェーンコップの問い合わせ先は、キャゼルヌとは違った。華やかな夜の戦歴を誇る美丈夫は、イゼルローンの花々たちと交友が深い。ここにいる軍関係者２００万人の中の妙齢の女性を当れば、ドールトン大尉につながる者もいるだろう。直接の知己でなくてもいい、どういう女性か、何か噂を聞いていないかと。

この地下水脈は、鉱脈にぶち当たった。金鉱などではなく、砒素(ひそ)か水銀のような代物だったが。シェーンコップの掘り当てた情報は、密

やかに司令部と事務監に告げられる。

「油だけでは生温いか。一緒に紅涙も絞るってやることにしよう。
航法主任候補に、貴官が噂話から入手できる程度の裏さえ取らんとはな」

「あくまで噂ですよ。不倫していた相手が、帝国へ逃げたらしいというね。
随分金も騙し取られたらしい。そしてどうやら、その男も帰還兵に混じっているらしい、
いうことです。噂によればね」

その強調ぶりに、逆に信憑性の高さがうかがわれる。

「ふん、貴官らしくないじゃないか。
女の噂という奴の信憑性を知らんはずもないだろうに」

「だからこそ、噂だと思いたいのですよ」

「一割に賭ける気か？」

たっぷりと皮肉を塗(まぶ)した声に、灰褐色の頭が振られる。

「いいえ、一分に賭ける思いです」

「分かっているのなら結構だ。しかし、解せんな。
航法主任の仕業だとして、なんで船団ごと連れまわす必要があるんだ。
その男の罪を糾弾して、別の帰還兵らにエアロックから放り出させる気なのか？」

二児の父の発言に、独身主義者が反論した。
「そんな、子供向けアニメの宇宙海賊じゃあるまいし。
二個艦隊の人命を危険に晒してるんです。軍法会議で銃殺ですよ。
相手の罪を問うんなら、なにも輸送中にやらなくたっていいでしょう」
アッテンボローの言葉は、理性的で、ある意味男性的なものだ。
もっと女性を知る快楽主義者は、こう推測した。
「普通はそうだが、そんなに大勢の生殺与奪を握っているんだ。
歪んだ万能感に支配されて、おかしくなっても不思議はない。
憎い男のほかに、もっと強烈な刺激物があるでしょう。
同盟一の英雄ヤン・ウェンリーと、グリーンヒル大将の御令嬢というね」
「はぁ？　ヤン先輩、じゃない司令官が？　どうして？」
疑問符だらけの質問に、シェーンコップは両手を広げて肩を竦めた。
「二人の大尉は同室ですよ。小官が輸送責任者なら、そんな真似はいたしません。
相手はまだ三年目なのに階級は一緒、出自も経歴も自分に勝り、上官の格は比べるべくもない。
これで、相手にマイナス感情を抱かない女性は聖女と呼んでいいでしょう。
主任の大尉がつんけんしだして、後輩の男女中尉は意見ができますか？」
アッテンボローは、もつれた毛糸のような鉄灰色の髪をかき回し

た。

「小官には何も言えないでしょうね」

この言葉に、美丈夫は片眉を上げた。

「言えないならまだ上等です。大体は御機嫌を取る。何でもハイハイと流します。

女性だったら先輩に同調する。それでガス抜きができればいいのですからな。

ですが、ここに我らが司令官が登場します。奇蹟の魔術師、二十代の大将閣下だ。

女性なら興味を抱きますよ。ご本人は気がつかないでしょうがね。で、嫌う相手にも探りを入れます。上手くしたら閣下の目に留まるかもしれないでしょう」

渦中の人物の先輩と後輩は顔を見合わせて、異口同音に無理と言い放った。

「ええ、無理だ。雑談の一つもすれば、副官嬢の惚れてる相手は火を見るよりも明らかだ。

あれだけの美人が、本気になって落とせない男はいない。早々に負けを悟る」

「や、そういう意味の無理じゃないんだ。ヤン先輩の朴念仁ぶりときたら！」

力説する後輩、腕組みして頷く先輩。咳払いは無視される。

「ほう、小官はそうは思いませんがね。あれだけ敵の心理を読めるお人です。

まあ、閣下はこの際措(お)きましょう。問題は、ドールトン嬢の方だ。己が身を彼女と比べ、相手の男に彼をひき比べた時、どんな思いを抱くことやら」

再び、咳払いが割って入る。

「シェーンコップ准将、なかなか劇的な推理だが、それは憶測でしかない。

フィッシャー少将、行き先の推測は不可能か、もう一度お伺いしたい」

「通信途絶後、本日で一週間です。もはや推測は不可能です。

有人星系に向かっているならばまだしも、そうでない星系に向かっていると、

手の打ちようもありません。

ハイネセンにとっても我々と同様、船団からの通信が回復しないと状況の把握もできない」

パトリチェフが太い上腕をさすりながら嘆息した。

「結局、我々にはどうしようもないという結論は変わりようがありませんなぁ。

サックス少将の手腕に希望を託すしかないのでしょうか」

だが、ここまでで判明した諸々(もろもろ)で、管理責任者の資質に巨大な疑問符がつく人物だ。元後方主任参謀に、それを仄(ほの)めかす五対の視線が向けられる。薄茶色の頭が振られるのは横方向。

参謀長は深々と溜息をついた。

「全く、困ったものだ。ヤン司令官は賓客のはずだろう。なぜ、このよ

うな事になっているのか」

アッテンボローは更に深々と溜息をついた。

「心から同意します。乗客が宇宙船の危機を救うなんて、B級立体映画（ソリムービー）だけでいい。

そんな劇的で荒唐無稽な話より、よくあるミスであってほしいですよ」

その同時刻、惑星を持たぬ恒星マズダクの傍らで。荒唐無稽で前代未聞の愛憎劇が、幕開けしようとしていた。

Tempest

「……提督、お役に立てませんでした」

二時間にわたる説得は、何ら実りを齎さなかった。その事実をフレデリカ・グリーンヒルは、上官に報告した。二時間前に、あぶなくなったら、すぐ逃げてきなさいと言ってくれたその人に、自分の無力さを告げるのは遣りきれないものだったが。

「……うん、仕方ないね。御苦労さま。君にけががなくて何よりだった」

掛けられた言葉は少ないが、そこには真情が篭っていた。この二時間でなんとか聞き出せたのは、イヴリン・ドールトン大尉が犯した罪の動機らしきものだけであった。

当初、帰還兵輸送船団のハイネセン到着予定日は3月8日だった。それが延長するという正式な報告は、3月8日になるまでなかったのだ。輸送責任者はサックス少将、賓客(ひんきゃく)たるヤン・ウェンリーは大将。軍隊という階級社会で軍規の軽視も甚だしい。無論、大変な非礼でもある。たとえ、高位者が二十代、下位者が五十代であったとしても、許されざるものだ。

見るからに物腰が柔らかく、自由闊達すぎる部下を大目に見ていたヤンにも多少の責任はあるかも知れない。年齢よりも若々しく、軍人に見えないほど線が細く、滅多に声を荒らげることもない。ここにいない敏腕軍官僚に言わせると『あいつは怒るのも面倒くさいのさ』ということだが、ガチガチの軍人には侮られてしまうのも否めない。

サックス少将の弁明過多で冗長な説明にも、頷いて穏やかな返答を

返すのみ。ヤンを知る者からすれば期待値の低さに過ぎないのだが、知らない者には組し易しと写る。サックス少将なりには、手を打ってはいたのだろう。そうだと思いたい。こちらに説明も何もないまま、無為に流れた二日間のうちに、実を結ばなかったとしても。

事態が急変したのは１０日。航路の抜き打ち調査で、このままの進路を維持すれば恒星マズダクに突入するということが判明した。また二日間がその善後策に費やされた。

リンツ中佐とポプラン少佐が珍しく口を揃えて、責任者を危機対処能力の低いおっさん呼ばわりするのも当然だ。１３日になり、ようやく犯人探しに着手したのである。遅きに失するとはこのことだ。ミスだろうが故意だろうが、真っ先に疑われるべき人間、それがドールトン大尉だった。航法主任士官であり、航路管制センターへの通信責任者であるのだから。

犯人探しのプロセスも、これまたまずかった。有無を言わさず拘禁して尋問すべきところを、後手に回ったばかりに緊急管制室に立てこもられ、船団すべてのコントロールを奪われる始末だった。すでに、二百万人以上を道連れに無理心中を図った女性である。抜き打ち検査で未遂に終わったのは、僥倖（ぎょうこう）に過ぎない。船団が緊急停止したのは恒星から六千万キロ。光速にしてわずか二百秒の距離であった。

正しい航路データが破棄されていたため、その後も立ち往生を続けていた。こうした中での立てこもりである。緊急管制室は、通常の管制室にトラブルがあった時に備え、独立したシステムになっている。各種ハードに対する優先度も高い。敵に管制を占拠されたときの最後の砦だからだ。

これが完全に裏目に出た。今や船団の人間全ての生殺与奪が、一人の女性に握られている。なぜ、こんな常軌を逸した行為に出たのか。

それは、帰還兵の一人にあった。妻ある身でドールトン大尉の恋情を裏切り、財産を騙し取り、彼女の糾弾よりも帝国への逃亡を選んだ男。フレデリカは愕然としてしまった。親しげに話しかけてくる年長の同室者の中の瞋恚（しんい）の強さに。

両撃墜王の男女間の責任論争は、この際どうでもいい。結局当事者にしか分からないし、現在の危機を好転させるものでもない。ドールトン大尉の本来の同僚は、管制コントロールを取り戻すために必死で努力をしている。エル・ファシルの脱出行に匹敵する難事業であろう。中尉二人での分担作業だが。もっとも、成功しても賞揚されることはない。混じり気なしの汚点、身内殺し未遂だからだ。

同室者のよしみで、フレデリカは説得役を買って出た。彼女自身、解決するとは思わなかった。フレデリカの言葉で立ち直ることが出来るくらいなら、最初からこんな真似をしないのだから。

ドールトン大尉は、精神の均衡を失いつつあった。立てこもったドアの向こうの声は、激昂から暗鬱へ乱高下を繰り返す。豊かで潤いがあったアルトの声は、壊れた管楽器のような不協和音となっていた。

なだめてすかして理由を聞き出し、その怒りも理解はできる。それでも二百万もの人を巻き添えにすべきではないと言葉を尽くしたものの、金切り声で叫ばれてしまった。

「あんたになんか、私の気持ちはわからない！」

仰せとおり、わかるわけがない。フレデリカが好きな人は、誠実で、責任から逃げ出したりはしない。上官からの理不尽な命令にも、戦死した部下の家族からの非難にも。戦場では、奇策やペテンも使うし、敵軍からはいくらでも逃亡するが。

だが、そんな相手に自分の人生を棒に振ってまで、なぜ復讐をしようとするのか。一顧だにしないことこそ、最大の罰であろうに。だが、気付いてしまった。厳密にはその男への復讐ではない。イヴリン・ドールトン自身の心への供物に過ぎない。その男も、二百万人の帰還兵も、イゼルローンの一行も。

もしも改心したとしても、やったことは取り戻せない。いずれにしてももう遅い。職権を乱用し、二百万人以上の生命を危険に晒した。被害者には、同盟軍最高の智将も含まれる。

軍法は、一般の刑法よりも厳しい。銃を持った軍人と、包丁をもった一般人では違う基準が当て嵌(は)められる。事情聴取と軍法会議で、過去から現在までの事情と尊厳を丸裸にされて、未来に待つのは銃殺刑だ。情状酌量が認められても、せいぜい薬殺か電気椅子か、その程度の違いだった。

いっそ、彼女の思いどおりにさせてやったらいいとポプラン少佐が嘯(うそぶ)く。一人の犠牲で、全員が助かるなら止むを得ないと。口調は軽薄だが、一面の真実でもあった。出されたコーヒーで、乾いた口を潤し、フレデリカは反論した。　復讐を終わらせたら死ぬつもりだろうと。対するポプランは、そのようにさせてやればいいと突き放した答えを返した。ここは自由の国なのだから、生死の選択も本人に委ねて問題はないと。

たしかに。彼女がこの船団の人々を道連れにしないというのなら、それでもいいのだろうけれど。フレデリカがそう指摘すると、ポプランは苦々しい顔で反語の賛同をした。

その傍らで、ヤンはじっと考え込んでいた。安楽椅子の上、片膝を立てた胡坐姿で。リンツ中佐が表現しにくいとこぼした、遥か彼方を見ているような黒い瞳。いつもと何も変わらない。ここは戦場では

なく、ある意味でもっと悪い。頼れる味方はこの五人だけ、守るべきは二百万人以上。その命運を握るのは、狂いかけた女性一人。それでも、この司令官が行儀の悪い姿勢で座っているだけで、見た者に安心を与える。

そのリンツ中佐が、自分が緊急管制室に突入すると申し出たが、ヤンは許可をしなかった。彼の能力を疑うわけではない。彼女が武器も携行しているのが問題なのだ。只の一射で、航行管制コンピューターに打撃を与えることができる。

もっと問題なのは、ハイネセンへの正しい航行データが破棄されてしまっていることだ。制圧までの短時間で、ワープに突入されてしまったら？　恒星からわずか六千万キロ、大質量に近すぎる。事象の地平線を飛び越え、虚数の海にダイブしてしまうだろう。二度と還らぬ旅だ。

これは正解だった。ＭＰを突入させるために流し込んだ催涙ガスが逆流させられたからだ。なかなか勘の鋭い女性である。航法機器のみならず、艦内システムの操作にも精通している。本来は美点だが、敵対すると難点になる。

こうして膠着状態のまま、１３日は終了した。１４日3時すぎに、亜麻色の髪の少年が船を漕ぎだす。

「提督、どうします。起こしますか？」

空戦技の師の問いかけに、保護者は首を振った。

「いや、寝かしておいていいよ。こんな碌(ろく)でもない騒動は、子どもの教育によくない」

全くだ。全員一致の感想である。痴話喧嘩にも作法というものがある。当事者同士、物陰でこっそりやるべきだ。他人を、それもお偉いさんを含めた二百万人以上を巻き込むものではない。

フレデリカは、ユリアンに毛布を掛けてやった。幸い起こさずに済んだ。声を出して身じろぎしたので、一瞬起こしてしまったのかと思ったが。

「そして、これから子どもの教育に悪い話をする。正直に言うなら、彼女を排除するしかない。

できるだけ被害を出さない方法でだ。当人以外の人的被害をね」

「閣下、やはり小官が突入します。どうか許可を」

リンツの言葉に、ヤンは頷かなかった。

「今日の事態を見ただろう。無論、MPに制圧が出来るならそれに越したことはない。

だがね、そろそろ限界だよ。彼女の精神だけではない。この艦の帰還兵三百人のことだ。

彼らが暴動を起こしたら、いかに貴官が勇猛でも数で負ける。我々を守ってくれても、

標的候補にはサックス少将も議員さんらもいるんだ」

「だから、シャトルをかっぱらって、おれの操縦でハイネセンを目指そうって言ったんですよ」

緑の瞳の撃墜王（エース）の言葉に、ヤンは小さく笑った。

「残念ながら、千三百光年も航行できるシャトルはないよ。

貴官の操縦は体験してみたくはあるがね。

首都に到着する頃には、文明が滅んでいるかもしれないが」

「提督、小官も同意見です」

上官と親友から駄目出しの十字砲火を貰って、ポプランは呻いた。

「うう、手厳しいなぁ。でも、どうするんですか」

「貴官が言っただろう。ドールトン大尉の思いどおりにさせて、生死の選択を本人に委ねると」

淡々とした口調の告死の宣告であった。二人の少佐と一人の中佐は息を呑んだ。戦場でも決して平静さを失わない、天秤の量り手。最少の犠牲で、最大の生存を選択してきた名将の横顔だった。

「彼女の忍耐と判断力の限界まで粘る。そして、彼女に思いを遂げたと錯覚させる。

そこで一瞬でも正気に戻ればいい。自ずと判断をするだろう」

自分の過去を軍事法廷で曝け出すか。それを抱いて沈黙の内に沈むか。待つのは同じ結末だ。ドールトン大尉は、美しく有能で高いプライドの持ち主だった。彼女がどちらを選ぶか、フレデリカにはわかった。

「我ながら碌でもない。今のうちに、グリーンヒル大尉には謝っておかないといけないな。

すまない。私は君に一番辛い役目を与えることになる」

黒髪が軽く下げられた。

「君にドールトン大尉は、自分の気持ちがわからないと言ったんだね」

「はい、提督。でも……」

フレデリカはヤンに同意をしたが、次に否定形を重ねようとした。それを黒髪の上官は、視線ひとつで遮った。リンツが描写し、ポプランが表現したその目で。

「君の説得には充分な成果があったんだ。他の人にだったら、きっとこう言っただろう。

『あんたなんか、私のことを知らないくせに』とね。彼女は、君に事情を話した。

そして一定の信用を置いている。私はそれにつけこむことになるだろう。

起こった結果については、全て私の責任だ。だが、その時が来たら役割を果たしてくれ」

「はい。了解(イエス)ですわ、閣下」

長くも短い夜を越え、MPの不手際を横目で見ながら、事態の推移を見守る。イゼルローンの三人の佐官が相談を始め、ヤンが頷いたのが15時ジャスト。その5分後、通常航行が開始された。進路は恒星マズダク。突入までは三時間半。艦内施設のエネルギー供給が停止し、光源は肉視窓からの恒星の光のみになる。刻一刻と大きくなっていく、その輝きに船内がパニック状態になった。

17時。針路変更が不可となる直前、一隻のシャトルが輸送船から離脱した。それに、ドールトン大尉のかつての愛人が乗っているとフレデリカは告げた。閉ざされたドアを必死に叩きながら。そして得心した。ヤンが言ったのはこのことだった。ヤンの言うところの、一定の信用を持つフレデリカにしか出来ない役割。

ドールトン大尉が憎い相手に復讐を遂げることを見越し、転針せざるを得ないようシャトルの発進方向を設定する。武器がビーム砲だけであることに着目して、同時に艦内エネルギーのリカバリーを図る。見事な魔術だった。

17時5分に針路を転じた輸送船は、3分間ののエネルギー充填(じゅうてん)後にシャトルを砲撃し、これを撃沈。無論、シャトルは無人だった。

間髪を入れずに緊急管制室のドアを爆破して、ポプランとコーネフが突入。ただ一人の住人は、既にこの世にはいなかった。自らのこめかみを銃で撃ち抜いていたのだった。

「ねえ、ドールトン大尉。どうしてこんなことをしたの？」

フレデリカの問いかけに、応える者はいなかった。MPが収容し、検視を終えた彼女の遺体に、最期の装いを整えてやる。同室者ということで、彼女の衣服や化粧品を持ち出せたから。

褐色の肌をしたドールトン大尉には、自分の化粧品は使えなかった。肌の色も、似合う口紅の色も違う。血で汚れた髪を梳(くしけず)り、濡れたタオルで可能な限り拭ってやる。替えのベレーを被せて形を整える。傷に貼られたゼリーパームが目立たぬようにだ。出来るかぎり、綺麗にしたつもりだ。明日には宇宙葬にするという。事件そのものもなかったことにされるのだろう。

「あなたを理解することはできなかった。まだしばらくの間は許すこともできないわ。

でも、気の毒に思う。あなたにはもっとふさわしい人がいたでしょうにね」

この結末が、あの人には見えていたのかと思う。ローエングラム候

を冠絶した存在と讃える黒髪の青年は、どれほどの知力を秘めているのだろうか。そして孤独の深さは。人に見えぬものまでが見え、見たくもないものが見える。だが、彼は逃げないだろう。愚痴やぼやきをこぼしながら、能力の限りに立ち向かうのだろう。

フレデリカが真に、幼い日の思い出に終止符を打ったのはこの時だった。少女の憧れに別れを告げ、女性として尊敬を抱く。恋から愛への変容の瞬間。彼について行こう。その航路が平穏なものでなくても。どこまでも、どこまでも。もう見返りは求めないから。

寵児二人

「それと、もうひとつお願いがあります」

低められた声がアレクサンドル・ビュコックの耳元に囁かれた。傍目には、孫と祖父の内緒話に見えるかもしれない。告げられた内容は、重大極まるものであったが。

つい先ほど、この青年が話したのは、クーデター発生の可能性だった。それは、帝国軍の実質的な権力者である、ローエングラム候の使嗾（しそう）によるものになろう。地方で叛乱を起こし、中央から兵力を派遣させて、がら空きになった中枢部を抑える。

彼にしてみれば、帝国内での権力闘争に邪魔をされないための布石に過ぎない。成功などしなくてもいいが、首謀者に成功を確信させるに足る緊密な計画を作っただろう。

何とも面倒なことだ。クーデターが発生すれば、その収拾に途轍もない労力を費やす。成功させてしまえば、自由惑星同盟の国是の死である。ルドルフの圧政から、一万光年の長征を経て、２００年を掛けて新たな小ルドルフを産むだろう。成功を阻んでも、同盟軍は分裂する。もはや国民からの支持は地に落ちる。

そうなったとき、この黒髪の青年が、新たな偶像に祭り上げられてしまうだろう。

功績は巨大、身辺は清潔、知性は高い。人格も穏和な紳士といっても、まあ嘘ではない。案外曲者だが。若いし、容姿だって磨けば光るはずだ。

なによりも、その人望の高さだ。非常に真っ当な責任論を口にする

ため、上層部の受けは悪いが、部下からの信望は極めて篤い。この司令官の為になら、と思わせることのできる人間である。残念なことに、彼には同僚と呼べる人間がいない。大将格は最低でも二十歳は年上で、ビュコックとは四十歳違う。ぎりぎりで孫になりうる年齢差だ。外見上は、まったく問題なく孫と祖父でとおる。ビュコックの二人の息子は、すでに戦死してしまっていたが……。それは措こう。

そちらもまた、新たなルドルフの誕生だろう。恐らくは、あの男よりもっとたちの悪い独裁者になるかも知れない。優れた独裁者、いわゆる名君。彼一人が全てを決定し、国が円滑に統治される。

そうなった時、国民は面倒な政治に参加するだろうか。何人もの凡人が、雁首そろえてえっちらおっちら考え、ああでもないこうでもないと協議し、どっちにするのか多数決、という迂遠なことをやるよりも、遥かによい方法をぽんと考え出してくれる人がいるのに。

同盟の独裁者ヤン・ウェンリー対帝国のラインハルト・フォン・ローエングラム。

後者の地位は、候だか公だか、果ては皇帝かもしれないが、笑えない喜劇の最たるものだ。

なにより救えないのは、そうなった方が国民大多数にとって幸福ということである。

二千万人が還らず、その１０分の１の捕虜が帰還した。その式典と祝賀パーティー。なるほど、たしかにめでたいが、そもそも帝国本土進攻作戦をやらなければ、全部が不要だったな。パーティー会場から抜けだし、あそこに並べられた料理よりもずっと安くて美味い軽食を口に入れながら、ビュコックは皮肉っぽく考える。

前年のアスターテ会戦、アムリッツァの大敗、そいつを忘れてはおらんかね。パーティーの予算があるなら、遺族年金を増額するがい

い。たとえ一人あたり1ディナールぐらいに過ぎなくてもな。こんな衆愚政治は、心ある軍人ほど打開策を求めるだろうよ。力でもって、文民統制という軛(くびき)を壊し、国を建て直そうと思うだろう。そこに金髪の美青年がつけこんでくるか。よくもまあ、考え付くもんだ。この若いのも天才というやつなのだろう。

確かに、発生させるまえに叩かなくてはならない。だが、それが間に合わなかったときのために、法的根拠を準備しておいてほしい。それがヤンの依頼だった。クーデターを阻止するのに、超法規的措置をとるのは更に軍を失墜させるからだ。

これほど民主共和制を尊重し、文民統制の重要さを知るこの青年にこそ、政治家になって欲しいものだ。

だがこれは、ないものねだりだな。ビュコックは口髭の下で唇をゆがめた。魔術師ヤンが難攻不落のイゼルローン要塞にいる、ということが同盟の国防の切り札なのだ。

個人に依存するなかれ、という民主主義における軍隊の原則からはとうに逸脱している。この国はもう終焉を迎えつつあるのかも知れなかった。だが、それでもヤンに頼らざるを得ない。パーティーの会場で、恰幅や体格のいい参加者の中で、華奢にさえみえる猫背ぎみの肩に。

「よろしい、わかった」

彼がハイネセンを離れる明後日までに、宇宙艦隊司令長官からの命令書を届けること。それを約束した。

これが杞憂にすぎず、無用の長物になることを願わずにはいられなかった。

人目に立つとまずいので、老人と青少年は別々に帰路についた。先

に年長者が立ち上がり、夜道を遠ざかる。ヤンは、老練の名将の激励と握手に頬を紅潮させたユリアンと一緒に、無人タクシー乗り場を目指す。

無人タクシーの中で、ビュコックは先ほどの言葉を反芻した。

「どうして、貴官は推理の披露先をわしにしたんだね」

彼に問われたヤンは、更に推論を披露した。

「ローエングラム候は、同盟軍の分裂を狙っています。
クーデターを成功させ、同盟中枢を掌握し、再編できる手腕と人望の主が首謀者になるのは、
彼の本意には適いません」

百戦錬磨の老将が、ひやりとするような内容だった。なんとか、冗談めかした返答をしてみせる。

「やれやれ、不敗の魔術師のおほめの言葉と受け取ればいいのかね。
では、貴官はどうなんだ。
わしがクーデターの成功者になれて、貴官がなれんとは思えんな」

示唆をこめた台詞にヤンは苦笑した。おさまりの悪い髪をかき混ぜて、尊敬する同格者を安心させるような口調を心掛けて返答する。

「まあ、彼は私が見抜くであろうことは織り込み済みでしょう。
それに、私はイゼルローンにいるのです。
あそこには容易に工作員は入れません。
第七次の教訓からですが、シェーンコップ准将と
薔薇の騎士（ローゼンリッター）らが厳重な警備体制を敷いてくれましてね」

「ほお、あの連中がなぁ。
なかなか手のつけられん奴らだと評判だったのだが、貴官が手なづけるとはな」

これは意外だった。今日聞いた中では、一番の吉報と言えよう。宇宙最強の白兵戦部隊が、この若い提督を守ってくれるというのは心強いことだ。

「いえいえ、そういう訳ではありませんよ。
きっと、私が頼りないので見るに見かねてだと思います」

「そうかもしれんがいいことだ。
たった6人の逆亡命者のせいで、いつまでも色眼鏡で見られるのは気の毒な話だからな」

ヤンは頷いた。目を伏せて、更に低い声で囁く。

「ええ。全く愚かな差別です。我ら皆、逃亡者でなければ亡命者の子孫ですよ。
その時期の違いで差別するなんてナンセンスでしょう。自由、平等、自律、自尊。
この国是が生きていてこその、自由惑星同盟です。クーデターはそれを殺します。
美辞麗句で飾っても、新たなルドルフの誕生に変わりはありません」

ビュコックは頷いた。この青年は、絶対に独裁者にはなれないだろう。

彼は、戦いに男神（アレス）を見る人間だからだ。死と破壊と狂乱の象徴。
敗走（フォボス）と恐怖（ダイモス）の父である、戦争の男神を。殺した敵、死なせた味方の双

方を悼み、戦争を嫌う。だから部下の犠牲が少ない方策を考え、実行する。それが彼を名将にし、戦場から解放させない。彼が見出さない女神(アテナ)に、最も愛される皮肉だ。

「あの若いのと、そう約束したというにな」

クブルスリー統合作戦本部長の襲撃。犯人は、アンドリュー・フォーク予備役准将。

凶報が齎(もたら)された時、ビュコックは椅子から飛び上がった。あまりに早い。

ヤンら一行が、イゼルローンへ出立してから、まだ八日しか経っていない。まだ十日は旅程を残している。

こちらの準備も、ようやく信頼のおける憲兵の選抜ができたばかりだ。叩き上げのビュコックは、仕事を部下に割り振り、彼らに任せるのが苦手だ。事が事だけに、秘密裏に運ばねばならないというのはあったにせよ、多忙な彼がやるには日数を要してしまったわけだ。

不幸中の幸いと言おうか、クブルスリー大将は一命を取り留めた。しかし、全治三カ月、当面は絶対安静である。それにしても、またフォークか。アムリッツァの会戦の前、ビュコックは彼の無能と無責任を弾劾した。そして、彼は転換性ヒステリーを起こした。

当然、この襲撃の矛先はビュコックに向けられても不思議ではなく、老齢の彼だったら死に至った可能性も高い。そうしたら、ヤンからの警告を知る者はいなくなってしまう。

そうでなかったことを、まずはよしとするしかない。だが、これは恨みによる独立した犯行などではないだろう。そもそも、フォークは軍病院の精神科で入院加療中だった。退院して、復帰を願い出たところ、クブルスリーに正規の手続きを踏むように諭され、ヒステリー発

作を起こしたという表向きである。

ではなぜ、ブラスターを持っている。しかも、袖に携帯する特殊工作員用のものと合わせて二挺も。これは発作的な犯行などではない。フォーク自身は操り人形でも、後ろに人形遣いと脚本家がいる。

その四日後の四月三日、惑星ネプティスで武力蜂起と占拠。以下二日から三日おきという短すぎるスパンで、惑星カッファー、パルメレンド、シャンプールで武力叛乱が続発した。

その中間にあたる四月六日に、銀河帝国で大規模な内乱が発生。脚本家は、ヤンの指摘どおりだと認めるほかはない。

なんと素早く果断であることか。ヤンの警告はもう少し先の発生を想定していたであろう。かの美貌の若者は、急速に権力を掌握しつつある。専制という権力が一者に集中する政体で、その座を冠絶した天才が占めたら、迅速性は民主政治の比ではない。

ビュコックはそれを苦く噛みしめる。同じ手法を取ってはいけない。こちらにも匹敵する天才はいるが、それだけはできない。

それにしても、アムリッツァから経過した時間は同じだ。しかも帝国の民衆は、焦土作戦でローエングラム候自身から痛めつけられているはずだ。フリードリヒ四世の死という事情はあるが、ここまでドラスティックに打って出るのは、同盟ならばできないことだ。

やはりあの金髪の若者は、ヤン・ウェンリーとは違う天才だ。彼は戦いに女神（アテナ）を見る。計略と栄誉を象徴し、勝利（ニケ）を侍女として侍らせる戦いの女神を。

だからこそ、権力の道を征くのに、剣を以て進むことができる。愛

憎に身を捧げ、黄金と炎に彩られた英雄。だが、それによって死んでいく、彼にとっては名もなき者を顧みるのだろうか。皆が名を持ち、誰かにとっての愛しい誰かである、味方と敵を。その覇道で、彼が想うこともない戦神（アレス）に供物を捧げている。

黒髪黒目の青年は、無事にイゼルローンに到着したという報告が入った。これもまた少ない吉報である。クブルスリー大将の襲撃直後、宇宙艦隊司令長官名において、各管制センターにカルデア６６号の航行ルートを最高機密に指定した。おまじない程度のものだが、ビュコックは胸を撫で下ろした。

ヤンがその座を温める間もなく、ドーソン統合作戦本部長代行が、ヤンに四ヵ所すべての叛乱を鎮定せよと命じたのは、四月一三日。負傷したクブルスリーの代わりに、ビュコックに兼職の打診が来た時に早々に断ったのは、やはりまずかったかもしれない。ジャガイモの廃棄を声高に糾弾するような小人が、ヤンに嫉妬しないわけがないのだ。

だが、これは案外に妙手と言えるかもしれない。ビュコックはそう思い直した。ヤンには悪いが、ビュコック率いる宇宙艦隊主力はハイネセンに駐留していられる。さすがに、この状態で行動を起こすまい。その間に、ヤンがカバーしきれない部分に備えなくてはならない。

そうやって動き出したところ、同日に首都における大規模な地上戦闘訓練を実施するという通達を受けた。これは年頭から予定が立てられていて、全く不審にも思わなかった。後から思えば、既にその計画の時点で、種は播かれて発芽済みだったのだろう。茎は伸びず、葉も茂らなかったが、地下茎は着々と育っていたのだ。

正午にオフィスで銃を突きつけられて、その中に訓練通達を出した

責任者の姿を見たとき、己が老いたことを思い知らされた。そして、はっきりと足音を聞いた。同盟軍が十三階段を上る足音を。

彼らに糾弾の言葉を突き付けながら、ビュコックは胸中で黒髪の青年に詫びた。

せっかくのおまえさんの警告を、無駄にしてしまった。

しかも、また辛い選択を強いることになってしまった。

今の状況を作った連中が、さも正義の顔をして国を救うとほざいている。

酒臭い男に焚きつけられて。

そして、首謀者を睨み据える。口に出した言葉よりも、数段激しい思いを胸中に抱いて。

あんな酒焼けした脳みそから、こんなに緻密な計画が出て来るものか。

しかもそいつは、三百万人の民間人を、２１歳の中尉に押し付けて逃げ出した男だ。

その中には、あんたの娘もいただろう。それを忘れているのか、ドワイト・グリーンヒル！

アーサー・リンチはいままで『どこ』にいた？

そして、今その娘はどこにいる？　その元中尉の所だ。

貴様が勝てば、娘は愛する男を失う。彼が勝てば、娘にとっては父の敵だ。

そんな当たり前の情をなくした人間の言葉に、国民は絶対に賛同はせん。

この救国軍事会議とやらは、ご大層な名前と逆の結果しか齎さん。

銃を突きつけられ、拘禁場所に引き立てられ、ビュコックは天井を仰いだ。

建材を突き抜け、大気圏を越え、一万光年の彼方に、この視線と思

惟が届くならば。

ラインハルト・フォン・ローエングラム。確かに天才だ。その頭脳にとって、この謀略はゲームにも等しいのだろう。自分の目的を果たすに、使える策を躊躇(ためら)うことがない者を英雄と呼ぶのか。

その計略で、失われる命に無関心でいることが、いつか牙を剥き、さらなる敵を作る。

だが、もっと重大なのはその中にいるかも知れない、将来の友や味方を失うことだ。

それは憐れんでやろう、金髪の坊や。

黒髪の魔術師は、絶対におまえを選ばない。わしはそのおまけだな。

情報が遮断された中、ビュコックにできるのは生きていることだけだ。

ヤンは必ず勝つだろう。その後のために、生きていなくてはならない。

「やれやれ、『正義』の騎士達が老人を閉じ込めて、魔術師が助けに来る、か。

お伽噺とは配役が逆だの」

その時、傍らに美しい姫はおるのだろうか。だが、案ずることもなかろうて。

古来より、魔法使いは心優しく美しい女性の味方だと、そう決まっておるものだ。

運命の女神

時はわずかに遡る。クブルスリー統合作戦本部長が、アンドリュー・フォーク予備役准将に襲撃され、重傷を負った。

その代行となったのが、三人の次長の最年長、ドーソン大将である。この人事は、同盟軍全体を少なからずうんざりさせた。ドーソン大将は、後方畑を歩んできた人物である。しかし、あまりに瑣末なことにこだわり、また、才能ある他者に嫉妬深い男であった。

彼が後方参謀として関わった部署、後方作戦本部、教官として赴いた士官学校のすべてで遍く嫌われていた。統合作戦本部の次長という職にあったのも、シドニー・シトレ退役元帥、クブルスリー大将という見識ある上官の下で、更に同職者が二人もいればコントロールがつくだろうという、消去法による昇進と配属だったのだ。

本来なら、こんな非常時に起用すべき人材ではないのである。当初、代行を打診されたのは宇宙艦隊司令長官のビュコック大将だったが、彼は文民統制の原則から兼任を断った。これは、極めて真っ当なのだが、実績と人望を備えた老将を除いてしまうと、一気に人的資源が劣化するのは深刻だ。上層部にも次世代が育っていないのである。

遥かに年齢が下がるのがヤン大将。ついに三十歳になってしまったと親しい人にこぼす彼だったが、功績、兵士からの人望ともに申し分ない。熱心さにはやや難があるが、若くとも見識が高く、人物の起用にも定評がある。和平派であるため、国防族の政治家に受けが悪いが、国民の人気で捩じ伏せてしまえる。

ヤンを宇宙艦隊司令長官に任じ、ビュコックを統合作戦本部長に昇進させる。それができれば一番よかっただろう。前線と後方のトッ

プの意思疎通という点でも最良である。ただ、彼はイゼルローン要塞司令官兼駐留艦隊司令官という、国防の最前線を担う名将だ。彼に代わりうる者こそいないのであった。

大将はヤン以外にもう一人いる。査閲部長のドワイト・グリーンヒル大将だ。この人は理性的な良識派と声望が高く、将来の統合作戦本部長と目されていた。ただし、アムリッツァの大敗の際に参謀長として、ロボス退役元帥の補佐が不十分であったということにより引責中であった。人事的常識として彼の起用はできない。

かくして、またもや消去法で軍のツートップの一方に彼が抜擢されたのである。恐らく、同盟軍史上で最も人望のない統合作戦本部長代行であろう。これを聞いた時、ビュコックでさえ兼任したほうがよかったかもしれないと本気で後悔した。その他多くの将兵は、陰口を叩くか、声高に悪口をいいあった。

士官学生時代にドーソン教官にいびられたイゼルローン駐留艦隊分艦隊司令官など、罪もない夜食のポテトグラタンに、フォークを滅多刺しにして鬱憤を晴らした。その剣幕は、いつも冷静なコーネフ少佐が首を捻るほどだった。

分艦隊の主任参謀で、いつの間にかアッテンボローの副官的なポジションになってしまったラオ大佐は、そばかすの提督をなだめた。

「まあまあ提督、そう悪いことばかりではありませんよ」

「ふん、あのじゃがいも士官が統合本部長代行だと！　これ以上悪いことがあるものか」

「あくまで代行じゃありませんか。

それに、クブルスリー大将が復帰されるまでは、少なくとも彼の異

動はありません」

「それが問題だろうが」

鉄灰色の眉をきりきりと吊り上げ、青灰色の瞳はしんから不機嫌な色を見せている。

ラオは重々しく上官に告げた。

「でも、当面はイゼルローンに異動はありません。最悪よりはましな人事ですとも」

部下の悟りきった様子に、食堂の椅子からずり落ちそうになるアッテンボローだった。

「貴官、そこまで嫌な目にあったのか……」

「小官が、ドーソン後方主任参謀の案内係を務めたんですよ。……厨房にね」

陰鬱（いんうつ）な笑みを浮かべるラオに、アッテンボローは濁音混じりのうめき声で同情を示した。

「普通、厨房に案内しろと言われれば、衛生管理状況の確認だと思いますよね。

いきなりダストシュートを開けて、中身を確認し始めた時、一同唖然としましたよ。

それで、秤（はかり）を出せと言い出すんです。無論、厨房長は断りました。

衛生上大問題ですからね。そうしたら、医務室の体重計まで小官が運ばされました。

芽が出て緑色のやつを。食中毒の恐れがあるから捨てたんですよ。

二万人分、全部手作業で皮剥きしたり、機械で剥いたもののチェッ

クなんて無理でしょう。
その後はもう、上から現場から非難の十字砲火です。いたたまれないったらなかったですよ」

そこまで一気に言い切ると、上官の夜食にちらりと目を向けた。

「以来、じゃがいもは進んで食べたいとは思いませんね。
具として入っているものを残すほどではないですが」

「その、俺が悪かったよ……」

「ですからね、細かいことにこだわるあまり、突拍子もないことをしでかす人です」

アッテンボローは髪をかき回した。元々もつれた毛糸のような癖があるため、黒髪の先輩よりもひどい有様になった。なかなかハンサムな容貌が台無しである。せっかく、メディアが評する『同盟軍結婚したい男第二位』なのに。

「そこまで詳しい経緯を聞くのは初めてだが、噂よりも悪いじゃないか！」

「ですから、ここに来なかっただけありがたいですよ。
キャゼルヌ事務監とのソリだって最悪なんです。提督もご存じでしょう」

アッテンボローは、目を泳がせて頷いた。頭の上がらぬ８歳上の先輩は、相当な毒舌家だ。だが、彼が慇懃な態度をとるほうがずっと肝が冷える。

「『終わりなき吹雪（エンドレスブリザード）』が襲来したらどうするんですか。

最悪よりはましと考えましょう、提督。小官はそう思います」
「だが、同盟軍全体にとっちゃ最悪かも知れんぞ」
「小官の目の前にいなければ、知ったことではありません」
普段の毒舌家と常識論者の、攻守ところを変えた論争であった。
そして、もう一人不機嫌な人物がいた。そばかすの提督の先輩の先輩である。
「ヤン司令官を式典に招待し、予算案作成を前倒しさせたあげく、往路で事件が発生した。
主任航法士官の痴情の縺れ(もつれ)から二百万人以上との無理心中未遂が発生し、
それをヤン司令官以下の面々が解決したとおっしゃるわけですか。
ヤン司令官からの第一報との違いが、小官には分かりませんな。随分と簡潔なご説明だ。
これだけの時間を掛けて、さぞや綿密な調査をなさっているのではと思っておりましたよ。
貴官らの精勤ぶり、小官の想像の及ぶところではありません」
超光速通信ごしに、慇懃で痛烈な毒舌をかつての所属に投げかける。先日のドールトン事件で、異変があったことだけは感知しても、その状況は全く蚊帳の外であった。3月16日、ハイネセンから迎えに来た巡洋艦に移乗したヤンから、ようやく連絡が来るまでサックス少将からの一報さえなかったのである。
食っちゃ寝して、多少は体型が戻っているだろうと思っていた黒髪の司令官が、相変わらず線の細い顔を白っぽくして、目の下に濃い隈をこしらえて、概略をキャゼルヌとムライ参謀長に伝えた。

疲れ切った笑顔で、もう終わったから大丈夫だと言われて、はいそうですかと治まるわけがない。シェーンコップが妄想した動機が正しいかは定かでないが、アッテンボローが否定した以上に荒唐無稽な非常事態が発生したのだ。航法士官の配置を始めとする危機管理体制の低さ、状況把握の遅さ等々、抗議して調査を求めるのは当然だった

それでも当初の予定どおり、駐留艦隊の演習は粛々と実施された。ヤンの帰還を見越してのものだ。更にブリーフィングを重ねて結束を深め、雷神の槌の連射や要塞砲の併用を含めた複雑な艦隊演習を行った。最終フェーズの終了は、３月２９日。

ようやくフィッシャーの仮免許を授与され、司令官代理、要塞防御指揮官、分艦隊司令官は簡単に祝杯を上げた。その翌日、クブルスリー大将襲撃事件が飛び込んできた。そして、続々と後を追う凶報。

イゼルローンの将官たちは、クブルスリー大将の襲撃以降の事件が一本の糸でつながっていることを察知した。各地の武力叛乱がイゼルローンやその周辺に飛び火してくる可能性もある。上層部が浮足立つわけにはいかない。すでにヤンらは帰途についていて、この混乱には巻き込まれずに済んだ。だが、帰りの艦は新造駆逐艦とはいえ、ただ一隻である。続けて入ってくる各所の武力叛乱の報に、イゼルローンの幹部らはまたしても焦燥に駆られることになった。

ここで今さら、ドールトン事件を糾弾しても本来は仕方がない。これは、緊急の追加配当を呑ませるための脅しである。今後、同盟各所に叛乱が発生すれば、イゼルローンに物資が届くかが懸念される。民間業者は値上げを敢行するだろうし、軍需物資は当初入札額で納入されるか、保証の限りではない。下手をすると取りに来てくれということになりかねない。そして、もっと恐ろしいのは金融機関が封鎖され

て、給与の支払いが滞ることだ。

とにかく、手元に金をもらっておく必要がある。敏腕軍官僚として歩んできたキャゼルヌの経験が警告する。あの小人が、有形無形のいやがらせをする前に、先立つものを押さえておくべきだと。そのためにはなんだって利用する。これだって立派な折衝（せっしょう）のテクニックだ。恐らく、今日明日までは新統合本部長代行は、引き継ぎで周囲の人間をうんざりさせているだろう。彼の居ぬ間に、後方作戦本部から金銭（かね）を毟（むし）り取る。キャゼルヌはそう決意していた。

食えず、給料が支払われなくなった軍隊は、最悪の暴力集団に成り下がる。難攻においては不落の、イゼルローンに拠る同盟最精鋭のヤン艦隊がそうなったら。キャゼルヌの示唆に、後方作戦本部長は断を下した。彼の決裁専決額の上限まで、人件費や設備費といった予算の細節項目すべてに追加の配当を行ったのだ。実に百項目以上、総計は十億ディナールに及んだ。細節間の流用を認めるという但し書きをつけて。

後方本部長の英断はこれにとどまらなかった。叛乱の起きた惑星の軍事費を封鎖し、更に叛乱惑星を鎮定する場合に、前線となりうる管区にも予備費を配当し、本部の手元金を分散させたのだ。この見えないファインプレーが、後に大きな役割を果たすのだが、それはまだ先の話。

シェーンコップ准将率いる要塞防御部門の薔薇の騎士（ローゼンリッター）連隊は、クブルスリー大将襲撃の報で、要塞の司令部、管制部、宙港部への警備体制を強化した。亡命者ということで、白眼視されてきた彼らは、排他的な一面がある。逆を言うならば、異分子のつけ入る隙がない。これほどテロリストが入り込みにくい集団はないだろう。軍選科学校から厳しい訓練を経て、激戦から生還してきたのだ。部隊への帰属意識は高く、彼らを信用すると断言した魔術師への忠誠心は篤い。さなが

ら、主君に仕える騎士のごとく、少々ヤンが困惑してしまうほどに。

「だから、そんな大袈裟な……私はそこまで大層なご身分じゃないんだが……」

「寝言は寝てからおっしゃることです。この要塞では閣下が最重要人物だ」

「そうだとも。とにかく、頭と右手が動く状態でいてもらうからな。これはヤン司令官の義務だ」

護衛嫌いのヤンの言葉を、シェーンコップが一蹴し、キャゼルヌが賛同。表現に歯に衣着せぬ毒舌コンビに、ムライの眉間に皺が寄りかけ、大らかな大男が朗らかに取りなす。

「それは言いすぎですよ、キャゼルヌ事務監。
しかしですな、閣下の出張の間みんな心配しましたから、
ちょっとはその解消にお付き合いください」

うまいものだ。フィッシャーは感心しながら頷き、同意を示す。

「まあ、副参謀長がそう言うなら、仕方がないね」

人徳の差であろうか、ヤンがしぶしぶながら同意した。すかさず、強面の勇者たちが警護につき従う。キャゼルヌ夫人のブイヤベースを味わっている間も、フラットの外で一ダースの薔薇の騎士が巡回している。そこから、ヤン家の自宅フラットへの送り迎え、司令官執務室前の護衛と、ハートの撃墜王（エース）が文句の一つも言いそうな面々による警戒が続いていた。そのうち古代の儀仗兵（ぎじょうへい）よろしく、炭素クリスタルの戦斧を携えて扉の左右に立ち始めそうだ。

その方が、ヤン先輩には受けるかもなぁ、と益体もないことを考えながらアッテンボローは司令官執務室のドアを叩いた。だがこれ、明らかにキャゼルヌ先輩の差し金だ。山と積まれた決裁文書からの逃亡防止策だよな。なにしろヤンが到着してからの五日間、軍務と行政の事務書類に追われていた。ようやく参謀長から、そろそろ演習報告の時間が取れそうだというお達しがあったのだ。

律儀にボディチェックを受けてから入室すると、普段はグリーンヒル大尉とユリアンの二人が常駐している広い部屋に、やはり二人の護衛がいる。一人はライナー・ブルームハルト少佐で、もう一人は不良な方の准将である。

「シェーンコップ准将、なんで貴官が護衛をしてるんだ」

「貴官と同様ですよ。閣下の留守中の演習結果報告です。目をとおしていただいている間に、小官は他の仕事をしているわけです」

アッテンボローは、困った顔をした純朴そうな少佐に目をやった。濃褐色の髪と目のブルームハルトの様子から察するに、この護衛のせいで他の仕事をほっぽり出しているに違いない。

黒髪の司令官は、分厚いファイルの頁をぱらぱらと繰っている。ほんの流し読みするだけでも、かなり時間がかかるだろう。ヤンは文章を読むのは早いが、興味のある部分を反復して熟読する癖があるのだ。アッテンボローの演習報告書と突き合わせながら読み出すと、二、三日はかかるに違いない。

「シェーンコップ准将、目を通すまで待つ気なのか？　二、三日はかかると思うがなぁ。

ヤン司令官。分艦隊司令官アッテンボローです。演習の報告書の

提出に伺いました」

ファイルの上から、黒い頭がひょこりと上がり、黒い目が何度か瞬きをしてから後輩を捉える。いつもの穏やかな笑みと声で、報告者たちを労う。

「ああ、ご苦労さま。アッテンボロー少将もシェーンコップ准将も、大変よくやってくれた。

参謀長や副司令官から概略は聞いているが、目覚ましい成果だ。貴官らに感謝するよ」

「なんだ。では、大体は御存じなんですね」

「いや、やはり当事者の精密な記録は重要だ。要塞と分艦隊の連携を双方から検証したいからね」

アッテンボローは分厚さでは負けないファイルを、ヤンの手に手渡して敬礼した。

「では、司令官閣下、確かにお渡ししました。ぜひ、ゆっくり隅々まで読んでください」

「ああ、そうさせてもらおう。そういう訳だから、シェーンコップ准将も持ち場に戻ってくれ。

これに目を通すには、集中しても二日はかかるんだが、おや、なんだろうね」

インターコムから響く声は、キャゼルヌ事務監からのものだった。ドーソン統合作戦本部長代行からの超光速通信（FTL）が入っていると。ヤンはおさまりの悪い髪をかき混ぜて、億劫そうに立ち上がった。アッテンボローとシェーンコップは顔を見合わせる。どうして、今ここに

通信をする必要があるのだろうと。

それはほどなくして分かった。ヤンが幕僚を集めて、ドーソン大将からの命令を伝えたからだ。

それは、叛乱の起こった惑星――ネプティス、カッファー、パルメレンド、シャンプール――の四ヵ所全てをヤン艦隊にて鎮定せよ、というものであった。

幕僚一同、咄嗟に二の句が継げなかった。アッテンボローは、主任参謀の評を痛感した。見事に当たっている。いや、やはり大問題だ。ハイネセン行きの時から、ヤンへの冷遇が露呈し始めていたがこれはひどい。シェーンコップ准将の言葉どおり、嫉(そね)まれているとしか思えない。

ヤンも一応は抗弁した。四ヵ所全てを鎮定するとなると、無論ヤン艦隊が出動することになる。では、ヤン艦隊とは何か？　イゼルローン要塞駐留艦隊である。相当期間、要塞を空けることになるがそれでいいのかと。イゼルローン要塞の雷神の槌(トゥールハンマー)は脅威だが、射程範囲外を航行すれば何ほどのものではない。そうはさせないがための艦隊だ。イゼルローン要塞のみでは六回の攻略戦で、大量の戦死者を出すことにはならないのである。

ドーソン大将からの回答は、ヤンが呆気にとられるものだった。銀河帝国で大規模な内乱が発生しているから、イゼルローン方面に兵力の出動はないだろう。だから、心置きなく叛乱の鎮定を行うべしと。

『それ』の為に『この』状況を作り出したのはローエングラム候だ。主客転倒と言えるのだが、ミクロ視点からだとそういう判断になるのか。これはこれで、宇宙艦隊の主力と第一艦隊が、首都星に残留することになる。案外、ローエングラム候の思惑を斜め上に突き抜けて外すことになるのかもなと、思い直したのだ。

また留守番のキャゼルヌ先輩に、頭が上がらなくなるだろう。袖の下を3本くらいに負けてもらえないだろうか。ユリアンに酒代を指摘されて、ポケットマネーから捻出しているのだが、輸送費が割高になっているのは生活必需品のみではない。ヤンの心の必須栄養素、書籍も同様である。歴史の古書は次に見つかるかが定かではなく、一期一会でお買い上げとなると、こちらだって懐に切ない。

そんな甘い見通しが悪かったのか、はたまた小遣いの算段に気を取られたのが気に入らなかったのか。運命は、スカーフにコーヒーの染みを付けた通信士官の姿で扉を叩いた。

首都ハイネセンで軍事クーデターの発生。救国軍事会議を名乗るその首謀者たちの、中心人物を見たとき。ヤンは、運命の女神を胸中で罵った。傍らで、金褐色の髪とヘイゼルの瞳をした副官が低い声を上げた。超光速通信のこちらと向こう側の、同じ姓をもつ男女。年齢は親子ほど違う。関係は実際にそのとおりだ。フレデリカ・グリーンヒル大尉の父、ドワイト・グリーンヒル。

完全に予想外だった。私はカサンドラなどではない。ヤンは苦く思った。カサンドラは全てを予言し、全てが正しい。しかし、その言葉を誰も信じぬ呪いが掛かっている。私は違う。未回答や誤答ばかりだ。おまけに他人どころか、自分だって信じられないのだから。

ぐるぐると思考は螺旋を描き、足どりもそれに従って室内を巡る。まるで檻の中の熊のように、虎だったらそろそろホットケーキの材料になる頃に、ようやくヤンの心は一つの方向に舵を切ろうとしていた。

心配そうに見詰めるユリアンのダークブラウンの瞳に、自分はどんな顔をして写っているのだろう。少年の質問に、自分の意志を伝え

て、彼女を呼んできてくれるように頼む。９年前、ただ一人の味方だったという、かつての少女を。

少年が、伝令神（ヘルメス）の眷属さながらの軽捷な足取りで駆け出していく。遠くぼんやりとした面影に詫びる。鮮やかな輝きに上書きされて、思い出すのも難しくなったあの子に。

「ごめん、フレデリカ。きっとまた辛い思いをさせる」

また選択を突きつけることになる。彼女がどちらを選ぶのか、それはわからないし、強制はできない。でも、今度は私の番だ。あの少女への恩返しではなく、今の君という女性に対して味方でいよう。

心の場所、人の分

ユリアンが駆け出してから、きっかり二分後にヤンの副官が入室してきた。

「グリーンヒル大尉、まいりました」

常ならば桜色の頬が、石膏像のような白さと硬さを宿していた。だが、ヘイゼルの瞳に充血の色は見られない。こんな理不尽な状況におかれた23歳の女性には、過ぎるくらいの気丈さだった。

「……ああ、元気そうだね」

言ってからしまったと思うが、かといって気の利いた台詞など出てくるはずもない。軍部の良識派として声望の高かった父親が軍事クーデターの首謀者となり、その鎮定にあたるのは自身の上官である。彼女としても返答に困ることだったろう。

ヤンは、この後で幕僚会議を開き、その際の準備と機器操作を彼女に任せる旨を告げた。グリーンヒル大尉にとっては意外なことだったようだ。ヘイゼルの瞳を瞠(みは)って、副官の任を解かれるのだと思っていたとヤンに告げた。

「やめたいのかね？」

そっけないほどの言葉に、息詰まる緊張を隠してヤンは訊いた。諾(イエス)または否(ノー)。君はどちらを選ぶ？　私人として父を取るのか、軍人として上官の命令に従うか。非情な選択だね、大尉。本当にすまないと思う。君が辞めたいと言うのなら、副官の解任は司令官の権限の範囲、たぶん私達にとっては一番楽な道だ。

「いえ、でも……」

答えは否。ヤンはゆっくりと瞬きをした。

「君がいてくれないと困る」

フレデリカ・グリーンヒルは、ヤン・ウェンリーにとって過ぎた副官だ。抜群の記憶力と細やかな心遣いに裏打ちされた、事務処理能力。機器の操作やプログラムもお手の物だ。ヤンは、そう彼女に告げながら心で詫びた。それさえ傲慢に過ぎるのかもしれなかったが。

「はい、心からつとめさせていただきます、閣下」

冷静さを装った下から、相反する表情がよぎった。この女性にはもっと楽しい、安楽な未来だって選べたのだ。軍高官の令嬢なのだから、気の済むまで勉強したり、お洒落をして友達と遊ぶこともできた。聡明で、美しく心優しい。きっとどんな道を選んでも成功して、幸せになれただろう。

「ありがたい。それでは先に会議室に行っていてくれ」

もしも、軍人という道を選んだのに、エル・ファシルの一件が影響を及ぼしているのなら。イゼルローンの攻略、アムリッツァの会戦。そして、これから向かうクーデターの鎮圧。永遠の夜と星々の波濤(はとう)を越えて、こんなに遠くまで連れて来てしまった。着任の紹介の時に、彼女から告げられてもなに一つ覚えてはいなかった。あれから、ぼんやりとは思い出したが、強い印象はやはり残っていない。美しく聡明でも、心優しい平凡な少女だっただろうに。

こんな冴えない上官の下、トリューニヒトに代表される衆愚に堕し

た同盟政府の命脈を保つために、尊敬できる父親と争うなんてどう考えても間違っている。だが、軍人と政治家の役割は違う。軍人がその分を越えて権力を掌握しようというのならば、文民統制（シビリアンコントロール）に従う者として阻止しなくてはならない。

君が辞めないと言ってくれるのなら、私は君を解任はしない。救国軍事会議を成功させるわけにはいかない以上、私は君の父の敵ということになるだろう。だが、ヤン艦隊の一員である間は、それなりの盾になることができる。エル・ファシルで得た教訓だ。身内が罪を犯したとき、全く非のない者が一番に犠牲となることを。

あの時は、どうすることもできなかった。だが、今は一応は大将だ。お飾りの少佐よりはマシだろう。なにより解任したところで、生活が成り立つのか、帰る場所はあるのか。イゼルローンに残留するとしても、若く美しい女性がどんな心ない目に遭うのか想像もしたくない。自分の傍が彼女にとって、一番安全なのだ。皮肉なことに。

ヤンは首を振ると、執務室を出て会議室に向かおうとした。もう一杯ぐらい引っ掛けたいところだったが。全く、素面（しらふ）じゃやってられないことが多すぎる。

通路に出たところで、灰褐色の髪と目をした美丈夫と出会った。一部の隙もない敬礼と、映画俳優張りの笑顔を見せられて、美しき副官を馘首（かくしゅ）しなかったようだと言われた。

彼女ほど有能な副官はそうそういるものではない。そう返すヤンに、シェーンコップは意味ありげに笑ってこう言ってやった。

「素直じゃありませんな」

この魔術師ときたら、本当に素直じゃないし、腹の底を見せないし、

度し難いほど鈍感だ。ミス・グリーンヒルにあんな顔をさせるなんて、どんな魔術を使ったのやら。さっきまでの雪像の美女が、朝露を宿した薔薇に変貌していた。イゼルローン攻略以上の快挙には間違いなかろう。ヤン自身、気付いているのかいないのか。

ヤンを彼女が『部下』としてどう思っているのだろうかと、揶揄(やゆ)混じりに聞いてみると、そちらこそ部下として自分をどう思うと反問された。彼が指揮する艦隊とは正反対の不器用な逃げ方だった。

ふむ、グリーンヒル大尉、こいつは脈ありと見た。面白いんで黙って見守ることにしよう。それにしてもまだるっこしい。いい大人の男と女が何をやっているんだか、阿呆らしい。

それに、この上官に色々言うのはもっと面白い。矛盾の塊。誰よりも戦争嫌いな比類なき戦争の名人。五分と五分の条件で戦えば、あの金髪の坊やを凌ぐだろうと正直に誉めても、一言の下に切り捨てられた。

「そんな仮定は無意味だね」

いや、つれないことだ。それだけ戦略というものに重きを置いているわけだが、そんな思考法のできる軍人が同盟軍にさて何人いるだろうか。現在の同盟政府の駄目さは骨身に沁みて知っているはずだ。そう問い詰めても、クーデターよりも衆愚政治を選ぶのだとヤンは言った。

「最善手(ベスト)よりも最適手(ベター)を選びたいんだ」

なるほど。かの美女には悪いが、クーデター首謀者らの思考は、蜂蜜漬けのチョコレートも同然だ。早晩袋小路にぶち当たる。彼ら道化師(ピエロ)には徹底的に掃除をさせ、自らも汚れたところで、魔術師(マジシャン)がそ

いつらもダストシュートに突っ込んでやればいい。綺麗になったその後に、彼が権力を握って自由惑星同盟を再生させる。これこそがベターではないか。

その声と表情には、シェーンコップ自身が意図したよりも本気の色があった。たしかにドワイト・グリーンヒル大将は同盟軍内での声望は高い。だが、国民はどう思っているか。アムリッツァの大敗の責任者の一人で、左遷されても未だ高官だ。二千万人が還らなかった敗戦に対して、充分な引責を果たしていると評価してはいない。それどころか、冷や飯食いになったエリートどもの暴走と冷ややかに見ている。そこに、麾下（きか）の七割と、遠征軍の三割の生還の立役者が現れたならば、歓喜の声さえ上げてヤンを迎え、熱狂的に支持するだろう。

独裁者ヤン・ウェンリーの誕生だ。今の同盟政府の誰よりも、民主主義の理念を堅持する独裁者。これもまた矛盾だろう。本人は柄じゃないと否定しても、才幹は充分以上にあるとシェーンコップは見ている。不真面目に嫌々軍人をやっているのに、同盟軍史上最高の智将なのだ。いや、冠の同盟軍を外してもあながち外れてはいないだろう。

政治の場でもうまくやれると思うのだ。この場合、歴史上の名政治家に匹敵する必要はない。トリューニヒト最高評議委員長にヤン・ウェンリーが劣るとは思わない。

「シェーンコップ准将」

頭半分よりやや低い位置から、さっきまで呆気にとられた顔をしていた上官の声がした。

「なんです」

今はもう困った顔をしている。黒い髪を所在なげにかき回しつつ、シェーンコップに尋ねた。彼の考えを他人にも言ったのかと。

「とんでもない」

巨大な才能と平凡な感性、それを統合する人格と、何から何まで面白い上官だ。それをからかう楽しみを、他人に分けてやろうとは思わないシェーンコップである。

「なら結構……」

ヤンは、物騒な発言の部下に背を向けて、会議室へと歩き出した。同盟憲章で思想や表現の自由は認められているが、公序良俗に反しないかぎりという前提がある。この場の雑談で終わるならよしとするが、頼むから声高に言い立てないでほしいものだ。

人には分というものがある。これを法律で定めて、一人が巨大な責任を背負い込まずにすむ、それが民主主義の原点だ。所詮世の中凡人ばかり、頼りないから程々に任せるという人間不信が前提の制度である。ローエングラム候ラインハルトのような、冠絶した天才の出現頻度を考えると、より現実に即した考えだと思う。人口１３０億人のこの国全てを担える者はいないだろう。グリーンヒル大将も例外ではない。

会議室に向かう黒髪の下、ヤンの頭脳は急速に回転を始めていた。戦いが大嫌いなくせに、それについて考えることに無関心でいられない。知的遊戯としてなら、決して嫌いではない。そんな自分にほとほと呆れながら。

グリーンヒル大尉の処遇については、幕僚から出たのは賛同の声のみだった。ムライは冷静に沈黙と公平を保ち、フィッシャーの無口は

今に始まったものではないので、賛同とみて間違いなかろう。

もっと下の士官や下士官、兵士らからは父親に通じている恐れはないかという疑問も上がったが、これは同性の士官からの反論で完全に消火されてしまった。声を上げたのは要塞管理事務部門の若手達である。

娘というものは、中学校に入れば父親とはほとんど口もきかなくなる。一つ屋根の下に住んでいてもそうなのに、４年間士官学校で寮生活を送り、更に首都から三週間もかかる場所で暮らしている娘が、父親の目論見を知っているほうがおかしいと。とどめに、父親だって若い娘の事なんて分からないでしょ。

大いに説得力のある部下の言葉は、上司である二女の父の心に相当の痛手をもたらした。その後輩の後輩は、三人の姉の行状を思い返して、心から賛同した。

「うちの子は、絶対にそんな風にはならんぞ」

キャゼルヌは、むきになって末っ子長男に反論した。

「キャゼルヌ先輩、お嬢さん幾つでしたっけ？」

「今年で上は八つだ。下はまだ五つだぞ」

その反論にアッテンボローは得たりと頷いて、実体験を披露する。

「はーん、あと長くても五年ですね。俺の上の姉がそうでした。二語文以上の会話がなくなります。で、十年くらいの冷戦を経て雪解けが訪れますよ。

主導権は、いつだって娘のものですがね」

「それはおまえの親父さんの教育の問題じゃないのか」
「ああ、そいつは否定できませんね、あのクソ親父」
こっちの雪解けもまだ途上のようである。
「おまえもいい加減に和解するんだな。そうだ、おまえの家族は大丈夫なのか」
アッテンボローの父パトリックは、硬派リベラル系ジャーナリストとして、そこそこ高名な存在だ。軍事クーデターという暴挙には、真っ先に反論を叩きつけるだろう。ただ、クーデター一派はメディアや報道を封鎖、制限しているので上げた声も伝わらないだろうが。
「心配には心配ですが、幸い姉らは嫁に行って姓が変わっていますからね。
俺が名前を貰った母方の祖父さんは軍人でしたから、そう手出しはされないと思いますよ。
クーデター一派を支持する市民はいないでしょう。
下手に弾圧したら、自らの命脈を絶つことになる」
「ふん、そんな理詰めで考えられるなら、そもそもクーデターなんて起こさんよ。
ヤンじゃないが、まさかあの人がなぁ……もうすぐ最高評議会の開催だったというのにだ」
あと約一月後から開催される宇宙暦７９６年度の最終の定例評議会。ここで来年度予算が審議、可決されないと宇宙暦７９７年度はどこもかしこも金がない状態になる。後方作戦本部長の英断で配当された追加配分と、ドーソン統合作戦本部長代行の命令と同時に、補正

予算がついた状況のイゼルローンを除いては。

「それですよ。やつらはどうする気なんですかね。クーデターで政権を乗っ取っても、
税収や予算のプロは官僚ですよ。彼らがちょっと協力しなければ大混乱になるでしょう」

「たしかにな。どうしてもその手段に訴えるのなら、俺なら新年度早々にやるさ。
異動やら新卒者やらで命令系統自体が錯綜しているところを衝く。
金だって沢山あるからな。
将来の統合作戦本部長になろうかという人が、行動を起こす時期としてはお粗末すぎる。
こいつは、裏に何かあるな」

アッテンボローは、ラオに倣って感謝を捧げた。最悪よりはまし、たしかにそうだ。あのメンバーの中に、この先輩が加わっていなかったことは。考え込み始めたキャゼルヌに、明日の幕僚会議の開催の連絡が入ってきた。ついでに、だべっていたアッテンボローにも。もう一組の先輩と後輩は顔を見合わせた。いよいよ、出撃に備えた内容になるだろう。

「さあ、さっさと帰れ、後輩よ。俺はこれから留守番と遠足の準備にかからなくちゃならん。
おまえも遠足にそなえて、しおりの一つも作っておけ」

家庭生活のうかがえるお達しに、独身主義者は苦笑しつつ敬礼をした。

「は、了解しました、事務監殿」

「できれば、定例評議会に間に合う時期に解決するようにあいつに協力してやってくれ」

最大最強の敵、貧乏を憎むキャゼルヌである。その口調は真剣そのものだった。

「クーデター一味にとってもな、ヤンより手強い敵になるぞ。強引にいびつな予算を通したら、同盟自体が倒れることになる。時間とも戦いになるからな。

あいつはわかっているだろうから、おまえの方には言っておくぞ」

本当に、頭の上がらぬ人ばかりだ。最年少提督というのもなかなか大変だ。最年少司令官の重責には到底及ばないだろうが。今度は真摯な表情で、ふたたび敬礼をして退出する。キャゼルヌの言うとおり、分艦隊の運用案を策定するために。

紅茶を一杯　――辺塞寧日なし――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

辞令

イゼルローン要塞事務監　アレックス・キャゼルヌ少将

上記の者を、イゼルローン要塞司令官代理に任ずる。

宇宙暦七九七年四月十五日

イゼルローン要塞司令官兼同駐留艦隊司令官　ヤン・ウェンリー大将

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

出動命令

イゼルローン要塞駐留艦隊に出動を命ずる。
出動は宇宙暦七九七年四月二十日とする。
惑星ネプティス、カッファー、パルメレンド、シャンプールの武力叛乱鎮定及び
惑星ハイネセンの治安回復を目的とする。

宇宙暦七九七年四月十五日

イゼルローン要塞司令官兼同駐留艦隊司令官　ヤン・ウェンリー大将

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊

布告された二つの文書で、イゼルローン要塞は騒然となった。特に後者によって。同盟軍同士が相打つという、史上初の事態となるのかも知れなかった。軍人、軍属はまだしも、その家族である民間人に走った動揺は大きい。

出動の準備に、保護者愛飲の紅茶のティーバッグを買いに出掛けたユリアンにまで、ヤンの勝算についての疑問を投げかける人間がいたという。亜麻色の髪をした、繊細な美少年は威厳さえ漂わせて宣言した。

「ヤン・ウェンリー提督は、勝算のない戦いはなさいません！」

弟子の報道官としての意外な才能に、黒髪の魔術師は苦笑して賞賛を贈った。美少年で頭と性格がよくて、スポーツも万能。おまけに家事も達人である。ヤンが教える戦略戦術のみならず、白兵戦や射撃、単座式戦闘艇スパルタニアンの操縦も、それぞれに非凡な才能を見せはじめている。ヤンにとっては、出来すぎるほどの被保護者で、濃(こま)やかな愛情を注いでいる。父と兄の中間点の年齢差も幸いしたのだろう。ヤンにとっては、父を亡くした時にいて欲しかった存在として、少年に接しているのではないか。彼の後輩と先輩はそう見ている。

家事の役割分担は完全に逆転しているが、これは仕方がない面もある。宇宙船暮らしということで、炊事自体の経験がほぼ皆無。家事も多くは宇宙船独特の機器を使用する。いわゆる家電は士官学校に入

学するまで見たことがなかった。今も苦手な理由にするのは、キャゼルヌ曰くお坊ちゃん育ちの怠慢だろう。

一方、ユリアンの実技の師匠の採点は案外と辛い。

器用貧乏のおそれを指摘したのは、白兵戦の師匠であるシェーンコップ准将。

おまえには、ヤン・ウェンリーという先行者がいるからこそだと言ったのはポプラン少佐。

これには反論したのはキャゼルヌ少将。なんでも出来るのに越したことはない。師の不得意分野に、生徒の得意分野をぶつければいいのだと。ヤンに白兵戦で勝ち、シェーンコップに空戦で勝ち、ポプランには戦略戦術で勝つ。

まあ、出来がいいゆえの贅沢な不満というやつだろう。保護者はそう思うのだ。もともと適性調査ぐらいのつもりでいたのに、全部に望外の才能を現してしまったのだ。しかし、あの時に講和が結べていたら、この子の才能を戦争なんかに空費させなかったのに。歴史にもしもはない、というのは彼の持論だが、そうやって自分を納得させ諦めをつけてきたことがいくつあることだろう。

出撃までのぽっかりと空いたエアポケットのような日々。無論、デスクワークはあるし、艦隊運用案も詰めなくてはならない。しかし、艦艇は最終点検に入っているし、資金や物資の節約を考えると実働演習が出来ないのは痛い。ユリアンに言ったように、四ヵ所すべての叛乱を叩いて回るのは非効率に過ぎる。だが、情報が揃わない時点で、憶測に基づいて突っ走るのは百害あって一利なしである。これは少々言い訳がましいか。

だが、留守前に決裁しとけと積み上げられた書類の山よ。引き続き副官の座にいる、フレデリカ・グリーンヒルが的確に分類し、概要を

要約してくれているからサインするだけで済むのであった。そもそも、この机上にある時点で、アレックス・キャゼルヌという強力な門番のお墨付きを得ているのだから、ヤンはサイン記載装置でしかない。頭と右手以外は不要である。

司令官代理になるのを、前倒してくれてもいいのだが。いや、むしろしてほしい。諸手を上げて歓迎する。無論、面と向かっては言えない。彼の舌鋒が火を吹くに決まっている。一ヶ月半も出張していて、二週間と空けずにまた出撃。本当に申し訳なく思うヤンである。

だが、その事務監は別の見方をしていた。今は拘禁されている統合作戦本部長代理のことだ。遥かに若い大将への嫉(そね)みは無論あるだろう。しかし、かつて冷戦の果てに少将たる彼を追い払った、キャゼルヌ大佐への恨みを忘れてはいまい。ちなみに、その職場の他の面々はすべて大佐に味方した。もう一人、生意気な生徒が同盟軍史上最年少の提督として、分艦隊指揮官を任されている。一石三鳥で報復ができる。

「そうきたか……よろしい、受けて立ってやる」

事務監の不吉な呟きに、部下らは礼儀正しい沈黙で報い、上官一人がなだめ役に回った。キャゼルヌの同格者は三名いるが、年長者も心情的には同意し、最年少者は声に出して共同戦線を形成しそうなので、孤立無援の大将閣下である。再度の留守番の事務引き継ぎの場、司令官執務室での一幕であった。

「まあまあ、落ち着いてください。後方と前線が反目しあったら、クーデター派の思う壺ですよ」

そして、ローエングラム候ラインハルトの。

「ふん、このままじゃ自由惑星同盟軍の実質的中心が、ここになるかもしれんぞ」

キャゼルヌの毒舌は、かなり際どいものだった。白き魔女のご亭主にも、予言の才があるようだ。

「そうならないように出撃するんですから。留守番をまたよろしくお願いします。

今回は、シェーンコップ准将と薔薇の騎士連隊（ローゼンリッター）をお借りしますが」

「そりゃ構わんが、なんでまた」

「今回の鎮定先は、星間戦闘能力のない惑星が混じっています。

鎮圧に手間を取らせるための、巧妙なものだと思いますけれどね。

彼らの卓越した陸戦能力を、死蔵するのはもったいないでしょう」

「そうか。留守中に連中が帝国に呼応するのを警戒していたわけじゃないんだな」

キャゼルヌの言葉に、ヤンの黒い目が丸くなった。次いで、軽い笑い声を上げる。

「それはまた、誰が言い出したんです？　ポプラン少佐あたりかな」

「ほう、当たりだが、ヤン司令官は笑い話だと思うのか」

「ええ、キャゼルヌ事務監がいらっしゃるのに、どうやってその為の武器や食糧、資金を

誤魔化しておけるんです？　先輩が言う時点で冗談だと分かりますよ」

「なるほどなぁ。奴らがおまえさんに忠誠を向けるのが分かる気がするよ」

人を見抜き、信頼する美徳。この頼りなくも天賦の才を併せ持つ青年を、支えてやりたくなる。それがヤン・ウェンリーのもう一つの魔力なのだろう。

「いやぁ、トイレにまで付いてくるのはやめて欲しいんですがね」

「馬鹿か、あそこが一番危ないだろう」

死角は多いし、男であれば誰が出入りしても不審には思われない。清掃に紛れて、爆弾や薬物を仕掛けるのも容易い。

「まあ、そりゃ仰るとおりなんですが。先輩も気を付けてください」

「分かっているさ。用足し中に死ぬなんて、一番不名誉な死に方だぞ。ユリアンを連れていくのもそれでなんだな」

「連れて行きたくはありませんが、この要塞内でクーデターに賛同する者が出ないとも限りません。それが心配なんですよ。あの子を人質に、クーデター派に下れと言われてもそれはできません。でも、あの子を失いたくはないんです。艦隊戦で負けたらどうなると言われると、反論はできませんがね」

厳密に言うと、自分の手の届かない場所で家族が死ぬのには耐えられない。

「ヤン・ウェンリーは勝算のない戦いはしないんだろう？

確かに、おまえさんの傍が一番安全さ。薔薇の騎士らもついているんだろう」

「それにですね、シェーンコップ准将が言うには、私よりユリアンの方が強いそうです」

「おまえさんもちょっとは鍛錬しとけ」

ヤンは肩を竦めた。

「今回はドーソン統合作戦本部長代行のお達しであるから、袖の下はいらんぞ。

送別会を開く余裕はないが、慰労会なら何度でも開いてやる。

必ず、無事に帰ってこい。いいな」

「楽しみにしていますよ。その時は、手土産を奮発しますから。

それと、キャゼルヌ事務監の部下に伝えてください。グリーンヒル大尉への応援を感謝すると」

「ああ、あれか……」

キャゼルヌは渋面になった。部下の女性士官らの言葉は、グリーンヒル大尉への援護射撃として絶大な効果があったが、娘を持つ父の心にも無数の弾痕を穿った。鉄灰色の髪の後輩も、女性陣に賛同。キャゼルヌもまた孤立無援であった。

「俺は聞きたくなかったがな。いいか、ヤン、うちの子達はそんな風にはせんからな」

「ええ、マダム・キャゼルヌがいるかぎりは大丈夫だと思いますよ」

穏やかな口調で、父ではなく母への信を保証する人の悪い後輩であった。キャゼルヌは薄茶色の眼で睨んでやったが、後輩はどこ吹く風だった。

「それにねぇ、個人差が大きいと思うんですよ。

私なんかこんなに不出来な保護者なのに、ユリアンは慕ってくれます。

あの子を連れて来てくれてありがとうございます。

必ず勝って戻ってきます。留守をよろしくお願いしますね」

「……分かった。ヤン司令官、航海の無事を祈る」

それ以上の言葉は見つからず、また不要でもあった。辺塞の寧日はまもなく終わりを告げる。

ヤンの懸念はハイネセンにあった。ヤンの数少ない、旧くからの友人、ジェシカ・エドワーズである。士官学校時代の親友、ジャン・ロベール・ラップ大佐の婚約者だった。アスターテの戦いで親友が戦死し、彼女は政界に身を投じた。反戦と和平を掲げて。これこそが、真っ当な手段による同盟政府の改革というものだ。本来なら。

彼女は不正や理不尽に対して真っ向から正論を述べる人だ。戦死研究科廃科の反対運動で、当事者のヤンやラップを凌ぐほどの組織力と行動力を見せてくれた。だが、今はそれこそが心配だった。自らが折れない人ほど、他人に折られてしまうから。

ラップと彼女は、ヤンにとって大事な人たちだった。家族と家同然の船を失い、あの時に一緒にいられればと悔やんでいた彼を生きているのも捨てたもんじゃないと思えるようにしてくれた。

そして、キャゼルヌやアッテンボロー、校長のシトレ。彼らは、生

きていくのを楽しんでもいいのだと思わせてくれた人々だ。人は変わってゆく。12歳の被保護者が出来て、敵を殺しても帰ってこなければという思いを抱くようになった。部下ができて、この人たちも家族のところに帰してやらなくてはと痛感する。一人でも多くの部下を生還させるために、部下の誰かを死なせ、倒す敵にも家族や愛する人がいるとしても。

変わらぬ思いを抱き続けること、それもまた一つの奇蹟、あるいはなんらかの欠落だ。十歳の怒りと友情が十一年経っても変わらないでいられるか。人の心と命の儚さを思えば、ただ一人に全てを賭ける専制や独裁は危ういとヤンには思える。

どんな天才も無謬ではなく、不老不死ではない。あの黄金の有翼獅子（グリフォン）はそれを知らないように思う。死の不可逆性を思えば、あの焦土作戦もこのクーデターの謀略もできないだろう。それを知っても戦いに邁進できるのなら、彼とは真の意味では分かりあえない予感がする。

ヤンは首を振って、書類のサインに戻った。あと三日でこれが片付くんだろうかとうんざりしながら。艦隊の編成に伴い、ムライやフィッシャー、シェーンコップ、アッテンボローからも続々と戦闘計画書が上がってくる。先にサインだけして、後で写しを読みふけることになるだろう。そういえば、要塞防御演習結果報告書もまだ手をつけたばかりだった。

黒い髪をかき混ぜて、胸中で呪文を呟く。『これも給料のうち』

そう、もう十年も給料を貰ってきたのだ。やや情けないが、大事な人たちのほとんどは軍の中で知り合った。もしも当初の希望どおりの人生を歩めたら、巡り合うこともなかっただろう。

軍は暴力装置だという持論に変わりはないし、戦争がなくなること

も希求している。だが、同盟軍にそれなりの愛着はあるのだった。瓦解しかけているのは確かだが、それが国を滅ぼして終焉を迎えるのを座視するわけにはいかなかった。

何よりも、まだ年金を貰っていないんだから、掛金分は貰わないと採算(もと)がとれやしない。この政府を選んでしまった国民として、責任は果たさなくてはならないのだ。たとえ、トリューニヒトに直接票を投じてはいなくとも。みんなが自分の選択に対して責任を負うのが民主主義だ。ヤンは、そちらのほうがましな制度だと思う。現状では溜息しかでてこないが。

ふいに、鼻先に芳香が香る。最初に会った朝には、引き摺っていたトランクよりも小さな少年だった彼の家族が、琥珀色を湛えた白磁を机上に置いてくれる。少年の初任給で買った、ヤンへのプレゼントだった。

「ヤン提督、どうぞ」

「ありがとう、ユリアン。後でもう一杯貰えるかな。今日はブランデーは入れなくていいから」

少年のダークブラウンの目に、おやという表情が浮かんだ。ヤンはちょっと反省する。

「これを読んでると眠くなってきそうだ。あと三日で片付けないといけないんだが」

「すごい量ですね」

「そうなんだよ。おまえは定時になったら帰りなさい」

「提督、あんまり無理をなさらないで下さいね。
今晩はアイリッシュシチューにしますから、早く帰ってきてください」
「ああ、ありがとう。じゃあ、そいつを目当てに頑張るとしよう」
またこの場所で、少年の紅茶を味わうことができるように、この書類を提出してきた幕僚らを失うことがないようにとヤンは願う。ブランデーはその時に、たっぷりと入れてもらうことにしよう。
宇宙暦七九七年四月二十日、ヤン艦隊出撃す。
銀河英雄伝説外伝ＩＦ　辺塞寧日編　ヤン艦隊日誌　了